

堺市常磐町・松原市天美西

大和川今池遺跡Ⅰ

—難波大道の調査—

都市計画道路大和川線建設に伴う発掘調査報告書

2009年7月



1. 難波大道全景 (南から) 3・4tr.第3面



2. 手前中央、調査区上空から、北、難波宮方向を見る。

序 文

大和川今池遺跡は、堺市・松原市・大阪市にまたがって所在する遺跡です。

本発掘調査の契機となった都市計画道路大和川線は近畿自動車道と大阪湾岸線を結び、大阪南部地域において臨海部と内陸部を連絡し、東西の交通を円滑にするためのもので、現在も建設中です。

遺跡北部を横断する大和川は、1704年（宝永元年）に中甚兵衛らによって付け替えられたもので、それ以前は河内平野を北に流れていました。

当遺跡では古墳時代から中世に至る各時代の集落や耕作関連の遺構が見つっています。また、周辺には「古事記」や「日本書紀」に見える依網屯倉の存在が想定され、古代に作られたと考えられる溜め池、依網池が大和川付け替え以前には遺跡西隣に広々と広がっていた事が分かっています。

また、遺跡の南側には古代の官道、大津道を受け継いだと考えられている長尾街道が通り、大和と大阪湾を結ぶ交通の要衝でもあったと思われます。

今回の調査では、昭和55年に遺跡内で初めて発見された「難波大道」の跡が再び検出されました。

「難波大道」とは、古代に難波宮から、上町台地東斜面をまっすぐ南に下るように作られた道で、古代律令国家成立期の象徴ともいべき官道です。いつしか数ヶ所に「大道」という地名を残すのみで消えていった道ですが、その跡は遺跡内では河内国と摂津国の国境として、現代の堺市と松原市の市境にまで受け継がれていました。

今回は、今までの調査で不明確だった、難波大道の作られた時期や廃絶の様相をより明確にする事ができ、古代国家における道のありかたに関する重要な成果をあげる事ができました。

最後になりましたが、本調査の実施にあたり、多大なご協力を賜った大阪府富田林土木事務所、堺市建設局、大阪府教育委員会をはじめとする地元の皆様へ深く感謝すると共に、今後とも文化財行政により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願いいたします。

平成21年7月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、都市計画道路大和川線の建設に伴って実施した大和川今池遺跡07-1の発掘調査報告書である。なお、大和川今池遺跡は大阪府堺市常盤町、松原市天美西・天美我堂・天美東、大阪市東住吉区・住吉区に所在する
2. 調査は大阪府富田林土木事務所・堺市から財団法人 大阪府文化財センターが委託を受け、大阪府文化財保護課の指導のもと、調査を行った。委託・調査期間は平成19年11月20日から平成21年2月27日までである。平成21年3月2日から平成21年4月30日まで遺物整理作業を行い、平成21年7月28日に本書の刊行を以って事業を完了した。
3. 発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。

[調査] 平成19年度

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、南部調査事務所所長 大野薫、

調査第一係長 藤澤真依、副主査 三宮昌弘、技師 福佐美智子、専門調査員 関本優美子

[調査] 平成20年度

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、南部調査事務所所長 大野薫、

調査第二係長 森屋美佐子、副主査 三宮昌弘、技師 福佐美智子（～平成21年1月31日）、

専門調査員 水野恵利子

[整理] 平成20年度

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、南部調査事務所所長 大野薫、

調査第二係長 森屋美佐子、副主査 三宮昌弘、専門調査員 水野恵利子

[整理] 平成21年度

調査部長 福田英人、調整グループ長 金光正裕、調査（南部）総括主査 森屋美佐子、

副主査 三宮昌弘

4. 遺物写真撮影に関しては、調査グループ主査 片山彰一が担当した。
5. 今回の調査において、以下の分析業務を委託して行った。
平成20年度 花粉・珪藻分析 株式会社 古環境研究所
6. 本書の作成にあたっては、文章執筆は第1章・第2章を福佐が、その他を三宮が行った。挿図は福佐・水野が作成した。表是水野が作成した。編集は三宮が行った。
7. 発掘調査および整理作業に際し、次の方々からご協力・ご教示を頂いた。記して感謝いたします。

（順不同・敬称略）

青木敬・稲田孝司・岡本武司・小田裕樹・木本雅康・京嶋覚・榮原永遠男・佐藤聖聖・清水和明・積山洋・寺井誠・中野咲・森村健一・若杉智宏・山川均・米川裕治

8. 本調査で出土した遺物および、写真・実測図などの記録類は財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1. 実測図の基準高は、T. P. 値（東京湾平均海面）を使用している。
2. 平面図の座標値は、世界測地系に基づく国土座標第IV系で表記している。方位は座標北である。座標単位はすべてmであるが、図中では単位を省略している。
3. 発掘調査および整理作業については、(財)大阪府文化財センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】」（2003年）に準拠した。
4. 地層および土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人 日本色彩研究所監修を用いた。
5. 検出した遺構は順に通し番号をつけ、その後ろに遺構種別を付している。番号・種別は基本的に調査時のものをそのまま本報告書でも使用している。
6. 遺構平面図は400分の1、遺構図は20分の1を基本とし、必要に応じて他の縮尺を使用している。遺物実測図は石器類と銭は4分の3、他は4分の1で掲載している。
7. 遺物実測図に使用する線は基本的に、調整境は0.5mm開きの破線で、同種調整境は二つ開き破線、異種調整境は一つ開き破線。屈曲の線は鋭いものが実線、緩いものが1mm以上開けた二つ開き破線とした。器表の軸葉・付着物の端、断面の粘土接合ラインは点線で表した。
8. 遺物の型式・年代観に関しては、主に以下の文献を参考にした。
平安学園考古学クラブ1966年『陶邑古窯址群Ⅰ』、大阪府教育委員会1978年『陶邑Ⅲ』、古代の土器研究会1992年『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』、古代の土器研究会1997年『古代の土器Ⅴ 7世紀の土器』、古代学協会・古代学研究所1993年『平安京提要』、中世土器研究会1995年『概説 中世の土器・陶磁器』

目次

巻頭写真

序文

例言・凡例

目次

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境……………1

第2節 歴史的環境……………2

第2章 調査にいたる経緯と経過……………5

第3章 調査の方法……………6

第4章 調査成果

第1節 基本層序

1. 各層の様相……………7

第1層・整地土系第1-1層・

耕土系第1-1層・第2層・

コンポリュートラミナ・第2-2層・

第3層・第4層・第5層・第6層・第7層

2. 調査区の堆積状況のまとめ……………17

第2節 第1面相当面 (旧落堀川肩部の調査)

1. 概観

(1) 現況と調査の経緯……………19

(2) 層位関係……………19

2. 各面の概観

(1) 第1面相当面……………21

(2) 第1面……………21

3. 主な遺構

(1) 段差……………22

(2) 331畦畔及びそれに伴う浸蝕痕 ……23

(3) 土坑……………25

189土坑・190土坑・272土坑

(4) 井戸……………27

226井戸・273井戸

(5) 落込……………30

315落込

4. 旧落堀川肩部段差下平坦面耕土包含 遺物……………32

5. 小結……………32

第3節 第1-2面

1. 概観……………33

2. 主な遺構

(1) 東西方向坪境……………33

25溝・349畦畔・357畦畔

(2) 南北方向坪境……………36

403畦畔・203溝・407溝

3. 耕土系第1-1層・第1-2層等包含 遺物……………38

第4節 第2面

1. 概観……………40

2. 主な遺構

(1) 耕地区面に伴う畦畔・溝・段差…………43

155畦畔・158畦畔・159溝・160溝・

161溝・13溝・1溝・25溝・240溝・

241畦畔・40溝・45段差・245段差・

46畦畔・390畦畔・391溝・392溝・

393畦畔・593畦畔・475段差・465段差

(2) 土坑……………48

154土坑・157土坑・32土坑・47土坑・

56土坑

(3) 井戸……………49

153井戸・156井戸

3. 第1層の包含遺物

(1) 包含遺物の構成……………51

(2) 主な出土遺物……………53

4. 第2層包含遺物

(1) 包含遺物の構成……………56

(2) 主な出土遺物……………56

5. 小結……………64

第5節 第3面 (「難波大道」の調査)

1. 概観……………67

2. 「難波大道」関連遺構……………70

207畦畔・115溝 (「難波大道」西側溝)・

185溝 (「難波大道」東側溝)

「難波大道」両側溝間の規模

「難波大道」盛土残存部 (183畦畔・130畦畔)

209土坑・202落込	6. まとめ	110
3. 耕地区画関連遺構	II 珪藻分析	
183畦畔・130畦畔・59畦畔・426畦畔・ 254畦畔・北西側坪内耕地区画 南西側坪内耕地区画・東側坪内耕地区画	1. はじめに	115
4. 第3層包含遺物	2. 試料	115
5. 小結	3. 方法	115
第6節 第4面	4. 結果	115
1. 概観	5. 珪藻分析から推定される 堆積環境	117
2. 遺構	6. まとめ	117
186溝・187溝	第3節 分析結果を受けて	
3. 第4層包含遺物	1. 花粉分析の結果	121
4. 小結	2. 珪藻分析の結果	122
第7節 第6面	3. まとめ	123
1. 概観	第6章 総括	
2. 遺構その他	第1節 今回検出の「難波大道」について	
(1) 木根痕	1. 造成時期について	124
(2) 低湿地	2. 大道の規格性について	
(3) ビット	(1) 道路幅	125
485ビット・486ビット	(2) 側溝規模	127
3. 小結	(3) 方位	128
第8節 石器類	(4) 整地土・盛土	129
1. 概観	3. 北隣調査区での未検出 の問題について	130
2. 遺物の説明	4. 大道廃絶時期とその様相	131
3. 小結	5. 大道と条里制地割り	131
第5章 自然科学分析	6. まとめ	132
第1節 分析の目的と資料の採取	第2節 耕地区画の変遷	
1. 立地環境と第6・7層の堆積時期・ 環境の解明	1. 「難波大道」以前の耕作地存在の 可能性	133
2. 第3層の性格の解明	2. 条里制地割り施行当初の状況	134
第2節 自然科学分析	3. 条里制地割りの変遷	135
I 花粉分析	4. 大和川付け替え	135
1. はじめに	5. まとめ	136
2. 試料	第3節 その他の成果	
3. 方法	1. コンポリュートラミナ	137
4. 結果	2. 下層確認による立地の確認	137
5. 花粉分析から推定される 植生と環境	3. まとめ	138
109	写真図版	

挿図目次

図1	調査地位位置図	1
図2	遺跡分布図	3
図3	トレンチ位置図	5
図4	1～3トレンチ南東壁断面図その1	8
図5	1～3トレンチ南東壁断面図その2	9
図6	2トレンチ北東壁断面図	12
図7	4トレンチ南西壁・10トレンチ北東壁 断面図	13
図8	9トレンチ北東壁・11トレンチ中央アゼ 断面図	15
図9	9トレンチ第1面相当段差下各面 遺構平面図	20
図10	331畦畔断面図	24
図11	272土坑断面図	26
図12	226井戸平・断面図	27
図13	273井戸平・立・断面図	29
図14	315落差断面図	30
図15	第1面相当面遺構出土遺物	31
図16	第1-2面遺構平面図	34
図17	第1-2面25溝・第2面59・241・349・ 357・390畦畔断面図	35
図18	第1-2面遺構出土遺物	37
図19	耕土系第1-1層・第1-2層・第0層・ 第1層・鋤溝・攪乱出土遺物	40
図20	第2面遺構平面図	41
図21	159～161溝断面図	44
図22	154・157土坑断面図	48
図23	153・156井戸平・断面図	50
図24	第2面遺構出土遺物	51
図25	第1層出土遺物	54
図26	第2層出土遺物その1	59
図27	第2層出土遺物その2	60
図28	第3面遺構平面図	65

図29	難波大道平面図	68
図30	難波大道廃絶後平面図	69
図31	207畦畔平面図	70
図32	115溝(難波大道西御溝)・185溝 (難波大道東側溝)断面図	71
図33	183畦畔断面図	74
図34	209土坑平・断面図	76
図35	202落差平・断面図	78
図36	254落差平・断面図	83
図37	第3面遺構出土遺物	85
図38	第3層出土遺物	87
図39	第4面遺構平面図	91
図40	第4層・第4面186溝出土遺物	91
図41	186・187溝断面図	93
図42	第6面遺構平面図	95
図43	第6面木根痕断面図	98
図44	485・486ピット断面図	99
図45	出土石器その1 (石鏃・石錐・石核)	101
図46	出土石器その2 (未製品・二次加工あり)	103
図47	出土石器その3 (剥片・チップ)	105
図48	土壌サンプル採取地点	106
図49	1大和川今池遺跡07-11における花粉 ダイアグラムその1	113
図50	1大和川今池遺跡07-11における花粉 ダイアグラムその2	114
図51	1大和川今池遺跡07-11における珪藻 ダイアグラム	120
図52	既往の調査で検出された難波大道・126	

表目次

表1	1～3トレンチ南東壁(図4・5) 土色	10
表2	耕土系第1-1層遺物破片数集計表	38
表3	第1-2層遺物破片数集計表	39

表4	第1層遺物破片数集計表	52
表5	第2層遺物破片数集計表	57
表6	第3層遺物破片数集計表	86
表7	大和川今池遺跡07-1における 花粉分析結果	112
表8	大和川今池遺跡07-1における 珪藻分析結果	119

写真図版目次

図版1

2 tr.北東壁断面・南東壁断面・185溝内コンボリ
ユートラミナ・9 tr.北東壁断面

図版2

9 tr.第1面相当面下層粘土上面全景

図版3

9 tr.第1面相当面下層粘土下面全景

図版4

331畦畔・331畦畔断面・190土坑断面・272土坑・
272土坑断面・226井戸・273井戸

図版5

273井戸・315落込断面・25溝・349畦畔・357畦
畔・156井戸・10 tr.第1-2面全景

図版6

11 tr.中央トレンチ断面・11 tr.第1-2面全景

図版7

12 tr.第1-2面全景・1 tr.第2面全景

図版8

2・3 tr.第2面全景

図版9

4・6 tr.第2面全景

図版10

8・10・11 tr.第2面全景

図版11

12 tr.第2面全景・241畦畔・25溝・240溝・

390畦畔・154土坑断面・153井戸断面

図版12

1・2 tr.第3面全景

図版13

3・6 tr.第3面全景

図版14

8・10 tr.第3面全景・115溝・115溝断面

図版15

11 tr.第2-2面全景・12 tr.第3面全景

図版16

3・4 tr.第3面全景・185溝

図版17

183畦畔・115溝

図版18

202落込・202落込断面

図版19

115溝・185溝断面・183畦畔・183畦畔断面

図版20

209土坑・202落込・207畦畔・

2 tr.第4面全景

図版21

3・8 tr.第4面全景・186溝・187溝

図版22

186溝・187溝・11 tr.第4面全景

図版23

2・3 tr.第6面全景

図版24

3・6 tr.第6面全景

図版25

10・11 tr.第6面全景

図版26

8・12 tr.第6面全景・第6面木根痕

図版27

第6面木根痕断面・485ピット・486ピット・

5 tr.完掘状況

7 tr.全景・最終掘削面状況

図版28

第1面相当面遺構出土遺物

図版29

25溝・側溝・攪乱・第1層・532ピット
出土遺物

図版30

1：第1層出土遺物、2以下第2層出土遺物

図版31

第2層出土遺物

図版32

1：大道盛土出土、2～4：202落込出土、

5：183畦畔出土、6：第3層出土遺物

図版33

第3層出土遺物

図版34

石器類 石鏃

図版35

石器類 剥片・チップ類

図版36

花粉分析 花粉・胞子顕微鏡写真

図版37

珪藻分析 珪藻顕微鏡写真

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境

大和川今池遺跡は大阪府の中部、松原市天美西・堺市常盤町を中心として東西1.45km、南北1.5kmに広がる遺跡である（図1）。遺跡地内の北に大和川が西流し、南には南東から北西に向かう西除川が流れている。

調査地は遺跡の北部である、堺市北区常盤町3丁・松原市天美西8丁目地内に位置する。近畿日本鉄道南大阪線河内天美駅から北東に約1.2kmの大和川南岸堤防と今井戸川、今池水みらいセンターとの間に位置する。

地形環境は、西側に上町台地南辺から続く我孫子台地、東に北流する旧西除川が流れる。調査地はこの台地の低位段丘から、台地を開析して北流する旧西除川水系によって形成された氾濫原にかけ立地している。この旧西除川は大阪狭山市の狭山池から流れ出ており、更に東を流れる東除川と共に北流していた。この北流する旧西除川や旧大和川などによって河内平野にたびたび洪水被害をもたらしてきた。このため1704（宝永元年）年に江戸幕府によって大和川付け替えが行われた。これにより北流していた旧大和川は大阪府柏原市付近で西流し大阪湾に注ぐようになった。調査地の南を大和川と平行して流れる今井戸川はこの大和川の付け替えに伴い掘削された人工河川である。これは北流する東除川・西除川・今井戸川などの中小河川や用水路の水が新大和川の南堤によってせき止められるため、船橋村（船橋町）より浅香谷口までの約13.2kmにわたり、西に流すために南堤に平行して掘削された。かつてはこの掘削

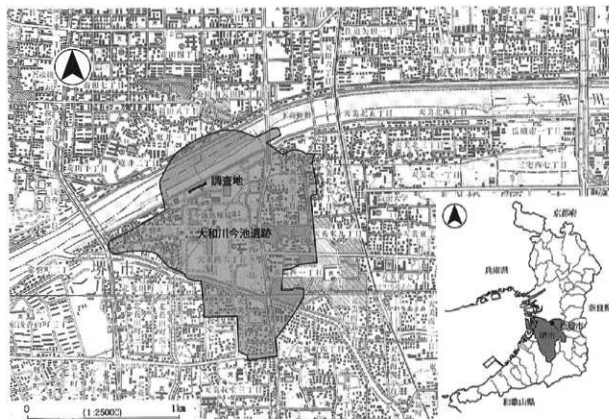


図1 調査地位置図(国土地理院 1:25000「古市・大阪東南部」平成14年をもとに作図)

された区間全てを落堀川と呼ばれていた。現在は藤井寺市大井2丁目から西流し大堀町で東除川と合流し、一旦大和川に注ぎ込み、そして分離された落堀川は今井戸川と名を変えて西流し調査区の西側、堺市常盤町で大和川と合流する。

また松原市内では旧大和川などの河川により浸食された谷地形を利用し、灌漑用に大小の溜池が堀削された。遺跡地周辺はこれら溜池が点在する田園地帯であったが現在は宅地化が進んでいる。

第2節 歴史的環境

大和川今池遺跡でまず特筆すべき遺構は「難波大道」の存在である。難波大道とは難波宮から南にのびる道路である。この「難波大道」は1970（昭和45）年に岸俊夫と足利健亮の両氏が1866（明治19）年の「大坂実測図」から難波宮の中軸線を南に延長した線上に、四天王寺東彌に残る方格地割が一致することや「大道」の字名が見られることから、ここに難波宮から上町台地を南下し和泉に至る直線道路の存在することを推定し、これに丹比道・大津道が交差すると考えられた（岸1970、足利1970）。足利氏はさらに河内・和泉国境まで南下するとした。

そして1980年の大和川下流西側流域下水道今池処理場建設に伴う大和川・今池遺跡の発掘調査において第7地区で東西に溝を伴う道路跡が南北40mにわたり検出された。これに先立つ第1・6地区の調査において第1地区で西側溝、第6地区で東側溝が検出されており、これらの遺構も含めると約170mになる（森村1981）。その後の1994年度の調査でさらに北へ約30mの地点でも東西側溝が検出され、これにより約210mにわたり検出されたことになる。

この遺構が岸俊夫・足利健亮両氏の推定された位置と一致することから、これが難波宮から南下する道路跡と考えられた。この道路の名は日本書紀などの文献に該当する固有名詞の記載がないため、「日本書紀」推古天皇二十一年（六一三）十一月条に「作掖上池・畝傍池・和珥池。又自難波至京置大道。」（掖上池・畝傍池・和珥池作る。又難波より京に至るまでに大道を置く）との記述などから「難波大道」と命名され、これ以降この道路は難波大道と呼ばれることとなった。

さらに調査地の南1.75kmには東西方向に古代の大津道を踏襲したと推定される、長尾街道が通っている。この大津道は堺市大小路町付近を西の起点として、伝反正天皇陵の北を通り、天美我堂で難波大道と交差し、東へ進み松原市南新町・高見町を経て藤井寺市岡に至る。1982（昭和57）年の松原市上田2丁目発掘調査において幅1.7m、深さ0.3mの側溝が検出された。検出された側溝は南側溝にあたり、6世紀末から7世紀初頭の須恵器片が出土している。大津道の南約1.9kmには古代の丹比道と推定される竹内街道が平行して走り、堺市野速町から松原市岡町を経て羽曳野市に至る。また遺跡の東には中世から近世にかけて高野詣などで発展した下高野街道が大和川の下高野橋から南東方向に通っている。

大和川今池遺跡における各時代の集落様相は古墳時代前期に遺構や遺物がまとまって検出されている。それ以前は旧石器～縄文時代の石器が出土した地点が見られ、また弥生時代後期の土坑が検出された地点もあるが、集落としてのまとまった様相はみられない。6世紀前半以降7世紀にかけて掘立柱建物建物群など多くの遺構・遺物が検出されている。そして平安時代末～鎌倉時代末にかけての蓮華文・巴文の軒瓦、軒平瓦が土坑から多量に出土し、その調査地点の南側の字名が「観音堂」であることから廃寺の存在が想定されている。

次に調査地の西には依網池跡遺跡がある。この依網池は「日本書紀」崇神六十二年の条に「冬十月に依網池を造る」、推古十五年の条に「河内国に戸笏池・依網池を作る」のように日本書紀にもたびたび

記事が記されている池であったが、1704（宝永元）年の大和川付け替えによって南北に分断され、その大半が失われた。大和川付け替え後に作成された『淀川大和川筋之絵図』（西田2008）にはこの依網池が味南門池の名で描かれている。さらにその後の耕地開発に伴い潰廃されていき、大阪市住吉区夷井2丁目の式内社大依網神社の南西に池の一部が残っていたが、現在は埋め立てられその姿をとどめていない。そのため依網池の正確な位置や規模についてこれまで各分野から研究がされている。池は北方および東方に展開する、台地面の浅谷や氾濫原における耕地開発・灌漑のために、現在の大阪市住吉区夷井8丁目から堺市常盤町3丁にかけて、日本書紀の記述から遅くとも7世紀初頭には築造されたと考えられている。

さらに口下氏は段丘面が緩やかに北東方向に向かって傾斜する標高10m付近において、東側に続く氾濫原との接点を選定して北と東に堤防を造り、南の台地面から流下する旧西除川の河水の一部を集水し

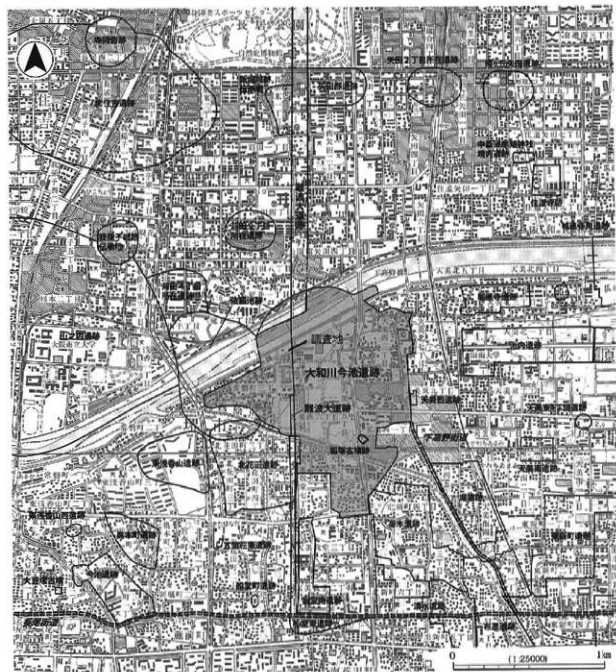


図2 遺跡分布区(国土地理院 1:25000「古市・大阪東南部」平成14年をもとに作図)

たと考えられている（日下1980）。これによると難波大道からは西に約200mに依網池東堤防が位置することになる。

堺市浅香山町4丁目における東浅香山遺跡発掘調査では池底に堆積していたと考えられる泥土が広範囲に検出され、泥土からは7世紀前半を中心とした遺物が出土し、花粉分析の結果は湿地生植物のガマ属・ミズアオイ属・スイレン属・ヒシ属・サンショウモ属などの花粉化石が特徴的に検出されている。また周辺の試掘調査成果と合わせて検討され、依網池へは少なくとも2つの旧河道が給水源となり流れ込みと考えられている（白神2000）。

さらに17世紀末の依網池の復元を川内氏がされている。川内氏は「依網池古図」などの現存する各種絵図を分析し、依網池の位置と形態・規模を明らかにされた。それによると依網池の規模は潤水面積約428000㎡、水深は平均1～2m程度と浅く、貯水量は50万㎡以下であったとされている（川内2003）。その他の周辺の遺跡を概観すると北西の山之内遺跡において後期旧石器～縄文時代のナイフ形石器やサカイト剥片が出土し、また中期旧石器時代のナウマンゾウやオオツノシカなどの足跡も検出されている。南住吉遺跡でも有茎尖頭器が出土している。両遺跡は弥生時代前期～中期の集落が確認されている。中期では堅穴住居や方形周溝墓なども検出されている。後期に集落は一旦廃絶するが、山之内遺跡では古墳時代中期～飛鳥時代にかけて大規模な集落が営まれ、飛鳥時代末葉～奈良時代になると建物方位が正方位を指向する。

山之内遺跡の東に隣接する苅田4丁目所在遺跡は中世から近世の遺跡である。特に鍛造工房関連遺構や井戸・土坑が密集して検出され、15世紀から16世紀初頭の遺物が多く出土している。出土遺物には鉄製の鍋・釜・塀先や鑪の羽口・スラグがある。

東の池内遺跡においては弥生時代前期の水田と環濠集落が検出されている。水田と集落を地形と共に明らかにでき、大きな成果となった。また10～11世紀の溝で囲まれた敷地内に大規模な掘立柱建物や数棟建つ屋敷跡や屋敷境の道路も検出されている。南東の高木遺跡では弥生時代後期の堅穴住居2棟が検出されている。奈良時代後期から平安時代前期の掘立柱建物12棟が検出された。注目される遺物として銅鏡「海獣葡萄鏡」が出土した。その東の堀遺跡では飛鳥時代の掘立柱建物群と、それらを囲む溝や横列が検出された。

参考文献

- 足利健亮1970 「恭仁京の京極および和泉・近江の古道に関する若干の覚え書き」『社会科学論集』創刊号 大阪府立大学
- 小倉徹也2004 南住吉遺跡発掘調査報告Ⅲ 財団法人 大阪市文化財協会
- 小田木富慈美2008 苅田4丁目所在遺跡発掘調査報告Ⅱ 財団法人 大阪市文化財協会
- 川内容三 2003 「近世初期の依網池の復元とその集水・灌漑について」『西天王寺国際仏教大学紀要第35号』
- 岸 俊夫1970 「古道の歴史」『古代の日本』5 近畿 角川書店
- 清水和明1999 山之内遺跡発掘調査報告Ⅱ 財団法人 大阪市文化財協会
- 白神典之他2000 東浅香山遺跡発掘調査報告Ⅴ 堺市教育委員会
- 新修大阪市史編集委員会1988 新修 大阪市史

日下雅義1980 歴史時代の地形環境 古今書院

西田一彦2008 大和川付替えと流域環境の変遷 古今書院

大和川・今池遺跡調査会1979 大和川・今池遺跡-第1地区発掘調査報告-

大和川・今池遺跡調査会1981 大和川・今池遺跡Ⅲ

第2章 調査にいたる経緯と経過

大和川今池遺跡は1977（昭和52）年に堺市・松原市・美原町（現堺市）など5市町村の下水を処理するための「大和川西部流域下水処理場」建設計画に伴って実施された埋蔵文化財の試掘調査で確認された。1978年には大阪府教育委員会や堺市教育委員会、松原市教育委員会が「大和川今池遺跡調査会」を発足させて各施設建設予定地の発掘調査を実施した。その後も処理場内の施設建設計画に伴い土木部と教育委員会が協議を行い、30数次に及ぶ発掘調査を実施してきた。

今回の調査は、都市計画道路大和川線の建設事業に伴うものである。この大和川線は近畿自動車道の三宅JCTから大阪湾岸線の三宅JCTまでの約9.9kmを整備するもので、大阪南部地域において臨海部と内陸部を連絡し、東西方向の交通渋滞を解消するためのものである。平成18年度の遺跡内道路路線上東側での調査（調査名大和川今池遺跡06-1）に続くものである。調査名としては「大和川今池遺跡07-1」となる。

大阪府富田林土木事務所・堺市と平成19年11月20日に委託契約を交わし、平成19年11月20日から平成21年2月27日まで発掘調査を行った。その後、4月30日まで遺物整理作業を行った。

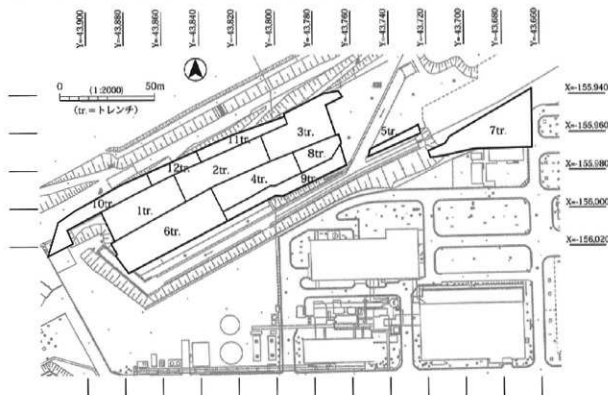


図3 トレンチ位置図

第3章 調査の方法

当センターでは過去に同遺跡内で大和川河川改修事業に伴う調査を行い、その調査名は大和川今池遺跡（その1）～（その7）となっているが、今回の調査はそれと続く調査名とはなっていない。

調査は2003年8月に施行された（財）大阪府文化財センターの「遺跡調査基本マニュアル（暫定版）」にのっとり行った。

調査地は大和川下流域下水処理場「水みらいセンター」と大和川南岸堤防との間である。調査前の現況では治水保全地区として緑地になっていた。調査区全体は幅40m前後、長さ270mほどの北東から南西に向けての細長い形となった。

現代盛土・その直下の現代耕土を機械掘削で除去し、その下から人力掘削により調査を行った。

トレンチ名は着手順である（図3）。最初は1トレンチの基礎撤去のため、2トレンチが先行した。

事前準備を経て、2007年12月10日から2トレンチの機械掘削開始、2009年1月26日に12トレンチの最終面の測量を完了し、撤収作業を経て調査を終了した。

10～12トレンチは大和川南岸の現堤防にかかるため2008年11月の湯水期に入るのを待って、矢板打設、支保工、堤防盛土掘削を本体工事で行ってから調査に入った。

5トレンチは機械掘削時点で、他に最終検出面となる第6面より低いT.P.+7.0mまで削り下げられ、現代盛土で埋められていたのが判明し、遺構・遺物は残存していなかったため、そこで調査を終了した。

7トレンチはトンネル工事のケーソンの予定位置で、盛土も厚く、本体工事での矢板打設と盛土掘削後、調査に入ったが、T.P.+7.0mまで機械掘削しても、現代盛土しかなく、矢板の掘削限界で、一部分をさらに深さ2mほど試掘したが状況が変わらず、遺構・遺物の残存はないと判断して調査を終了した。

調査は、位置の記録に関しては世界測地系の国土座標（第VI座標系）を用い、方位は座標北である。高さの記録は東京湾平均潮位（T.P.）を基準としている。各面で平板測量を行い、高さを記録し、適宜遺構の平面図・断面図などを作成した。

写真測量は各トレンチで1回ずつ、ヘリコプター・クレーンで行った。

基本層序は基本的に人力掘削による調査を開始した上から順に番号をふった。ただし、第1層は調査の進展に伴い新たな知見が増えたため、最終的には第4章で述べるように整理した。

面は第1層上面が第1面と、基本層序と対応する。ただし、基本的に調査区全体で面的調査を行ったのは第2～4面と第6面である。2トレンチで下層確認のためにサブトレンチを入れたが、第6層が厚さ1mほどある無遺物層であったので、その後のトレンチでは第6面を最終調査面とした。

遺構は検出順に通し番号をつけ、その後ろに遺構種別を付加している。

土層断面図は基本的に各トレンチで直交する2方向の断面図を作成している。

出土遺物は、洗浄・注記後、全てを種別毎に破片数を数え、復元し、実測可能なものは実測した。

記録写真に関しては、現場では35mmの白黒とカラースライド、6×7の白黒で撮影し、台帳登録用にデジタルカメラでも撮影している。撮影は現場調査担当者が行った。遺物に関しては中部調査事務所写真室が行った。

写真・図面・遺物等は登録の上、当センターが保管している。

「難波大道」が検出された成果を一般に公開するため、2008年5月24日に現地説明会を開催した。

第4章 調査成果

第1節 基本層序(図4～8・表1)

1. 各層の様相

基本層序は調査対象とした層に上から順に番号をつけた。また、その各々の上面を同じ番号の面として呼称する。たとえば第1層の上面が第1面となる。全ての面を調査したわけではない。

土質の記載では、旧耕土を含む古土壌のように擾乱を受けた層や、泥濁状態で堆積した層などには「砂質土・粘質土」の呼称を用いる。その後に主体的な岩屑性粒子と副次的に混じった粒子を記載する。ただし、それは地質学的な記載法にも読み替えられる。たとえば、「砂質土、細砂～シルト主体、粗砂あり。」は「粗砂混じりシルト質細砂」に読み替えられる。

調査区の大部分は大和川南岸堤防沿いであるが、昭和期に水田耕土の上に盛土がなされ、道路が敷設され、様々な建物が繰り返し建てられたようである。昭和38年以降は河川保全区域として植樹され、調査前には林になっていた。

現代盛土とその直下の現代耕土を機械掘削で除去し、そこから人力掘削による調査に入った。

それらを踏まえて、以下、基本層序各層の様相を述べる。

第1層 大和川南岸堤防直下の10～12トレンチ以外では、現代盛土の整地時点での攪乱や建物基礎の攪乱がほとんどの面積を占め、第1面の面的調査は不可能な状態であった。

特に調査当初の1・2トレンチにおいては攪乱がひどく、整地土系第1-1層がほとんど遺存しておらず、始めは単層であると認識していた。

その後、本来は現代耕土直下に普遍的に整地土系第1-1層が存在する事が判明し、基本層序も第1層の枝番号として、整地土である第1-1層とその下の旧耕土である第1-2層に分けた。

さらに調査が進展すると、江戸時代の大和川付け替え以降の堤防盛土によって保護されていた10～12トレンチでは、第1-2層と江戸時代堤防盛土との間に、現代耕土とも第1-1層とも異なる旧耕土層が遺存しており、堤防裾部で層位関係を確認したところ、1～9トレンチの部分ではこの層を除去した後、先述の第1-1層を敷いて整地し、現代耕土が形成されている事が判明した。

最終的には10～12トレンチで遺存していた耕土層を「耕土系第1-1層」とし、1～9トレンチの現代耕土と第1-2層の間の層を「整地土系第1-1層」とした(図8下段)。

整地土系第1-1層 10YR6/3～5/4にぶい黄色～黄褐色、粘質土、シルト～細砂主体、粗砂～中砂多し、Feあり。層厚は残りの良いところで10cm強。割と硬く締まり、ブロック状の構造が残る部分もあるので、人為的に盛り土された整地層とわかる。

攪乱された部分が多く残りが悪いのでこの層の包含遺物は少なく時期を明確にしたいが、大和川付け替え(宝永元年、1704年)に伴い、その堤防裾部の耕地床面造成に敷かれた整地土と考えられる。

耕土系第1-1層 2.5Y5/1黄灰色(下端部付近2.5Y5/3黄褐色)砂質土、細砂～シルト主体、粗砂～中砂若干あり、斑状Fe・Mn粒わずかにあり。層厚12～15cm。

10～12トレンチの江戸時代大和川堤防盛土直下のみ残存する。有機分はかなり溶脱しているが、粗砂～中砂は上下差なく混じり、旧耕土である。堤防以外の部分ではこの耕土を一旦取り去り、整地土系

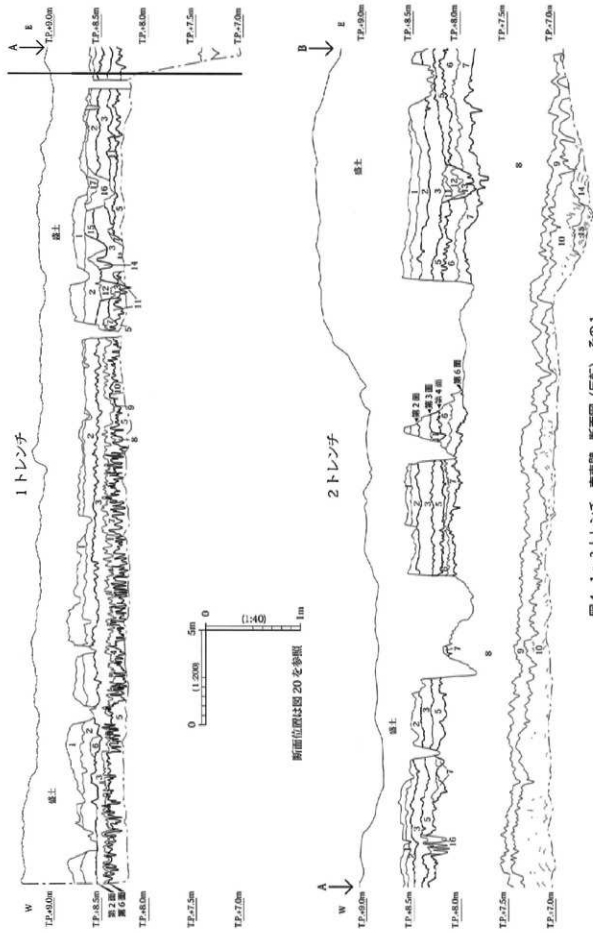


図 4 1~3 トレンチ 南横壁 断面図 (反転) その 1

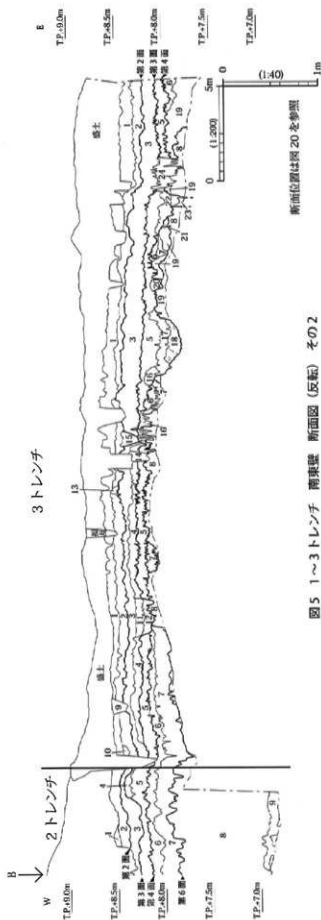


図5 1～3トレンチ 南東壁 断面図(反転) その2

第1-1層で耕土床面を整地した後、現代にまで継続する耕土が形成されたものと考えられる。したがってこの層が耕作されていた期間は、18世紀初頭以前、17世紀頃であろう。包含遺物にも18世紀以降のものは含まれない。

第1-2層 2.5Y5/1黄灰色、粘質土、シルト主体、粗砂～中砂あり、Mn粒・斑状Fe若干あり。層厚10cm弱。粗砂～中砂が上下均等に混じり、暗色を示す事や、第2面に畦畔の基部を残す事から旧耕土と考えられる。

上下層と包含遺物を比較すると、耕土として機能していた期間は14世紀頃から17世紀頃であろう。

この層から上の層のみ、層中に粗砂を含むようになるのは、堆積環境に何らかの変化があった事を反映しているようである。洪水の激化や遠隔地からの客土がなされるようになったなどが考えられる。

第2層 10YR4/1褐灰色、シルト、管状Feあり。層厚20cm前後。今回の調査で確実なものとしては最古の耕土である。砂粒をほとんど含まず、低湿地の堆積のような淘汰の良い、有機分を豊富に含んだ層である。層厚がかなり厚い事から、あまり後世の削平を受けていないと思われる。

ただし、下面に「難波大道」が存在した2トレンチ東半・3トレンチ西半・4トレンチ付近では砂粒を含む。特に3トレンチ西半では下半に砂粒がかなり多かったため、別層として分別して調査してみたが、結果としては砂粒の多寡は漸移的で、層境はなく、分別できるものではないようである。

南西側の第6層を削平して直接その上に乗る部分と、下面で「難波大道」が検出された付近はかなり包含遺物が多い。

南西側は微高地上に遺構集中域が存在していた可能性が高い。「難波大道」付近はそこ

1 トレンチ 土色

1. 焼黄灰 583/1～4/1 (一部灰 754/1) 砂質土 粗砂～シルト主体 粗砂若干あり 細目状 Fe あり 住宅造成直前までの積土 [現代堆土]
2. 上層: に近い灰層 10YR4/3 下層: 灰層 10YR4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～中砂あり 上部 Fe あり Mn 粒あり 積土 [第1層]
3. オリーブ黒 2.5Y4/4～暗灰黒 2.5Y4/2 シルト 中砂～粗砂わずかにあり 炭化物わずかにあり Fe あり 下部は地層境界の粘土 積土 [第2層]
4. 3 Fe なく黄灰 2.5Y4/4 と 5 の濃いコンクリートラミナ フレア状の巻き上げあり 第2・第6期埋設物埋土
5. 黄灰黒 2.5Y6/6～7/6 シルト～粘土 Fe あり 植物体跡あり 上部のコンクリートラミナの入り込みあり 止水地層 [第6期]
6. 2内に3の直径2～5cmのブロックあり 第1期耕土時の耕層?
7. 4のコンクリートラミナ内に8 (第3期) がラミナ状に加わる
8. 黄灰 2.5Y3/1 シルト～極細シルト [第5層]
9. 灰黒 10YR4/1 シルト わずかに粗砂あり Fe のない第2層 (3) が入ったもの
10. 黄黒 2.5Y3/4～に近い黄 2.5Y6/3 シルト～極細砂 Fe まだらにあり 水層地
11. 黄灰 2.5Y3/1 極細砂～シルト 管状 Fe 若干あり [第3期]
12. オリーブ黒 2.5Y4/4～暗灰黒 2.5Y4/2 わずかに中砂あり Fe あり ほとんど第2層と同質
13. 12内に3の直径2～8cmのブロック若干あり
14. 2内に3の直径1～4cmのブロック若干あり 第1期耕土時埋設物?
15. 灰黒 10YR4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～中砂あり 直径2cmの3のブロック若干あり 上部 Fe あり 固く締まる 第1期耕土時 241 耕層埋土
16. 灰 7.5Y4/1 砂質土 粗砂～シルト主体 中砂～粗砂若干あり 小塊わずかにあり Q25 埋設土
17. 5の平たいブロック Q25 埋設土

2 トレンチ 土色

1. 焼黄灰 10YR6/8～6/3 粘質土 シルト主体 粗砂～中砂若干あり Fe 多し Mn 粒若干あり ブロック状積造あり [現代土系第1-1期]
2. 黄灰 2.5Y3/4～暗灰黒 2.5Y3/2 粘質土 シルト主体 粗砂～中砂あり 小塊若干あり Fe あり 上半に多し 積土 [第1-2層]
3. 灰黒 10YR3/1 (上部に近い) 灰層 10YR3/3 シルト わずかに中砂～粗砂あり Fe 上部にあり 積土 [第2層]
4. 黄灰 10YR3/1 シルト 粗砂 8 (第6期) の扁平なブロックわずかに混じる 183 耕層跡に残る粗砂大径造土
5. 灰黒 10YR3/1～5/1 極細砂～シルト ラミナなし 有機分若干あり 管状 Fe あり 洪水層地層 [第3期]
6. に近い黄 2.5Y6/3 (上部埋設物 2.5Y6/6) シルト～極細砂 わずかに混じらうラミナ残る 下部は第5層巻き上げ乱混し中砂色 Mn 粒若干あり 管状 Fe わずかにあり 洪水層地層地 (第4期)
7. 黒 2.5Y2/1 粘土～シルト 直径 0.5 cm 以下の第6期のぼやけた無節ブロックあり 有機分の濃い部分が取在する 木組直や細かい植物根が発達しそこへ本層の土が入る 森林土層 [第5期]
8. 上部: 明黄黒 10YR6/8 下部: オリーブ黒 5Y6/3 粘土～シルト シルトはわずかに 上部から 20～30 cm まで若干の砂粒の降下があるがそれ以外は上部に粘土の層厚の変化まったくない 第5層の土の植物体跡は上半に多いが 最下部まで残存する 下部はやや第7層巻き上げ層地層、一部ラミナも見られる 海成層? 低位埋没海成層? (第6期)
9. 黄灰 5YR4/1～黄黒 5YR3/1 粘土～シルト 有機分多し 植物体跡わずかに残る 過炭化着色しい 上部の耕層不明 下部に本層多量 森林土層地 [第7期]
10. 灰オリーブ 7.5Y5/2 シルト内下部に灰オリーブ 5Y6/2 細砂のラミナあり 植物体跡わずかにあり 管状 Fe 若干あり
11. 灰黒 10YR4/1 シルト 中砂～粗砂若干あり 管状 Fe・Mn 粒若干あり 第2層下層とはほぼ同質 第3層埋設土
12. 黄灰 2.5Y4/1 粘質土 シルト～粗砂主体 粗砂～中砂あり 炭状 Fe 若干あり Mn 粒わずかにあり 第2・第3期の混濁? 115 溝 (鋼鉄大径管側) 埋土
13. 黄灰 2.5Y3/1 極細砂～シルト 炭状 Fe・Mn 粒わずかにあり 直径5～7cmの5層のブロックがわずかにあり 115 溝 (鋼鉄大径管側) 埋土
14. 灰オリーブ 7.5Y6/2 シルト～極細砂 ラミナあり 管状 Fe わずかにあり フィンガーワークス層同位層
15. 灰 7.5Y6/1～明黄黒 2.5Y6/8 粗砂～粗砂 ラミナあり 粗砂は部分内、そこに Fe あり フィンガーワークス層同位層
16. 3・5・8 (第2・第3・第6期) のコンクリートラミナ 第2期耕作時埋設物跡

3 トレンチ 土色

1. 黄灰 2.5Y3/4～5/6 粘質土 シルト～粗砂主体 粗砂～中砂あり Mn 粒あり ブロック状積造あり [現代土系第1-1期]
2. 黄灰 2.5Y3/3～暗灰黒 2.5Y3/2 粘質土 シルト主体 粗砂～細砂あり Mn 粒あり 積土 [第1-2層]
3. に近い黄黒 10YR4/3～灰黄黒 10YR4/2 シルト わずかに粗砂～細砂あり Mn 粒若干あり [第2層]
4. 灰 2.5Y4/1～暗灰黒 2.5Y4/2 粘質土 シルト主体 粗砂～中砂若干あり 管状 Fe, Mn 粒若干あり 黄灰大径造土を伴った土か?
5. 灰 5Y5/1 シルト～粗砂 直径 1 cm 前後の第4期ブロック下部に若干あり 管状 Fe わずかにあり 部分的にコンクリートラミナあり 洪水地層 [第3期]
6. 灰オリーブ 5Y6/2～オリーブ黄 5Y6/4 シルト～極細砂 下部や第5期巻き上げ層地層 コンクリートラミナあり 洪水地層 [第4期]
7. 黒 2.5Y2/1～黒黒 2.5Y3/1 粘土～シルト 下部に第5期のぼやけた層小のブロックあり 森林土層 [第5期]
8. 黄灰黒 2.5Y6/6 粘土～シルト 上部第5期の降下あり (植物体ヒラック) [第6期]
9. 黄灰黒 2.5Y3/2 粘質土 シルト～粗砂主体 粗砂～中砂あり 粗粒砂わずかにあり 細目状 Fe あり 第1面道埋設土
10. 黄灰 2.5Y3/1 粘質土 シルト～粗砂主体 極細砂～中砂多し 炭状 Fe あり 第1-2面道埋設土
11. 4とほぼ同質だが管造あり 溝の上を通る層が地層で覆れた?
12. 3内直径1～4cmの4・5のブロックあり コンクリートラミナあり 185 溝 (鋼鉄大径管側) 埋土
13. 2とはほぼ同質ただし粗砂若干多し 第1-2層耕土時埋設物
14. 黄灰 10YR4/1 シルト 直径3～5cmの第5・第3期のブロック若干あり 切り込み第2-2室 第2期耕土時埋設物?
15. 灰黄黒 10YR4/2～黄黒 10YR4/1 粘質土 シルト～粗砂主体 粗砂わずかにあり Mn 粒上半にあり 第1期耕土時 150 埋設土
16. 5 (第3期) 内に第4期のブロックあり コンクリートラミナあり
17. 灰黒 7.5YR4/1～黄黒 7.5YR3/1 シルト～粗砂 わずかに中砂～粗砂あり 直径2～3cmの第4・第5期のブロックあり 187 埋設土
18. 灰黒 10YR4/1～5/1 粗砂～シルト 有機分で暗色混すがラミナあり 下部や第6層巻き上げる 赤い洪水地層 187 埋設土
19. に近い黄 2.5Y6/4～黄灰 2.5Y6/1 粘質土 シルト～粘土主体 粗砂～中砂多し クラック多し 第6期上部の風化が 有機分なく炭灰で埋積した第6期か 粗砂はクラック内を降下か?
20. 3と19のややぼやけたブロック 第4面道埋設土?
21. 17内に19のぼやけたブロックと粗砂?
22. 黄灰 7.5YR4/1～黄黒 7.5YR3/1 シルト～粗砂 わずかに中砂～粗砂あり 直径2～3cmの第4・第5期のブロックあり 186 埋設土
23. 19のややぼやけた直径3～10cmのブロックがほとんど 22のブロックがわずかにあり その間に黄灰 7.5Y3/1 シルト 186 埋設土
24. 3 (第2期) 土体 8 (第6期) をフレア状に巻き上げる 5 (第3期) もあり コンクリートラミナ混じり 地層埋設

表1 1～3 トレンチ 南東壁 (図4・5) 土色

だけやや砂粒を含む事からしても、大道盛土が調査区外の遺物を多く含んだ層を材料としていて、それが耕地開発以降に耕土として攪拌した第2層に取り込まれたのであろう。

包含遺物としては、古墳時代中期～後期のものが最も多く、飛鳥時代～奈良時代前半、平城宮Ⅲ期頃までの土器が多量にあるが、8世紀後半から9世紀の遺物がほとんどない。

それとやや空白期を置く、黒色土器と瓦器の破片が若干あり、それらが最新の遺物群として抽出できる。黒色土器碗B類の破片があり、黒色土器碗A類の破片も丸みを帯びた碗形の新A類が多いようである。瓦器破片は外面にミガキのあるものもあり、高台が形骸化したものは認められない。他に非常にわずかだが瓦質土器の小片もある。

以上の状況から、第2層包含の最新遺物群の時期は10世紀から14世紀頃と考えられ、それが第2層が耕土として機能していた時期と思われる。また、第2層が成立した10世紀中葉頃が、第3面で検出された難波大道の廃絶期の下限となる。

ただし、この層には疑問な点がある。包含遺物の中で、須恵器などは、かなり大きな破片が多く、それとさほど摩滅が進んでいない事である。須恵器製の破片などでは10cm角ほどの大きさもある。

また、花粉分析でイネ属型の花粉が検出されていない。水田雑草のオモダカ属は検出されており、珪藻分析では短期間滞水する環境が推定されており、耕作形態などではありえない事ではないが、予想に反する分析結果であった。

コンポリュートラミナ 第2層の上面である第2面は比較的平坦だが、第2層中から第6層の上部にかけて、激しく上下に凹凸するラミナが見られ、各々の層境も激しく乱れている。異常堆積の一種のコンポリュートラミナである。

断面で見ると上層が下方に渦を巻くように沈み込む荷重痕のような形態と、その反動で下層が炎のように巻き上がるフレーム構造のような巻き上がりが入り乱れ、フレーム構造の先端から千切れた下層の土が上層内で湾曲したラミナ状のブロックになっている事も多い。平面的に見ると尾の伸びた渦巻きのようなマーブル状の構造が見られる（図版1）。

上下動の幅はその激しさが部分で異なり、わずかな凹凸程度の所もあれば、40cm以上上下動して第2面に第6層の土が点々に見えるほどの所もある。上下動の激しい部分は平面的には幅40～80cmほどの帯状になる事が多く、調査区内に波紋のように分布する。

近年コンポリュートラミナは地震によって形成されるとの説が強まっており、現場での観察結果もそれと符合するため、このコンポリュートラミナは地震の痕跡と考えている。

地震の時期は第2面以上にはコンポリュートラミナが及ばないので、第2層が耕土として機能していた時である。しかし、第2層がその地震後も再び耕作されれば、下の凹凸部分が層的に分離され、第2層の中にもコンポリュートラミナが残らないはずである。

つまり、地震の時期は第2層が耕土として機能していた期間の最終末で、地震を契機とするように第1～2層が新たな耕土として成立し、第2面はその床面として削平を受け、平坦になったと考えられる。

ただ、もし第2層が水をはった水田のように流動しやすい状況であったとしても、第6層に達するほどのコンポリュートラミナが形成されるのは、それほどの事例を知らず、少し疑問の残る所である。第2層を耕土とした水田で水をはった場合、調査区内でもっとも緻密で分厚い第6層が止水層になり、第3～5層が滞水層となり流動しやすくなるような状況があったのであろうか。

第2～2層 7.5YR4/1褐灰色、粘質土、シルト主体、粗砂～中砂あり、小礫わずかにあり、Mn粒わず

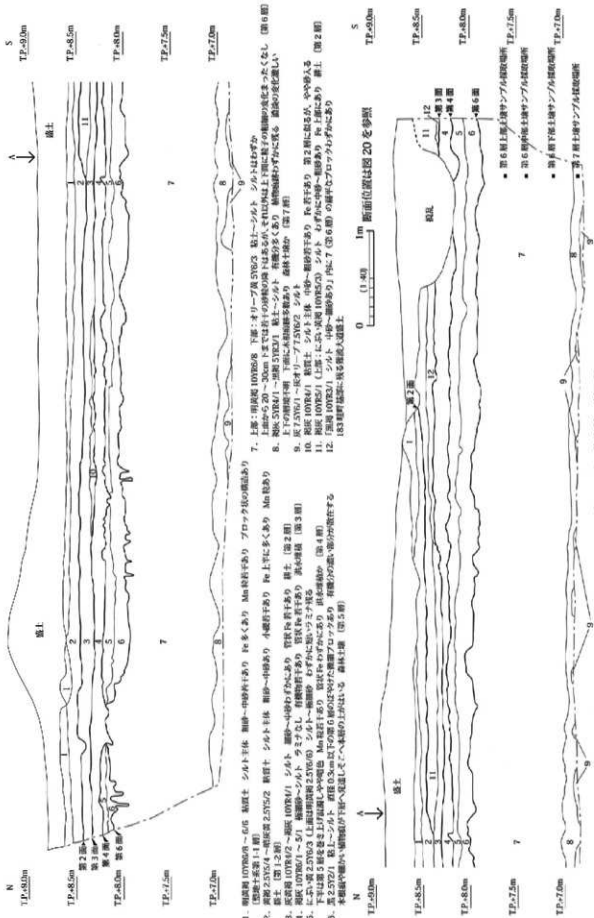


図 6 2 トレンチ 北東壁 断面図

かにあり。層厚12cmほど。分布範囲は狭い。

3トレンチ西半で第2層を掘削中、その層下半が別の層として分別できそうだったので、東西方向のセクション・筋掘りを設けて断面確認したが、その地点では層下半に砂粒が多いのみで、堆積層の層境はなく、漸移的变化であった。その後、その北西に隣接する11トレンチで、第3面の「難波大道」西側側溝以東に第2層直下に層境をもって分別できる層が確認され、おそらくは3トレンチ北西壁付近から以北に広がっていたと推測される。

部分的な層ながら、第2-2層として基本層序に組み入れた。

第2層よりやや赤味が強く酸化し、砂粒を含むのが特徴である。「難波大道」盛土を攪拌して耕土に転用した耕地開発当初の耕土が、なんらかの理由で耕作深度が浅くなったために第2層から取り残されて残存したものと思われる。第2層より母材である「難波大道」盛土に質が近いのであろう。

包含遺物は第2層に似るが、平安時代10世紀以降の遺物を欠く。しかし層の広がりが狭く、出土遺物も少ないため、その点を積極的に評価はできない。耕土として機能していた期間は、第2層の期間の始め頃、10世紀中葉頃として大過ないと思われる。

第3層 5Y5/1灰色、シルト～細砂、Mn粒・管状Feわずかにあり。有機分の多いところでは10YR5/1褐灰色を呈し、鉄分多いところでは2.5Y5/2暗灰黄色を呈する。下端部に下層の小ブロックが見られる所もある。調査区内の基本層序では主体的粒子が最も粗い層である。層厚平均10cm程度。

上面である第3面は難波大道が検出された面である。大道の両側溝が切り込み、残存した盛り土も乗る。それと同時に大道を破壊して第2層を耕土として開発された耕地の床面でもある。

やや暗色を呈し、酸化構造もラミナも見られない事から、断面で確認した時点では耕土の可能性が高いと考えた。

ところが、3トレンチ第3面の「難波大道」盛土の下面で1ヶ所のみ、長さ1mほどの畦畔状の高まりを検出した他は、この層に伴う畦畔や溝は痕跡すらなく、床面にあたる第4面は段差も平坦面もなく自然地形的に緩やかに凹凸する形であった。

以上を総合すると、この層は耕土とは考えにくい。水成堆積であるならば、緩やかな洪水で、混濁した泥土状の土砂が供給され、そのまま堆積したものと考えられる。

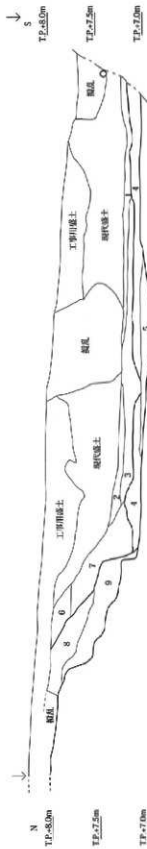
しかし、水成堆積層と考えると凹凸のある第4面上で広い範囲に均等に堆積し、水成堆積層であるのが突如第4層との間に堆積当時の古土壌が残存していない事が不自然である。

花粉・珪藻分析では第2層より検出量が少ないが、似たような環境が推測されている。ただし、この層では水田雑草のオモダカ属の花粉が見られない。

包含遺物は第2層と比べると極端に少なくなり、調査区全体で見ても1/4コンテナに満たない。その中には古墳時代後期後半の須恵器片が多く、わずかながら飛鳥I期に限定できる土器片もある。したがって第3層が堆積、もしくは耕作が停止した時期は飛鳥I期後半、7世紀前葉頃と考えられ、「難波大道」の作られたのはそれ以降という事になる。

他に、ほぼ完形のサスカイト製の石鏃が散発的に出土している。小型の凹釜式のものから大型有茎のものもあり、縄文時代と弥生時代のものを含むように思われる。

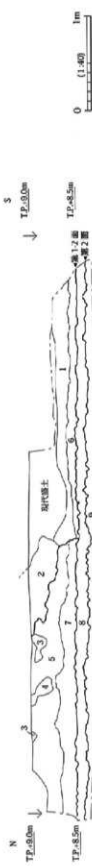
第4層 5Y6/1～6/3灰～オリーブ黄色、シルト、微小なMn粒・管状Fe若干あり。鉄分の沈着により部分でやや色が変わるが、有機分が少なく明度の高いのが目立つ層である。上面は鉄分の沈着により、2.5Y6/6明黄褐色を呈する。後発のコンボリュートラミナで乱れるが、酸化構造があり、止水堆積層であ



断面位置は図9を参照

1. 地層 10782/1 砂質土 細砂-シルト主体 粗砂-シルト主体 粒径0.2~0.3mmの種子状のもの多数あり
2. 地層 10782/2 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 上層粘土
3. 地層 10782/3 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 下層粘土
4. 地層 10782/4 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 下層粘土
5. 地層 10782/5 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 段差盛土(古)
6. 地層 10782/6 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 段差盛土(古)
7. 地層 10782/7 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 段差盛土(古)
8. 地層 10782/8 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 段差盛土(古)
9. 地層 10782/9 砂質土 細砂-シルト主体 中砂-粗砂若干あり 小礫あり 灰化層わずかにあり 段差盛土(古)

9 トレンチ 北壁 断面



断面位置は図16を参照

1. 地層 2353/1 砂質土 細砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
2. 地層 2353/2 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
3. 地層 2353/3 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
4. 地層 2353/4 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
5. 地層 2353/5 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
6. 地層 2353/6 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
7. 地層 2353/7 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
8. 地層 2353/8 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土
9. 地層 2353/9 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂あり 現代盛土

11 トレンチ 中央アゼ 断面

図8 9 トレンチ 北壁・11 トレンチ 中央アゼ 断面

る。花粉密度が低く、珪藻化石が検出されない事から、洪水で短期間に堆積したものと考えられる。層厚は残りの良いところで最大10cm程度。

第6面で検出される第5層を埋土とした木根痕の中心付近に落ち込んでいる例が多いので、第5層を形成した森林状態を廃絶させるような洪水で堆積した可能性が高い。

包含遺物はほとんどなく、須恵器の小片、弥生土器かと思われる小片がわずかにあるのみである。いづれにせよそれだけで堆積時期を限定するには無理がある。第4面で2本の溝が検出されたが、その出土遺物からは古墳時代後期頃までに堆積したとしか言えない。

第5層 5Y2/1黒色、シルト。層が薄いところではやや第4層と混濁しているのか5Y4/1灰色まで明色化している部分もある。層厚は安定せず、厚い部分では20cmを超え、薄い所では第6面の木根痕の埋土としてしか遺存していない部分もある。

第6面で木根痕を多く検出している事からしても、森林土壌と思われる。地形的に流路状に低い部分ではこの層の下にラミナのある黒色層が見られる場合もあるので、森林の中に浅い低湿地が散在している状況から、次第に低湿地が森林土壌で埋没していった推移があったと認められる。

珪藻分析で、第6層上部では水成植物が生育する沼沢湿地が示唆され、第5層自体では珪藻の生育しにくい、やや乾燥した環境が推定されるのが、その推移を示していると思われる。

包含遺物は皆無で森林であった時期を特定するのは難しい。しかし、花粉分析からは、照葉樹林の存在が推定され、冷却化の痕跡はないため、少なくとも温暖化した縄文時代以降の形成と言える。

第6層 10YR6/8明黄褐色、粘土～シルト、上面からクラック発達、上層の降下あり、層内のコンボリユートラミナは上面から30cm下までにほぼおさまる。層厚1m～80cm。

2トレンチの下層確認トレンチで下端部まで確認した(図4・5、図版1)。鉄分の沈着の多寡はあるものの、層全体が酸化的雰囲気である。これは調査区が大和川と今井戸川に決まれ、両河川が現代に人工的に河床を下げ、調査区内の地下水位が低下したためと思われる。

しかし、層厚が1mほどあるにもかかわらず、緻密な粘土層で粒子の粗密も上下でほとんど変化がない。これはかなり特殊な状況である。

安定した環境で長い時間をかけて粘土～シルトの範囲内の堆積物が供給され続けたと考えられ、海底か湖沼底の、岸からやや離れた位置での堆積である可能性がある。

調査区から西へ約1.5kmの、大阪市山之内遺跡YM94-20次調査区では、T.P.+10mほどを下端として層厚70cmほどの黄褐色粘土層があり、低位段丘構成層、常盤層の最上部と報告されている。

2トレンチの下層確認トレンチでは東北東から西南西に、第6層下端部がT.P.+7mちょうどから上昇していくので高さ的には矛盾なく、その層に相当する可能性が考えられる。

花粉・珪藻分析では沼沢や湿原の縁辺部の不安定な水域での堆積が推定され、長期の水成堆積という条件は現場での観察と整合するが、推定環境にやや齟齬がある。

ただし、花粉分析では層内下部で亜寒帯から冷温帯樹林の構成要素が見られ、最終寒冷期の植生環境を示し、この層が更新統上部である可能性を強く示している。

今回、これらの成果により、第6層は低位段丘構成層上部の層であるとほぼ確定できたとと言える。

しかし、ここから東北東へ3kmほどの大阪市長原遺跡では似たような黄褐色系の分厚い粘土層が縄文時代の堆積層としてあり、大和川今池遺跡内の東側では似たような黄褐色系粘土層も沖積平野の堆積層の可能性があり、注意が必要と思われる。

下層確認トレンチは長さ50m近くを掘削したが、その範囲では無遺物であった。低位段丘構成層上部とすれば後期旧石器時代の堆積である。

第7層 5YR4/1褐灰色、粘土～シルト、植物遺体わずかに残る、水平方向での濃淡の変化が激しい。層厚10cm強。第6層の直下で、東北東から南南西へは先述の第6層下端部の記述の通り50mで40cmほど上昇するが、層厚は変わらない。ただし、上昇するにつれ、明色化し、西半は10Y5/1灰色になる。高い位置では有機分が消脱したか。

下面では明確な木根痕が多数検出されたので森林土壌と考えられる(図版1)。直下には薄くシルト～細砂の層があるが、その下はラミナのある細砂～粗砂の層が切り合っているようである。

最終寒冷期の森林土壌であり、花粉分析からはハンノキを中心とする湿地林が推定され、第6層への推移は湿原・湿地の拡大が考えられるとの事である。

下層確認トレンチでのみ確認できたが、その範囲では無遺物。後期旧石器時代か。

2. 調査区の堆積状況のまとめ

大和川今池遺跡は西の我孫子台地から東の沖積平野にまたがって立地し、台地東斜面には明確な段丘崖が見られず、いくつもの開折谷が存在している事は知られていた。

我孫子台地は南の泉北台地と北の上町台地をつなぐ台地で、やや標高が低く、地形的にもくびれている事は知られていたが、従来は南北の台地と同じく中位段丘と考えられていた。しかし近年、中位段丘層はかなり侵食を受け、低位段丘層の堆積が広がっている台地であることが判明してきた。

我孫子台地の平坦面は南西から北東へ緩やかに傾斜しており、それは当調査区の状況とも一致する。当調査区の第6面は1トレンチ・6トレンチの西半は第2層成立時にかなり削平を受け、本来の高さを失って平坦化しているが、それ以外は大勢として南西から北東に傾斜している。

しかし微地形的に見れば6トレンチ東側から2トレンチ東側に抜けるやや低い部分があり、そこには第5層の下にラミナの見られる黒色シルト層が堆積し、一時期低湿地であった。また、3トレンチの北端はやや高くなっており、大和川高水敷の調査での遺構集中域に続く微高地の存在が知られる。

この第6面の微地形が、平安時代以降の耕地の変遷の中で、平坦化が進行しつつも、踏襲されていたようである。

調査区の西隣は依羅池の推定範囲であり、深度の浅いボーリングステッキによる調査ながらそこには南西から北東に向かう開折谷が2本存在すると推測されている。また、南東に100mほど隔たった大和川今池遺跡06-1調査区では、第6層に似た黄褐色シルト～粘土層が確認されているが、その下部には沖積層的な砂層や植物遺体層が確認されている。

第6層はほぼ低位段丘構成層である事が确实であると判明したので、06-1調査区との間に、埋没した低位段丘崖が存在する可能性が高い。

いずれにしても人為的な痕跡が見られるようになる前には、調査区付近は、南西から北東に伸びる、舌状に削り残された台地であった事になる。

その台地の上の平坦面は北東に緩く傾斜しながら凹部には小規模な低湿地ができるような状況であったが、次第に森林化し、第5層が形成された。

そして、洪水で第4層が形成される。それを契機に森林が消滅した事は、木の株の痕と思われる木根痕の中心に第4層が落ち込んでいる例が多く見られる事から推測できる。古墳時代後期頃か。

これ以降、第2層まで、河内平野では異例と言える堆積物の少なさは、この調査区附近が、あまり洪水を受ける地帯ではなく、洪水を受けても粗粒の堆積物が供給されないような状況であった事を示す。

当時東側を北流していた西除川からも粗粒の堆積物が届く距離ではなく、周辺の我孫子台地に切り込んだ開折谷からも溢流するような洪水が来る地帯ではなかったと言う事であろう。

おそらくはたまたま洪水を受けても泥土が緩やかに堆積するような状況であったと考えられる。つまり、基盤層がなくて、沖積平野の周縁部で、相対的に微高地をなしていたのであろう。

そして、耕土の可能性も否定しきれない第3層が形成される。飛鳥時代初め頃の事である。もし、耕土であるなら、下面の状況から古墳時代後期頃の不整形な小区圃水田か、畦畔を必要としない畑作地の可能性が考えられる。洪水堆積物であるなら、第4層の上面に形成された土壌と混濁して泥土のような状態で堆積したと考えるしかない。

そして第3面に「難波大道」が作られるが、残された大道盛土に遺物が多く包含され、周辺の遺構集中域のある微高地から盛土が供給された可能性を考えると、少なくとも調査区内で難波大道が通っている部分は、遺構集中域より相対的に低い部分であった可能性が高い。

調査区内で最古の確実な耕土である第2層は「難波大道」を削平して形成されているため、調査区内では条里制地割りを伴う耕地開発が大道廃絶後に行われたように見える。

しかし第2層が「難波大道」と並存した耕土も含めて攪拌したと考えればそうとも言い切れない。

「難波大道」推定ライン沿いには東西幅が109mを越え115m以上となる余剰帯を持った条里制地割坪が集中する事が知られている。

その事から、「難波大道」を基準として条里制地割りが施行され、大道廃絶後、その道幅を東西の坪に取り込んでいったと推測されている。

ただ、条里制地割りが施行された範囲でも必ずしも全て耕地化されるわけでもないので、調査区内で第2層に先行する、難波大道併存の耕地が存在したかは不明である。

そして、第2層が耕土として機能している最終まで地震が起き、第2層から第6層上部にまでコンボリュートラミナが形成される。第2層も基本的に層内全体に見られ、しかし、上面は平坦であるのでその時期に限定できる。14世紀代か。

その後形成された第1-2層に特徴的な事は層内に下層ではほとんど見られなかった粗砂が普遍的に認められる事である。現代耕土に至るまでもそれは変わらない。

その背景としては、流路の固定化が進み天井川化した西除川から、調査区附近まで粗砂を運ぶ洪水が起きようになった可能性がある。その頃には調査区附近も景観的には完全に沖積平野の一部となっていたのであろう。

18世紀初頭の大和川付け替えに際し、その堤防盛土以外の部分では耕土系第1-1層が取り除かれ、整地土系第1-1層で整地され、耕地が再編された。新大和川南岸には南からの灌漑用水を受けて大和川に流すために落堀川が掘削されたが、悪水溜りとして低湿な状況であったようだ。当時の落堀川流路は調査区附近では現在、東の落堀川と分離されて今井戸川となっている。現代では大和川も今井戸川も河床が下げられ、その間にある調査区附近は地下水位の低下と堆積層の酸化が進行したと思われる。

第2節 第1面相当面（旧落堀川肩部の調査）

1. 概観

(1) 現況と調査の経緯

調査区全体から見ると部分的な調査だが、層位的に一番上位の調査成果となるのでここに報告する。現在調査区南東側を南西に流れ、調査区南西側で大和側に合流している今井戸川の流路は、元々大和川の付け替えに伴い、その南岸堤防裏の排水を目的として作られた人工河川、落堀川の流路であった。

現在では落堀川は調査区より東側の松原市域で大和川に合流し、調査区附近は東除川・西除川間の水を集めて北流してきた今井戸川の流路に改変されている。

調査前の現況では今井戸川沿い調査区南東辺附近は北西側と同じ高さに平坦化されており、今井戸川右岸のコンクリート擁壁まで若干の法面が作られているのみであった。

また、6トレンチ南東部分では、9トレンチとの境附近まで、今井戸川沿いに現地表面より-1.8mまでコンクリート製の建物基礎が入り包含層・遺構面が残存していない事を、調査前の基礎撤去の際に立ち会い確認していたため、その攪乱範囲を機械掘削時点で確認し、設計深度まで機械掘削した。

4・6・8トレンチの南東辺では、今井戸川に向かって落ちていく段差の上端が第1面から検出され、その斜面に盛土が成されている事が判明し、その時点ではこれが旧落堀川の造成当時の肩部にあたると認識していた。

ところが9トレンチでは段差の下に、今井戸川に沿って平坦面が検出され、旧落堀川の肩部は当初二段落ちの形状に造成され、その平坦面が耕作地となっていた事が判明した。

その旧落堀川肩部の形状が一番古い時点でも第1面相当の面であるが、大和川付け替え時の落堀川の形状を留めている可能性が大きい事から調査を行った。

結果としては段差肩部から平坦面にかけて、第1面相当の井戸・溝・落ち込み・畦畔・耕作痕・浸蝕痕などを検出する事ができた。

全体で見ると、4・6・8トレンチでも南東辺附近で、この段差肩部附近に位置し、第1面相当切り込みの遺構は、段差造成以降の遺構である可能性が高い。したがってそれらの遺構と9トレンチの第1面相当面とそれ以降の堆積の状況を、「旧落堀川肩部の調査」としてまとめて報告する。

(2) 層位関係（図8上段・図版1）

平坦面に落ちる段差の斜面には大別して、層位的に上層となる暗灰黄色25Y5/2系の砂質土と、下層になるオリーブ灰色5Y6/2系の砂質土の盛土がある。下層のオリーブ灰色系の盛土が段差造成当時のものと考えられる。

6トレンチの段差肩部で、これらの盛土が層位的に整地土系第1-1層より上位であるのが確認できたので、段差自体が第1面の遺構と言える。

段差下の平坦面では基本的に2層の耕土があり、その下に凹凸を埋めるような粘質土の整地土がある。2層の耕土は上層が層位的に段差肩部盛土の上層の上になり、下層が段差肩部盛土の上下層の間になるので、下層の耕土が段差と平坦面を造成した当初の耕土という事になる。以下、各々を「上層耕土」・「下層耕土」と呼称する。

これらの層は層位的には全て第1面より上位となるので、北西側段差上段の、現代に盛土がなされる

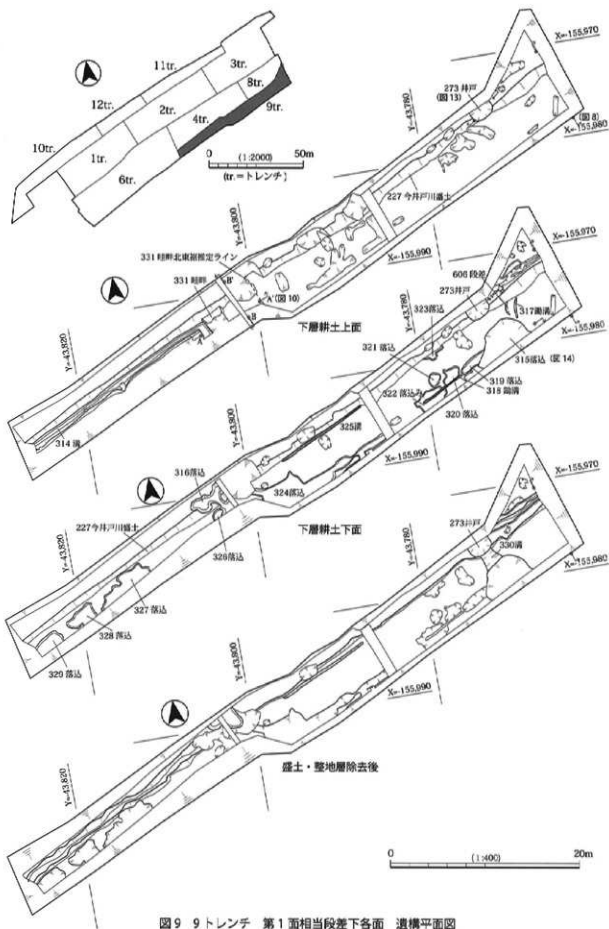


図9 9トレンチ 第1面相当段差下各面 遺構平面図

まで使われていた現代耕土相当とも言えるが、下層の段差盛土と下層耕土は埋没する下限が現代耕土より古い事は明らかなので、その上面を「第1面相当面」として調査し、下面を「第1面」とした。

ただし、ここで報告する主な遺構のほとんどは、その二つの面の時期を通じて存続したり、崩壊と修復を繰り返していたりする。

したがって、以下は二つの面の概観を述べた後、個々の遺構について細述していきたい。

2. 各面の概観（図9）

（1）第1面相当面（下層耕土上面・図版2）

この面では段差は、1.2mほどの比高差で盛土により法面角度30度強の平滑な面となっている。その肩部にはおそらく畦畔が存在していたであろう。また、上段肩部附近の226・273井戸、272土坑（図20）も盛土上面からの切り込みである。

段差下の平坦面の幅は、落堀川に落ちる肩部が9トレンチ南東壁と今井戸川のコンクリート擁壁との間にあるとすれば、6m以上、8m以内である。

目立つ遺構は段差上の南北方向環境畦畔につながる331畦畔である。坪境畦畔とは3・4トレンチ3面で検出した、「難波大道」夷絶後その中央に作られた河内と摂津の国境を成すものが現代にまで踏襲されてきたもので、段差下の平坦地にもその残りが作られているとは予想できなかった。

そのため、段差下の現代盛土を除去する機械掘削の時点で、大畦畔の多くの部分を破壊してしまったが、その畦畔南西側で、段差裾を走ってきた溝が直角に曲がる事を見ても、331畦畔は、北側の坪境の位置に合わせながらも、方向は当時の落堀川に直交するように作られていたようだ。

段差下の平坦地には鋤溝が見られる。上層耕土の床面遺構である。面の高さは331畦畔の南西側がT.P.+7.6mほど、北東側がT.P.+7.4mほど、331畦畔から北東へ30mほど行くとまたやや下がってT.P.+7.2mほどになる。

周辺の地形に合わず必要もないはずであるのにこの平坦地は南西が高く、北東が低い形になっているのは、平坦地の耕地としての水回しが、南西から給水されるものであった事を示す。落堀川造成時から南西は落堀川が大和川に合流して閉じられ、もちろん大和川や落堀川からの自然給水は不可能であるから、落堀川を渡る樋でもあったのであろうか。

（2）第1面（下層耕土下面・図版3）

段差と平坦面を削り出し、段差盛土や耕土を入れる前の状態と言える。段差斜面の上部には耕土系第1-1層から第5層までが露出し、段差下部から平坦面は第6層が露出している。

段差肩部の273井戸の南東には315落ち込みが現れ、二つをつなぐ溝状部分も検出された。段差造成時に作られた施設の可能性が高い。ただし、315落ち込みは平坦面下層耕土が機能している間に形成された浸蝕痕であり、数回に分けブロック土などで復旧されている。

331畦畔直下では、不定形だが深く切れ込み、底部まで掘削できなかった浸蝕痕、316・326落込があった。断面で観察すると、大畦畔が何度もこの浸蝕痕で北東側から壊されては補修されている様子が見て取れた。

落堀川の高水敷の役割も果たす平坦地に、無理に大畦畔を作ったために、落堀川増水時に溢れた水により浸蝕されたものと思われる。

段差下平坦面には、各所に不定形で浅い落ち込みが見られた。埋土は上にある耕土とは異なり、ブロック土を含む粘質土である。平坦面造成時に、一旦粗く掘り下げ、その後耕土床面として水平に整地した痕跡と思われる。

平坦面の高さは31大畦畔の両側でも差がなくT.P.+7.3mほどで、273井戸・315落ち込みのラインから北東側が低く、T.P.+7.0mほどになる。大畦畔から35mほど北東側で段差がある事になる。

3. 主な遺構 (図版4・5)

(1) 段差

9トレンチと4・8トレンチの境付近で、9トレンチの平坦面に落ちる形で造成された段差である。6トレンチでも段差斜面下部は攪乱されていたが、一部でその肩部と斜面の盛土が検出できた。

6トレンチでセクションを残して断面を観察した部分で、この段差は第1面から切り込み、盛土が整地土系第1-1層に乗っている事を確認できた。

また、段差が本格的に南東に落ちる手前で、幅70cmほどを5cmほど下げて平坦面を作っているのも確認できた。4トレンチでも一部確認している。これはおそらく段差肩部に畦畔を作った痕跡ではないかと推測される。そうであるなら、基底部幅70cm程度の大畦畔が作られた事になる。

その断面でも段差が階段状に削り出されているのが見てとれ、9トレンチでも段差下部が階段状になっているのが全域で確認されたが、段差の肩部から裾部までの全体が確認できた9トレンチ北東側で見ると、4段の階段状に削り出されていた(図8上段)。

最上段と最下段の壁面は急角度に立ち、段差の高さもあるが、途中の二つの段は比較的緩やかで段差も低い。各段の平坦面は若干段差下に向けて傾斜している。盛土が滑り落ちないようにするための工夫であろう。削り出された段差の比高は約1.4m。

この斜面にオリブ灰色5Y6/2を中心に灰オリブ~にぶい黄色5Y5/3~2.5Y6/4の極細砂を主体として粗砂~中砂を若干含む、きめの細かい砂質土を盛土として最初の段差が造成されている。ブロック土はほとんど見られない。これを下層盛土とした。

この上は調査区内の堆積層であって似た質の層を探すとすれば、2トレンチの下層確認のサブトレンチで確認した第7層の下にあるシルト~砂の互層が候補となる。旧落堀川本体の掘削でこの層に達し、それを利用したものか。

盛土は質にほとんど差がないが途中に層境が見られ、上下2段階で積まれた。層厚は30cm前後。これにより傾斜角30度強の法面を持った段差となり、その下の平坦面に下層耕土が形成される。

その後、暗灰黄色2.5Y5/2砂質土の盛土が、裾部で平坦面の下層耕土を覆うように盛られる。この盛土は質的に現代耕土に近い。平坦面にはこの盛土に合わせて上層耕土が形成され、現代盛土で北西側と平坦化するまで耕地として続くようである。これを上層盛土とした。

なお、段差上の肩部に近い部分は亀裂が発達し、地層全体がかなり南東側に傾斜していた。段差造成後何らかの理由で変形が起こったと思われるが、地震などの影響か、現代盛土作業による圧力などによるものかは定かではない。

上層盛土は攪乱埋土と分別しにくく、かつ、近世後半以降の遺物を含むので、特に包含遺物を取り上げなかった。下層盛土は包含遺物が少なく、破片のみで図化できるものはない。いぶし平瓦5片、いぶし丸瓦1片、須恵器は甕4片、壺1片、坏1片。土師器は器種不明4片。陶器1片、磁器2片である。

(2) 331畦畔及びそれに伴う浸蝕痕 (316・325落込)

9 トレンチのほぼ中央に位置する。3・4 トレンチの第3面で検出された、「藤波大道」廃絶後、その中央に作られた摂津と河内の国境を為す坪境畦畔 (183畦畔) は、第一面まで踏襲されていた事が判明したが、その南端位置に合致し、段差造成後、それを南に延長するように作られた畦畔である。

現代耕土を除去する機械掘削中に、畦畔の上部に現代の扰乱があった事もあり、その大部分を破壊してしまったが、段差肩部附近から伸びる形と、新しい時期の基底部の痕跡、そして9 トレンチ南東壁断面からおおよその形を復原する事はできる。

第1面相当面で南西の段差裾の溝が、畦畔の部分で直角に曲がる事や、段差に取り付いた部分とトレンチ南東壁断面を復元的につなぐラインから見ると、一番新しい段階では、北に続く坪境畦畔が南北の正方位を向くのに対し、旧落堀川と直交する北西～南東の方向で作られていたようである。

その時点では幅4m強、上面は段差肩部より20cmほど低く、高さ60cm以上ある、かなり大きな畦畔だったようである。

それでは9 トレンチ南東壁の断面から、この畦畔の変遷をたどってみたい (図10上段)。

まず、この畦畔が段差と平坦面の造成当初から作られていたであろう事は、断面図の5の層が畦畔位置の右側でかなり盛り上がっている事から推測できる。この層は平坦面の整地土と思われるので、これが一番古い畦畔の基部の残りであろう。

その後、15～17の層を埋土とする部分で、調査中は安全確保のため底部を確認できなかった激しい浸蝕が起き、畦畔のほとんどを崩壊させる。

この浸蝕痕は不定形ながら畦畔とほぼ同じ方向で鋭く切れ込み、北東側にやや浅い浸蝕を見せる。また、北東側の肩は凹凸を見せながら落ちていくが、南西側は水流の攻撃面の特徴を持ってややえぐれたような形である。

これは浸蝕が畦畔の北東側から起こり、畦畔を崩していく部分で下方への浸蝕も激しかった事を示す。また、この浸蝕痕は、段差上面の4 トレンチ第2面で南東辺沿いで検出した189・190土坑とした浸蝕痕と一体のものである。

つまりこの浸蝕は、段差上までも溢流した旧落堀川の洪水が、坪境畦畔に当たって段差下の畦畔上に流れ込み、段差下平坦面を上流から流れてきた水流と重なって激しい浸蝕を起こし、畦畔を崩壊させたものと考えられる。

その後、浸蝕痕は断面図15～17の層によって埋め立てられ、9・10の層の盛土を以って畦畔が復旧される。その盛土の質を見ても、平坦面の耕土との層的關係でも、平坦面の下層耕土の時期に行われた事が分かる。

その時点で復旧された畦畔は断面で南西裾部は5の層の盛り上がりと同じ位置で、後の畦畔盛土でも位置が動いていないのは分かるが、全体の規模は不明である。なぜなら、また畦畔の北東側が浸蝕されているからである。11～14の層が入っている凹部がその浸蝕痕である。

11～14の層は11・12に不明確ながらラミナが見られ、13が砂層である事から見て、浸蝕を起こした時の洪水堆積物の可能性もある。それらを8のブロック土層で埋めて整地しなおし、6・7の層を盛土して再び畦畔が復旧される。

その時点で併存する平坦面の耕土は上層耕土となる。洪水を契機に新たな耕土が形成された事になる。そして畦畔南西側から段差裾部を伸びてきた溝が直角に曲がって畦畔南西側裾部を通るようになる。畦

畔より南西側の段差下平坦面はその後もう1層耕土が追加されるようである。

最終的な畦畔は基底部幅4m強という大きさであった事が知られるが、当初の畦畔も浸蝕痕の形態と位置から推測するにはほぼ同じ規模であったと思われる。当初から洪水の被害を想定していたが、予想以上の浸蝕を受けたというところか。しかし、ある意味南西側で若干の高まりを残すぐらいは水流に耐えたとも言える。

この大畦畔は、北の坪境畦畔に続く国境の表示として、短い距離でも洪水で位置が不明確にならない規模のものを作らなければならなかったであろう。しかし、そのためにかえって浸蝕の被害が集中する地点になったとも言える。ただ、幅の狭い段差下平坦面の実際の耕作に支障をきたさないように、北の坪境畦畔とは方向を変える柔軟さは許されたようである。

遺物は316落込から若干が出土している。いぶし平瓦18片、いぶし丸瓦2片。須恵器は坏1片、高坏2片。土師器器種不明1片。サヌカイト剥片1点。ベトナム産長胴壺らしき陶器1片。土人形1点。図化できたのは図15-5の土人形1点のみであった。磨滅するが、型押しした像のようである。表面の凹凸の隙間にわずかに朱が残る。胎土は砂粒を含まない粘土で、外面10YR8/3浅黄褐色、内面は10YR8/2灰白色で黒斑あり。下面に刺突による穴があり、その周辺は焼成後斜めの面を削り出している。像の脚部を欠くところから見ても、二次的な面形成か。

遺物からは近世以降としか言えず、埋土の層位による遺物の分別もできなかったので、畦畔を破壊した浸蝕の時期を限定する事はできない。

(3) 土坑

189・190土坑 4トレンチ南東壁沿いの中央近くで、第2面で検出した遺構である(図20)。第1面では浅い攪乱が上部にあった。190土坑はトレンチ内で183畦畔・203溝の南端を切っている。

土坑としたが4トレンチ南東隅の9トレンチでは第1面で今井戸川に向けて一段落ちた平坦面が造成され、その段差法面がトレンチ境になっているので全体の形も判然としない。189土坑は平面形が円のように見えるが、190土坑はかなり不定形である。どちらも埋土が第1面の9トレンチに落ちる段差斜面のオリーブ灰色系の盛土と共通し、9トレンチの遺構との続きぐあいを見ても本来第1面の遺構であると分かる。

トレンチ南東壁断面で、189土坑は長さ1.3m、190土坑は長さ5.1mの規模がある。どちらも南東方向に深くなっていき、最深部は確認できなかった。

位置的には、9トレンチの段差下平坦面、331畦畔が作られ、それが浸蝕と復旧を繰り返した部分の段差上に当たる(図9)。9トレンチ側第1面で最初に形成された深い浸蝕痕と形態も似て、位置的にも一つながりであった。331畦畔の項で先述したように、旧落堀川からの洪水が段差上にまで溢れ、坪境畦畔に当たり、その南端を浸蝕しながら段差下の流れ落ちた痕跡であろう。

この部分は第3面で202落ち込みがあり(図28)、その埋土でも特に砂質で締りの悪い埋土が広がる部分である。そのために段差法面も浸蝕を受けやすい状態であったと言える。

190土坑から若干の遺物が出土している。小片のみで実測できるものはなかった。いぶし平瓦3片、京焼系陶器1片、常滑らしき陶器1片、須恵器3片、うち壺1片、土師器6片、うち高坏2片。

272土坑 8トレンチの南東壁附近では旧落堀川造成に伴って作られた9トレンチの平坦面に落ちる段差の肩部が検出されたが、それに沿ってトレンチのほぼ中央に位置する大型の土坑である(図20)。オリーブ灰色系の段差盛土も切りこみ、旧落堀川造成後に掘られたのは確実であり、第2面で検出したが、

本来第1面の遺構である。

形の崩れた部分はあるが、長軸6.9m、短軸約3mの隅丸長方形の平面形を持つ。長辺が南東に隣接する段差と方向的に平行する。

北西辺の中央がやや膨らむが、これは本来の肩部が崩落し下にずり落ちたためであり、その土塊は壁面に付いたまま、そこでは二段落ち状の形態を成していた。

壁は割りと立ち、50度くらいの傾斜である。底部は平坦だが、中央部分が深さ約60cm、周辺部分が約68cmと周辺がわずかに深い傾向があり、壁面と底面の角は鋭く屈曲する。その形状から元々はなんらかの護岸施設があったのではないかと推測される。

土坑の東隅に底部から南東方向、現今井戸川に向かって溝が掘られ、その中に土管が埋設されていた。その溝上には2回以上にわたってコンクリート水路が繰り返し作られている。また、その溝の下には段差部分に273井戸が隣接している。北東辺に隣接し、コンクリート枠の現代井戸が残存していた。

埋土は主に上下2層に分かれ、上層はブロック土のみ、下層は現代耕土系と思われる砂質土の中にブロック土が入ったもので水成堆積層はない。おそらくは堆積物を浚ってから埋めたのであろう(図11)。

その形状と位置、そして井戸が付随する事から、これは井戸から汲み上げた水を溜める水溜めと考えられる。出土遺物から、埋められたのは現代と分かるが、作られたのは大和川付け替えの時期にまで遡る可能性がある。

埋土内遺物は磁器22片、陶器8片、土師器3片、瓦器1片、瓦質土器1片、瓦2片、ガラス小瓶1点、砂岩製砥石1片が出土している。

図15-7は塀摺鉢片である。残存率は10%以下、口縁部周は15%。胎土は、外面にぶい赤褐色2.5YR5/3~5/4、内面にぶい赤褐色2.5YR5/4~4/4、断面にぶい赤褐色2.5YR5/4を呈し、石英・長石を含む。わずかだがチャート・泥岩も含まれる。

内面摺目は10条1単位、右が左を切るのが基本のようだが、破片中央の摺目は左右両方を切る。摺目の前は内外面とも回転ナデ、外面体部はその前に回転ヘラケズリか。

外面口縁部よりやや下で水平に走る凹線は、凹部内の凹凸が激しく、あまり擦痕が見られない。この凹線内で約1cm大のシャモットが体部にめり込んでおり、これが回転してきた偶発的な凹線の可能性が高い。19世紀代のものであろう。

図15-8は陶器製の歯磨き粉入れの蓋である。ほぼ完形。胎土は灰白色2.5Y8/2より白いオフホワイト。上面にコバルト釉で丸に歯のマークと英語があるのは外郭線内が斜線で充填されているので印刷のようである。その部分はやや凹む。



1. 灰青～黄 5Y5/3~5/1 砂質土 粗砂～シルト主体 中砂～小礫あり
「陶器類 2.5Y6/8 粘土～シルト(第6層)」・「灰灰 10YR4/1 シルト(第2層)」・「灰灰 10YR5/1 シルト～細砂(第3層)」の直径15~3cmのブロック非崩れ多し
2. 灰 7.5Y4/1 砂質土 粗砂～シルト主体 粗砂多し(第0層?) 上記第6層・第2層の直径10cm前後のブロックあり
3. 灰灰 10YR4/1 シルト 下面は第6層と接して深層 土坑内部第2層の粘塵土
4. にごり黄 2.5Y6/3 砂質土 粗砂～シルト主体 粗砂～小礫若干あり 段差部磁器土、273井戸はこの上面から切り込み
5. 「灰黄 2.5Y7/4 シルト(第6層の定色?)」・上記第2層・第3層・「灰灰 10YR3/1 シルト(第5層)」の直径5~10cmのブロックあり 段差部磁器土

図11 第1面相当面 272土坑 断面図

全体に釉がかかるが、口縁端部から内面の3mmほど上まで釉ハギが見られる。釉には貫入が激しい。図15-9は無釉陶器の小杯。汽車土瓶の蓋兼杯か。ほぼ完形。胎土は暗灰黄～黄灰色25Y5/2～5/1を呈し、0.5mm以下の長石・石英をわずかに含む。

底部外面は無調整でわずかに粘土紐の痕跡残る。他は内外面とも回転ナデ。体部下方は強い回転指ナデで絞り込む。

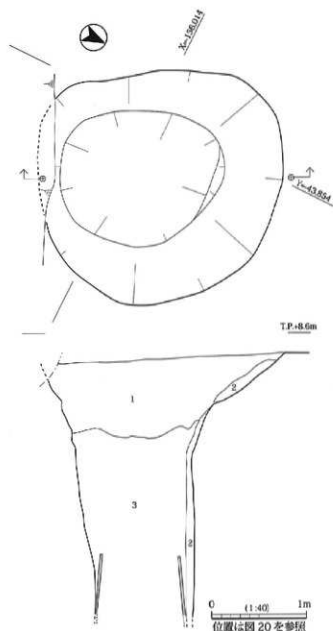
図15-10は土師器鍋の把手か。把手は完形。鍋口縁部は周の15%ほど残存。胎土にはぶい黄褐色10YR6/3を呈し、0.5mm以下の石英をわずかに含む。

体部内面は回転ナデ、外面は型押しした雷文が入る。把手は中空の合わせ型作りで下方に穿孔1個あり。ナデで仕上げた後、上下に刻印が入る。上面は長方形枠内、上の横並びの2文字は判読不能だが、漢字で「特製」か「謹製」だろうか。その下に縦にカタカナで「フジタカ」。下面は上に圖案化された「瀬」の一字、下にローマ数字で「250」。「瀬」は瀬戸を意味するの。

陶器の中には19世紀代の堺播鉢などもあるが、英語表記の南磨き粉入れの蓋などもあり、磁器には高台内に「明治硬質磁器」とスタンプされたものもあるので、埋められた時期が明治以降であるのは確実で、おそらくは現代であろう。

(4) 井戸

226井戸 6トレンチの南東辺のほぼ中央に位置する(図20)。このトレンチの南東側、現在の今井戸川との間は、深い建物の基礎で攪乱されていたが、本来は9トレンチで検出された段差とその下の平坦地の続きがあったはずであり、その段差の肩部上に位置している事になる。その位置と、第1層掘削中に検出できた事、埋土に現代耕土と質の似た土もある事などを合わせると、本来第1面の遺構であった事はほぼ確実と言える。ただし、南東側の一部が段差に切られ、暗灰黄色系の段差盛土が破っている事を確認しており、旧落堀川へ一段落ちる段差の盛土のうち、最上層のものよりは古い時期に埋め



1. 灰5Y4/1 砂質土 磁器～シルト主体 粗砂～中砂あり 小礫あり 同色の層1～3cmのブロック若干あり
「オリブ質5Y6/4シルト」の層2cmほどのブロックわずかにあり
2. 1の内に「オリブ質5Y6/4シルト」・「明治陶2.5Y6/6粘土～シルト(第6層)」・「灰5Y5/1シルト～磁砂」の層1～4cmのブロックあり
3. 灰N4/0 粘質土 シルト～磁砂主体 中砂若干あり
「オリブ質10Y5/2シルト」の底層1～2cmのブロック若干あり

図12 第1面相当面 226井戸 平・断面図

られている事になる。これも旧落堀川河部の遺構に含められるであろう。

平面形は南西附近がやや直線的になる不整形円形、径は2.4~2.7m。断面で見ると第2面から下へ90cmほどまでは上に大きく開くが、そこから下はほぼ垂直に近い掘り方になり、長径1.75m、短径1.45mほどの楕円形になる(図12)。

確認できた埋土は3層。北西附近の壁沿いに裏込め土の残存が認められた。下部で確認した井戸枠の外側に入るので裏込め土である事は確実である。上部の大きく開いた部分にも残る事から、この断面形状が掘削当初の形状であった可能性が高い。大きく広がる部分は砂質土にブロック土が混じる土で埋められるが、砂質土は現代耕土に似る。下部の壁が立つ円筒形の部分はやや遅元的雰囲気のある粘質土にブロック土が混じる埋土。深度2m以下は崩落の危険があり、間近で観察できなかったが、埋土に変化は認められなかった。

深度1m強附近から下で、井戸壁面で第6層の下の砂礫層が現れ崩落の危険があったので、深度1.5m以下は人力掘削を諦め、トレンチ埋め戻し前に重機で掘削し、上から略測した。しかし、深度3mを越えた時から周囲にもクラックが広がって近づけなくなり、さらに掘り下げて底部を確認できないまま崩落したので調査を打ち切り、すぐに埋め戻した。

下部の観察結果は以下の通り。

第6層の下の砂礫層が壁面に見えた上端はT.P.+7.3m。その下端で再び粘土層に変わるのがT.P.+6.4~6.1m。T.P.+5m附近から下に行くに従い漸移的に粗い粒子になり、湧水が見られるようになった。T.P.+6.24mを上端として、木製枠の井戸枠を確認した。略測できたのは上から1段目の上部のみだが3段目までであったのは確認しており、樽板一枚の長さが98cmで上下の重なりが10cm程度であったから井戸の深さは4.5m以上あった事になる。

埋土最上層からわずかに遺物が出土している。土師器が弥生土器の小片1、いぶし平瓦片1、磁器小片1。凶化可能なものなし。遺物からも埋められた時期は近世以降と言える。

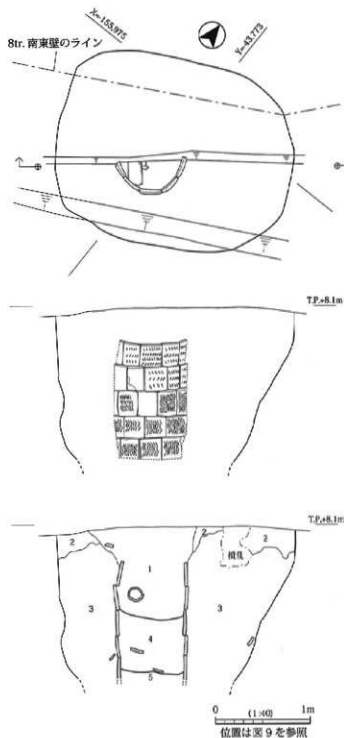
273井戸 8トレンチと9トレンチの境にまたがってあった(図9・20)。8トレンチの272土坑の南東側に隣接し、今井戸川側に落ちる段差のオリブ灰色系の盛土を切り込んでいるので第1面相当の遺構である。272土坑の南東辺のこの付近は第1面がやや低く、現代耕土系の層で覆われていたので、北側に隣接するコンクリート製井戸枠の井戸が掘削される前に埋められ、整地されたようである。

初め8トレンチで掘り方を確認し、トレンチ南東壁で断面を確認しようとしたところ、崩れた壁面から井戸枠瓦が見えたので、9トレンチ側で本格的に調査した。

9トレンチでは検出面から1.7m下まで、井戸枠瓦5段目まで調査したが、裏側が8トレンチを埋め戻した後、本体工事によりさらに高さ4mの土盛りがなされたので、それ以下の掘削は危険と判断し、調査を打ち切った。

平面形は約2.5m四方のやや丸みを帯びた隅丸方形の掘り方を持つ。南東辺は段差層部に若干かかり、それと方向を合わせる。断面形は壁が立つが、次第に下に狭くなり、井戸枠5段目付近で急に狭くなるようである。井戸枠は井戸枠瓦によって作られ、掘り方の中でやや南東に偏り、南東辺から約50cm離れた位置で直径約80cmの円形である(図13)。

井戸枠の1段目は掘り方が確認された高さから約35cm下から検出され、そこまでの裏込め土が斜めに切られ、1段目の井戸枠瓦がやや傾いたものも見られる事から、本来まだ上に数段は積まれていたものが抜き取られていると思われる。井戸枠瓦は横との接合部分が上下段で重ならないように積まれていた。



1. 陶瓦 2.5Y5/2 砂質土 シルト～細砂主体 粗砂～粗粒砂あり 小中礫若干あり
2. 陶瓦 2.5Y5/3 砂質土 粗砂～シルト主体 中砂～粗粒砂あり
直径 1cm 程度の「浅黄 2.5Y7/4 シルト (第6層?)」のブロックわずかにあり
今井戸内埋土からの二次的埋土か
3. 2と「灰 10Y6/1 シルト～細砂」・「黄褐色 2.5Y7/5～6/6 シルト (第6層?)」の直径 3～1cm のブロックあり
4. 「黄灰 2.5Y5/3 砂質土 粗砂～シルト主体 中砂～粗粒砂あり (段差盛土起源) のブロック状構造内に第6・第2層の直径 10～5cm の扁平なブロック若干あり
5. 「黄灰 2.5Y4/1 砂質土 粗砂～シルト主体 粗砂～中砂あり (現代粘土層0層に似る)」内に第6・第2層の直径 5～2cm のブロック若干あり

図13 第1面相当面 273井戸 平・立・断面図

瓦には外面の刻み目が4段で密なもの・3段で粗なもの・刻み目が無いものの3種があり、上から4・5段目は刻み目4段のもののみ、3段目で刻み目なしが混じり、1・2段目は刻み目3段のものの中に刻み目が無いものが混じる状態であった。

裏込め土は第6層とかなり明度の高い灰色シルト～細砂のブロックからなる。上部は段差のオリブ灰色系盛土のブロック土である。

井戸枠内埋土はブロック土の状態ですべての層に分けられたが、いずれも基本は現代耕土のブロックが中心で、第2・6層のブロックが混在する。井戸を埋める際、周辺で第6層にまでいたる掘削が行われた事を示す。断面図の4の層(図13下段)はブロックが扁平であるので、この層の時点で沈下を防ぐ叩き締めが行われたと思われる。

この井戸で特徴的なものは、南東側315落ち込みに向かって直線的な330溝が掘られていた事である(図9最下段)。

幅1.5mほどの溝で断面「V」字形、非常に深く、井戸よりさらに80cm深く、T.P.+5.8mまで掘り下げたが底に達せず、安全の為それ以下の掘削は行わなかった。

掘り方は段差法面から段差下平ら面にかけて、第1面で検出しており、段差造成当初に作られたと思われる、井戸の掘り方より先に運められている。

確認はできなかったが、おそらくは旧落堀川の河床から273井戸に向かって木樋などを入れた導水施設ではないかと考えている。

そうならば273井戸も、この溝が通る段差と平坦面も、落堀川造成と同時に作られた事になる。

出土遺物は、井戸枠瓦89点、内刻み目4段30点、刻み目3段32点、刻み目なし27点。

いぶし丸瓦2片、サヌカイト剥片1、チャート1点（火打ち石か）、土師器器種不明8片、磁器碗2片、鳥形土人形1点である。

井戸枠瓦は刻み目が4段、3段、なしの3タイプから1点ずつ実測した。

図15-1は刻み目が3段のものである。器表は黒褐色2.5Y3/1を呈し、破断面は浅黄色2.5Y7/3を呈する。胎土には1～5mmの長石、1mm弱の石英あり。端面は4面ともナデだが、下端面は粗く、紐圧痕が1条ある。内外面はタテナデで、上下端部はタテナデ後ヨコナデ。刻み目は木目が浮き、角の丸まった板状工具を斜めに刺突したもののようである。

図15-2は刻み目のない井戸枠瓦。左右の端面はへら切り後ナデ、上端面はナデ後ミガキ、下端面は粗いナデである。内外面タテナデ、外面にはその後の浅い圧痕が5個見られる。方形の端面を持った工具が軽く当たったような痕である。右辺上方と左辺下方に指3本ずつの圧痕がある。器面は黒色2.5Y2/1を呈し、破断面は灰白色5Y7/2で3～1mmのチャートと1mm前後の長石・石英若干あり。

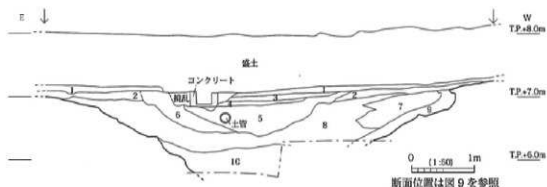
図15-3は刻み目4段のものである。左右端面はナデ、上端面はナデ後ミガキで長方形の枠内に「界瓦利」と書いた刻印あり。同じ刻印のあるものがもう1点あった。下端面は粗いナデで紐圧痕1条あり。内外面はタテナデ後上下ヨコナデ。刻み目はクサビ形で、幅の狭い部分が深く、長辺の一方が垂直に近く、他方が角度が緩い、木目のない鋭利な工具で切り取ったものようである。器表は黒色N2/0を呈し、破断面は灰白色2.5GY8/1で、1cm前後の瓦片を含み、1mm弱の長石若干あり。

図15-4は土師質の鳥形土人形である。井戸枠の裏込め土から出土。外面は橙色5YR6/6、破断面は明赤褐色5YR5/6を呈す。胎土に粗砂粒はなく、0.5mm以下の長石・石英・黒色砂粒あり。左右を合わせる型押し作りで、腹側に前上方に向かっての刺突による穴がある。尾羽部分を欠損するが、肩羽根の表現もあり、背中に模様もあるので、山鳥の意匠か。

出土遺物からは近世と言える程度でそれ以上は時期を限定できない。

(5) 落込

315落込 273井戸で上述したように、その南東側に溝でつながる遺構である（図9）。9トレンチ北東



1. 地床直 2.5Y5/2 ～ 4/2 砂質土 雑砂～シルト主体 粗砂若干あり 小礫わずかにあり 非土
2. 地床直 2.5Y5/3 砂質土 雑砂～シルト主体 中砂～粗砂若干あり 第6層の直径1cm以下のブロックあり 豊地土?
3. 地床直 2.5Y5/2 砂質土 細砂～シルト主体 粗砂～中砂あり 小礫わずかにあり 第6層の直径1cm以下のブロックわずかにあり 豊地土
4. 3に第6層の直径3～1cmのブロックあり 豊地土
5. 5・3・第6層の直径10～3cmのブロック 粗粒地土
6. IC 10Y4/1 粘質土 シルト～細砂主体 粗砂～小礫若干あり
7. 第6層の直径15～4cmのブロック間に8と用砂あり
8. 地床直 2.5Y5/3～オリーブ層 2.5Y4/3 砂質土 極細砂～シルト主体 粗砂あり 小礫わずかにあり 第6層の直径4～2cmのブロックわずかにあり
9. 8・「内径 2.5Y5/1 シルト」・第6層の直径15～2cmのブロック
10. 地床直 2.5Y5/4～オリーブ層 2.5Y4/3 粘質土 シルト～細砂主体 中砂～粗砂若干あり 管状Feわずかにあり

図14 第1面相当面 315落込 断面図

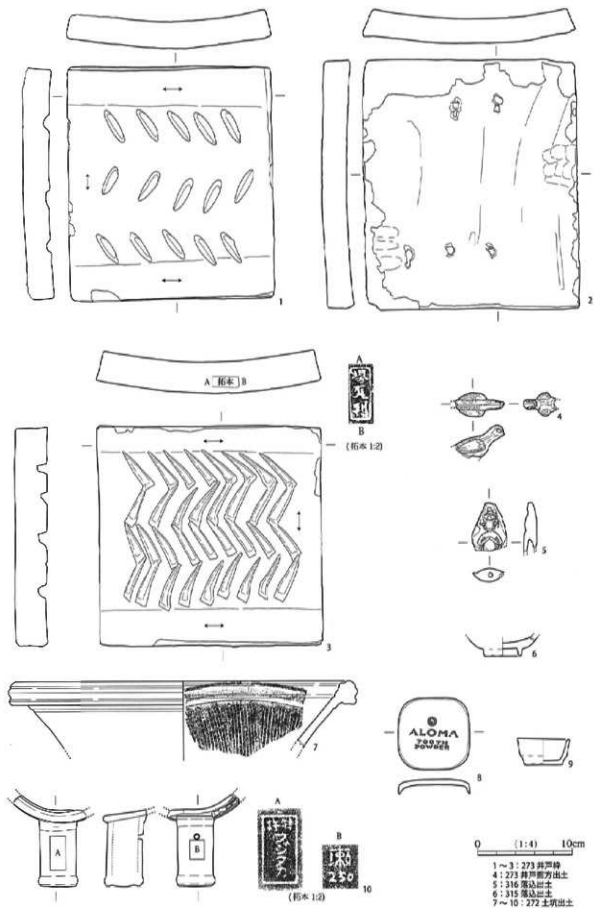


图 15 第 1 面相当面 遺構出土遺物

側で、トレンチ南東壁にかかり、330溝の埋土を斜めに切っている。第1面で検出されたので、遅くとも段差下平坦面下層耕土が耕作されている時点で形成されたものであろう。

これも1.2mほど下げて底部に達せず、現地表から2.2mとなり、安全のため調査を打ち切った。

平面形は不整な円形のようにも見えるが、トレンチ南東外に開く形である可能性が高い。

断面形はなだらかに播鉢状に落ちていく。ただし南西側はややくれたような形状を残す。

断面図で見ると(図14)、1は上層耕土で、現代盛土直前まで耕作されていた事が分かる。3～6は近代以降の攪乱である。2がこの落ち込みを埋め戻した後の整地土である。7～9は人為的埋土で7・8は同時平行である。9と10の関係は明らかではないが、9がブロック土で10がブロックを含まない粘質土であるから、9は10の上位であろう。10は攪拌された土であり、かつ上面が平坦であるので、ブロック土はないが、これも人為的埋土であろう。しかしこの質の土層は周辺には見当たらない。

断面形の南西側形状や不整な平面形から、河岸が増水時に浸蝕された痕と思われる。おそらくは330溝の部分が強度的に弱かったところから浸蝕を受けたのであろう。川の中に、井戸から伸びた木柱などの施設があり、そのため水流が乱れて岸辺の浸蝕が強まった可能性も考えられる。

出土遺物は少なく、いぶし平瓦が6片、肥前灰釉碗が1片のみである。

図15-6は肥前灰釉碗片である。全面施釉、壺み付け釉ハギ。内面の軸ハケ目の回転軸と高台径の中心点にずれがある。釉色は灰色7.5Y6/1～オリーブ灰2.5GY6/1。破断面灰白色5Y7/1を呈する。17世紀後半頃のものか。旧落堀川造成前であり、矛盾はない。

4. 旧落堀川肩部段差下平坦面耕土包含遺物

下層耕土の包含遺物を「第1層」として取り上げた。量は少ない。

須臾器は壺1片、坏2片。土師器は5片、内羽釜1片。いぶし瓦小片1片と陶器片2片が全てである。陶器碗片1片のみが図化可能、図25-12である。肥前陶器で全面施釉、壺み付け釉ハギ、砂目積み。釉はオリーブ黄色5Y6/3、破断面に見える胎土は灰白色2.5Y8/2を呈する。17世紀中頃のものが。

遺物量が少ないので確実な事は言えないが、少なくとも新しい時期のものは含まず、江戸時代の間に上層耕土が成立した可能性が高いとは言える。

5. 小結

はからずも今井戸川、旧落堀川の肩部を調査する事となったが、落堀川の造成当初の様相を把握できたのは貴重な成果と言える。

肩部が二段となって高水敷が作られており、その平坦面が耕作地となっていた事や段差の丁寧な作りも判明し、その肩部に井戸や水溜が作られていた状況も把握できた。

また、付け替えられた大和川南岸堤防裏の悪水を抜く為の人口河川でも、度々水害で浸蝕を受けている事も分かり、その維持管理の苦労がしのばれる。

高水敷となる段差下の平坦面で、河内と摂津の国境になる坪境畦畔の続きに大畦畔が作られていた事は意外であった。わずかな距離で、増水時には破壊される事は目に見えているのにあえて大きな畦畔を作るというのは、当時の人々の国境を含めた土地境界への意識の高さを示すものであろう。

また、そのような国境を越えてまで行われた大和川付け替えというものが、いかに困難な大事業であったかも考えさせられる。

第3節 第1-2面

1. 概観 (図16・図版5~7)

調査区の大部分は現代盛土を盛る際の攪乱の他、多くの建物の基礎・道路の側溝などの攪乱が第1-2層にまで達しているものが多く、第2面より上の面の調査は実質不可能な状態であった。

しかし、10~12トレンチでは江戸時代の大和川堤防の盛土により、耕土系第1-1層が残存しており、攪乱も少ない状況であった。

堤防盛土下の第1-1面は堤防築造時に変形しているようだが、第1-2面は良好に残存しており、18世紀初頭以前の耕地床面であるため、10~12トレンチでは第1-2面から面的な調査を開始した。

10トレンチの南西端で南側に張り出した部分では、現堤防裾部から南東側は全面深く攪乱を受け、矢板囲い内の掘削限界深度T.P.+7.8mまで達しても攪乱の底が確認できなかった。また、11トレンチの北東半は南東側が堤防盛土の外になるので、やや攪乱が多い。

他のトレンチでは耕土に伴う畦畔の盛土が耕土と分別できない事が多く、耕土上面で検出できなかったものが多いのに比べ、10~12トレンチでは耕土系第1-1層の上面から畦畔盛土の上部が確認できるものが多く、耕土床面ではその耕土に伴う畦畔を、盛土を残した状態で検出する事ができた。

耕土と畦畔盛土の違いを検出できた一番の理由は、江戸時代堤防盛土下では鉄分の沈着の差などが残されており、それにより視覚的にも認識しやすかった事による。他の部分ではおそらく本来あったその差が、後発的な現象により鉄分などが溶脱する事によって認識しにくくなったのであろう。

この面で検出した遺構は全て、耕土系第1-1層が耕土であった時点の床面の遺構である。最大の成果はその時点での東西方向坪境と南北方向坪境の形態を確認できた事である。

他に坪内を区画する畦畔も検出できた。東西方向と南北方向の坪境に囲まれた、調査区内北西側の坪では、坪内は東西方向に長い耕地区画に割られていた。各々の区画は約10m強の幅が基本のようだが11トレンチ398畦畔と12トレンチ520畦畔の間は15m強の幅がある。

10トレンチ東西方向坪境の南側には南北方向の351畦畔が見られ、調査区南西側の坪では南北方向に長い地割りがあったと推測される。しかしその方向性は南北の正方位から北が10度ほど西にずれる。また、各坪の鋤溝の方向はおおむね統一性があるが、部分的に異なる方向の鋤溝も検出されている。

調査区付近の条里制地割りは完全に整然としたものではなかったようである。

各々の耕地区画の面の高さは南西が高く、北東が低いが、最高所の10トレンチ南西側でT.P.+8.67メートルほど、最も低い11トレンチ北東端付近でT.P.+8.4mほどである。小畦畔の両側ではほとんど高低差は見られず、主に東西方向坪境で北に、南北方向坪境で東に落ちる。これ以下の面よりかなり平坦化が進行していると言える。

2. 主な遺構

(1) 東西方向坪境 (25溝・349畦畔・357畦畔) (図17下段・図版5)

10トレンチの中央付近を東西に走る坪境である。25溝を349・357畦畔が挟み込む形となっている。

この坪境は1・8トレンチでも第2面で、第1面の遺構と認識して検出しているが、極めて不完全な形でしか検出できていない。

それらは「第4節 第2面」で再述するが、1トレンチでは25溝のみ検出で、トレンチ東側の25溝南

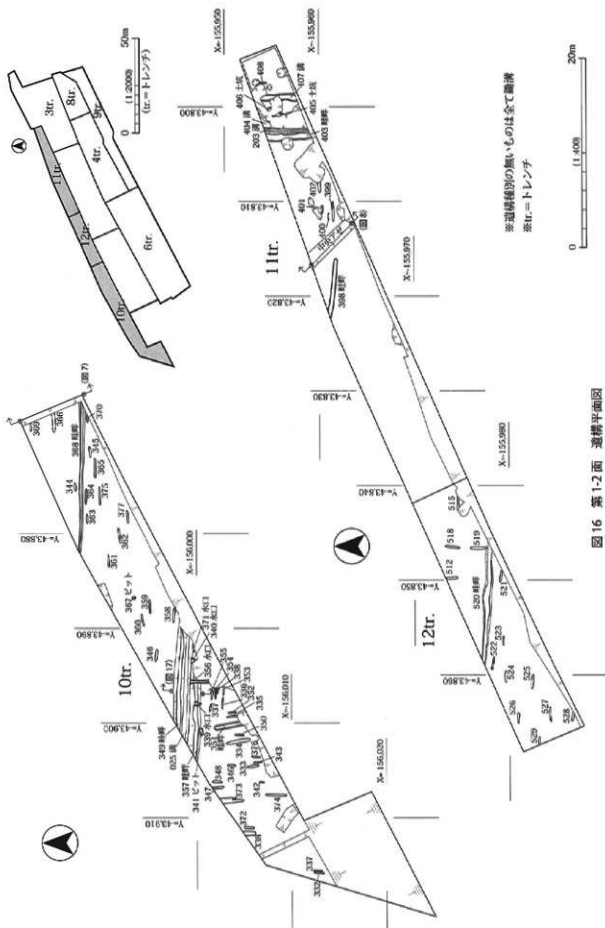


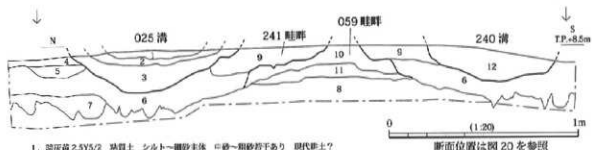
図 16 第 1-2 面 遺構平面図

側に畦畔の痕跡らしきものがあつた程度である。6トレンチでは25溝の南側に357畦畔に続くであろう241畦畔が盛土をわずかに残し、下に第2層時点の59畦畔の頭が突出して保護されている状態で残存し、さらにその南に浅めの240溝が認められた。10トレンチの坪境の形態とは異なっている。

10トレンチでは江戸時代の堤防盛土で埋没しているが、1・6トレンチではそのまま現代耕土の時期まで存続していた可能性があり、25溝の埋まり方も異なっている。

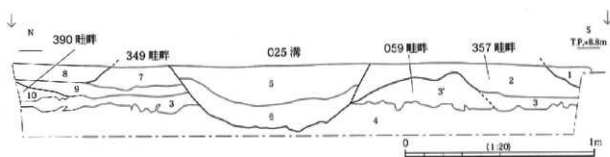
25溝 両側の畦畔の上面で幅90~104cm、深さ30~34cm。底部のレベルはやや西に下がっていく傾向があり、北側の耕地区画の平坦面より25cmほど低い。埋土は上下2層あり、下層がラミナのある細砂~シルト層で、上層が耕土系第1-1層のブロック土なので、常時流水があるような溝で、最後に人為的に埋められた事が分かる。

1・6トレンチと10トレンチでは埋まり方が異なり、埋没時期も異なる可能性が高いので、ここでは



1. 黄灰 2.5Y5/2 粘質土 シルト~細砂主体 中砂~粗砂若干あり 現代耕土?
2. 「黄灰 10YR5/8 シルト~粘土」・「黄灰 10YR5/1 シルト」の層状なブロック 025 溝埋土
3. 黄灰 2.5Y4/1 粘質土 細砂~シルト主体 粗砂若干あり 小礫あり 025 溝埋土
4. 黄灰 2.5Y4/1 粘質土 シルト~細砂主体 粗砂あり 第1-2層
5. 黄灰 10YR4/1 シルト 第2層埋没?
6. 黄灰 10YR5/1 ~黄灰 2.5Y5/4 シルト 管状 Fe 若干あり 第2層
7. 黄灰 10YR5/1 シルト (第2層) のなかの「灰 5Y5/1 シルト~細砂 (第3層)」のフレア状のブロックあり 第2-第3層のコンポリエート状態
8. 灰 5Y5/1 シルト~細砂 第3層
9. 黄灰 2.5Y4/1 粘質土 シルト~細砂主体 粗砂~小礫多し 管状 Fe・Mn 若干あり 第1-2層耕土時 241 畦畔盛土
10. 黄灰 10YR5/1 ~オリーブ層 2.5Y4/3 シルト 粗砂~極粗砂のわずかにあり 塊状 Fe あり ややブロック状塊状残存 第2層耕土時 059 畦畔盛土
11. 「灰 5Y5/1 シルト~細砂 (第3層)」・「灰 5Y4/1 シルト」のブロックあり 管状 Fe・Mn 若干あり 第2層耕土時畦畔盛土
12. 灰 5Y5/1 粘質土 シルト~細砂主体 粗砂~小礫あり 「黄灰 2.5Y5/4 シルト」の直径1~3cmのブロック若干あり 240 溝埋土

断面位置は図 20 を参照



1. 黄灰 2.5Y4/1 粘質土 細砂~シルト主体 粗砂~中砂あり 第1-2層
2. 黄灰 2.5Y4/1 ~黄灰 2.5Y4/2 粘質土 細砂~シルト主体 粗砂~中砂あり 小礫・炭化物のわずかにあり 塊状 Fe 若干あり 第1層第1-1層~第1-2層耕土時 357 畦畔盛土 (241 畦畔につながる)
3. 灰 5Y4/1 ~黄灰 10YR4/1 シルト 粗砂の降下若干あり 塊状・管状 Fe 若干あり 第2層
- 3'. 3との境不明 059 畦畔
4. 灰 5Y5/1 ~灰白 10YR7/2 シルト 上面コンポリエート 粗砂の降下若干あり 第6層
5. 「黄灰 2.5Y4/1 粘質土 細砂~シルト主体 極粗砂~中砂あり (第1-2層)」のブロック土 025 溝埋没埋土
6. 灰 N4/0 細砂~シルト 中砂若干あり 炭化物のわずかにあり ラミナあり 025 溝埋没埋土
7. 黄灰 2.5Y5/1 ~4/1 粘質土 細砂~シルト主体 中砂~粗砂あり 管状 Fe 若干あり 第1層第1-1層 349 畦畔盛土
8. 黄灰 2.5Y5/1 粘質土 細砂~シルト主体 中砂~極粗砂あり 第1層第1-1層
9. 黄灰 2.5Y4/1 粘質土 細砂~シルト主体 中砂若干あり 第1-2層
10. 灰 5Y4/1 粘質土 細砂~シルト主体 中砂若干あり 第1-2層耕土時 390 畦畔盛土

断面位置は図 16 を参照

図 17 第1-2面 025溝・第2面 240溝 059・241・349・357・390 畦畔 断面図

10トレンチでの包含遺物のみを取り上げる。

須恵器は坏片2、甕片7。土師器は器種不明14片。瓦器碗片2、瓦質羽釜片1。丸瓦はいぶし1片、須恵質1片。平瓦はいぶし4片、須恵質2片、土師質1片。肥前磁器5片、内碗2片。肥前陶器4片。他に木炭片1、凝灰岩1などがある。

図化できたのは肥前磁器碗片1のみである。

図18-5は肥前磁器染付け碗片。残存率20%、高台周55%残存。全面施釉、壺目付け軸ハギ、砂目積み。透明釉はやや青みがかり、明緑灰色7.5GY7/1を呈し、コバルト軸は淡い。17世紀後半頃のものである。

10トレンチ部分では18世紀初頭、大和川付け替えの時に堤防盛土により埋められているので、遺物の年代観に矛盾はない。

349畦畔 25溝の下端まで幅にすると1m近いが、盛土基底部の幅は50cm前後である。上部を削平されているが、残存高9～12cm。盛土と隣接する耕土系第1-1層との違いは盛土の方が鉄分の沈着が多く、混じる砂に極粗砂を含まない程度である。第1-2層の上に乗っており、第1-2層耕土時の畦畔はやや北にずれる。

357畦畔 盛土基底部幅約120cm、残存高17cmほど。第2層の上に乗る、第1-2層耕土時点から継続していた畦畔である。上部をやや削平されていて南側の耕地区画平坦面との残存比高差は3～5cmほど。盛土は耕土系第1-1層よりは第1-2層に似て、やや鉄分の沈着が多い。盛土下面で第2層耕土時点の59畦畔の頭部が突出して残る。

この畦畔には、10トレンチでの東寄り6.5mほどの範囲に四つもの水口が確認された。25溝に開口する部分の底部は25溝の底部より13～19cm高く、西側の339・356水口は南側の平坦面を切り込みながら底部は0.25溝側に傾斜している。溝へ排水するための水口であろう。

東側の340・371水口は畦畔自体が南側を攪乱されているために南側の平坦面との関係が不明で、第2面に切り込んでいる可能性もあり、底部の傾斜も明らかではない。

これらの水口により、25溝がこの地点では南側の坪からは排水を受けている事は判明したが、何故近い位置で四つもの水口が開けられているのかは明らかではない。

畦畔盛上から須恵器甕片1、土師器片2、瓦器片1、いぶし平瓦片1が出土しているが図化できるものはなく、時期を限定できる要素もない。

この坪境の畦畔は、規模が大きく耕土上下2層にわたって存続する357畦畔の方が坪境畦畔と呼べるものであろう。25溝も大きく、常時流水があったような状況を見ると坪境に沿って走る幹線的な水路と思われる。ただ、断面で第1-2面・第2面切り込みの溝がこの坪境に認められないが、25溝が幅も広く第6層まで切り込んでいるために古い水路の痕跡が消滅したのか、この面で初めて水路が通るようになったのかは不明である。

(2) 南北方向坪境 (203・407溝・403畦畔)

11トレンチの北東側で南北に走る坪境である。古来摂津と河内の国境も成し、現水みらいセンターである浄水場が建設され、その場内の市境が整理されるまでは、堺市と松原市の市境でもあった。

3・4トレンチで第2面を検出した際には、403畦畔の痕跡は一切残っておらず、第2層耕土時点の坪境畦畔である183畦畔が第2面と同じ高さに削平された状態で検出されていた。特に3トレンチでは

第3面の「難波大道」盛土が183畦畔の基部で削り出されていたものが既に露出していた。

403畦畔 幅1m前後、11トレンチで検出された高さは10cm前後だが、現堤防裾部にあたる3トレンチ北西壁断面(図33)で見ると第1-2面からの比高は17cmある。また、その断面ではこの畦畔は第1-2層耕土時点から継続している事も分かる。盛土はかなり砂粒を多く含み、耕土系第1-1層より砂質である。第1-2層が耕土として成立する時点でそれだけの砂粒が付近に存在していたとすれば、洪水砂をまとめて処理した盛土であるかもしれない。とすれば、粗砂を含む第1-2層の原材自体がその洪水の堆積物である可能性も考えられる。

203溝 11トレンチでようやく幅70cm前後の溝である事が判明した。3トレンチでも283畦畔と東隣の攪乱の間に、わずかに斜めに除去できた埋土があり、4トレンチでは東肩部は残っていないが底部がやや上がる所まで溝の形が遺存していたので溝と認識できた。本来は調査区を縦断していたものと思われる。深さ約25cm。

第2層耕土時点の183畦畔の肩部を切る形で検出され、埋土は単層で耕土系第1-1層に似て、若干ブロック上が見られる。その事からも耕土系第1-1層耕土時の溝であろう。溝の東西の耕地区画では東の方が若干高い。

この溝とその東に隣接する溝状の攪乱によって、第2層耕土時点で坪境となった耕地区画が第1-2層耕土時点から現代まで、ほとんど位置を変えずに踏襲されてきた事が分かる。

出土遺物は須恵器6片中、甕片2、坏身片1。土師器小片3。いぶし平瓦片5。

図18-3は須恵器坏身片である。残存率は10%ほど、口縁部・受け部周は20%。胎土は外面明青灰色5PB7/1、内面暗青灰色5PB4/1、断面赤灰色5R5/1を呈し、1mm前後の長石を若干、0.5mm以下の長石・黒色粒を含む。

調整は内外面とも回転ナダだが外面は残存部下端に回転ケズリ。これが底部側面のケズリで平底になるタイプである可能性が高い。残存部では身か蓋か区別がつきにくいとも言えるが、受け部から回転ケズリの残る部分までに回転ナダが2条ある事や立ち上がり部の内側の接合部の屈曲がなだらかな事から見れば蓋の可能性はない。法量から飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に限定できる。

遺物的には溝の時期を限定できるものはない。

407溝 この坪境の東側は攪乱が多いが、203溝の2.8m東に、平行して南北に走る407溝が存在する。幅は70cmほど、深さ10～7cm。底面レベルの傾斜は判然としない。埋土は203溝と似ていた。

203・407溝間は攪乱の間でわずかに残る面は403畦畔の西側の面とはほぼ同じ高さで、407溝より東側の面より10cm前後高い。またそこには、全体形が分からないが溝状・土坑状の遺構が幾つかあったようである。それらはいずれも深さ10cm以下で、埋土はブロック土であった。その埋土は凹部を埋めた整地土であった可能性もある。

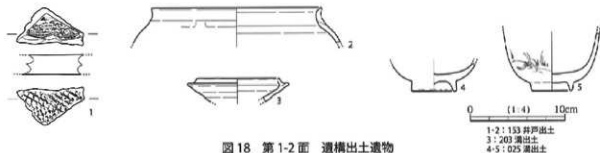


図18 第1-2面 遺構出土遺物

以上の事を見ると203・407溝間は、両溝を側溝とした幅2.8mの道であった可能性もある。ただ、国境畦畔でもある403畦畔の東隣、河内国側に、それとは別に道ができるのは不自然ではある。

出土遺物は須恵器で東播系鉢片1、甕片1、坏片2。土師器小片6、瓦器椀片3、安山岩の円礫1である。特に溝自体の時期を示すものはない。

3. 耕土系第1-1層・第1-2層等包含遺物(表2・3・図19)

今回の調査では、遺物包含層が、上部は攪乱が激しく、第2層以下はコンボリユートラミナによる層の乱れがあったために遺物の分別が難しく、その点では慎重を期した。

面を検出した後も、上層の沈み込み等が残っている場合は、その周辺部分も含め出土遺物は上層に含めた。また、面の精査中に出土した遺物はその面直上の層の包含遺物として取り扱った。包含層掘削中も他の包含遺物より新色を示す遺物が出土した場合は逐一その出土地点の状況を確認している。

そのため、全体的には各層の包含遺物はほぼ混乱なく取り上げられたと思われるが、調査始めの1・2トレンチではわずかながら混入がある可能性もある。

耕土系第1-1層と第1-2層の包含遺物を(表1・2)、そこから第2層にも含まれる14世紀代の瓦質土器以前の遺物を除外して比較すると、第1-2層にも17世紀以降と思われる一本指目の丹波焼き播鉢片が含まれるのが注目できる。

耕土系第1-1層には18世紀代以降の遺物はなく、大和川付け替え以前の耕土である事と整合性を持つが、第1-2層が埋没し、耕土系第1-1層が成立するのが17世紀代であると考えられる。

また、第1-2層では第2層包含遺物と時期的に重複しない最古の遺物として、15世紀前半に遡る可能性のある古手の備前焼播鉢片があり、第2層から第1-2層への移行の時期が14~15世紀代である事

表2 耕土系第1-1層 遺物破片数集計表

大別	細数	種別		種別		型式-部位		種別					
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%				
土師-陶磁器	170	磁器	14	8.20	碗	1	7.19						
		青磁	4	2.40	皿	1	25.00						
		陶器	21	12.40					丹波	1	4.80		
									京焼	4	19.00		
									肥前	2	9.50		
									播磨	1	4.80		
									堺磁器	2	9.50		
									備前	1	33.30		
		瓦鉢	16	9.40									
		須恵器	30	22.40	壺	16	42.10						
			坏	5	13.20	舟	2	40.00					
瓦質土器	4	2.40											
土師器	72	42.60	皿	10	13.70								
その他	116	瓦	65	56.00			いぶし	51	78.50	平瓦	25	81.00	
									丸瓦	2	3.90		
									軒丸瓦	1	2.00		
								土師瓦	6	13.60	平瓦	2	22.20
								須恵瓦	1	1.90	丸瓦	1	100.00
		石砂	1	0.90	剥片	1	100.00			サヌカイト	1	100.00	
		金属製品	1	0.90	釘	1	100.00						
		紙	5	4.30									
		織	17	14.70									
		伊勢	27	23.30									

を示す。おそらくは14世紀代と考えると大過ないだろう。

また、耕土系第1-1層は第1-2層より陶器の比率が増え多様になる。肥前系の磁器も出現する。また、逆に土師質・須恵質の瓦の比率が減り、瓦はほとんどいぶばかりと言ってよい状況となる。遺跡内の近世集落の動向は不明な所が多いが、17世紀代の日常使いの器の変化が包含遺物の内容に反映されていると思われる。ただし量は少なく、集落が近接しているようではない。

図19には耕土系第1-1層・第1-2層出土遺物で図化できたものと、攪乱や傾滑出土遺物で図化でき、注目できる遺物を取り上げた。

図19-1は12トレンチ第1-2層から出土した黒色土器椀A類底部片である。高台周の残存率は20%。外面は浅黄褐色10YR8/3、内面は磨滅するが黄灰色2.5Y5/1、破断面は灰白色7.5YR8/2を呈する。胎土には1mm弱で石英あり、長石・チャート若干あり。内面は磨滅で調整不明だが、外面は体部から高台周辺までヨコナデ、底面は不定方向ナデ。高台より内側の底部も丸く下がるので、体部が完全に椀形となっており、再び高台が高くなった、10~11世紀代の新A類である。

図19-2は12トレンチ耕土系第1-1層から出土した土師質甕口縁部片である。外面灰白色2.5Y8/2、内面にふい黄褐色10YR7/3、破断面灰白色2.5Y8/1を呈し、胎土に2~1mmの石英・2mm前後のチャー

表3 第1-2層 遺物破片数集計表

大別	総数	種類		器種		型式・器性		期間										
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%									
土器・陶磁器	998	青磁	5	0.50														
		白磁	1	0.10														
		陶器	28	2.80	すり鉢	4	14.3			鎌倉	3	75.00						
										丹波	1	25.00						
		瓦器	208	20.80					瓦台	6	2.90							
		須恵器	183	18.50	鉢	8	4.40											
					高坪	3	1.50											
					蓋	4	2.20			蓋部	1	25.00						
					甕	45	24.90											
					杯	18	10.40			蓋	1	5.30						
										甕	1	5.30						
		瓦質土器	43	4.40	羽輪	2	4.70											
					鉢	1	2.30											
					蓋	18	41.80											
					覆鉢	2	4.60											
		土師器	913	91.90	蓋	17	3.50	小皿	4	25.00								
					香炉	7	1.40											
					甕	3	1.80	口縁	8	86.80								
					不明	5	1.00	脚部	4	80.00								
						高台部	1	20.00										
黒色土器	11	1.10					A類	4	36.40	底	1	25.00						
							杯縁	7	63.60									
その他	178	17.80	瓦	44	24.70			いぶし	28	63.60	平瓦	12	42.90					
												瓦瓦	1	3.80				
												軒丸瓦	1	2.80				
												土師質	8	18.20	平瓦	8	75.00	
												須恵質	2	4.90	平瓦	2	100.00	
						石鉢	3	1.70	切片	1	33.30			サヌカイト	1	100.00		
						炭	23	12.90										
						漆	42	23.60								フスカイト	2	4.80
						伊達	64	35.00										
						木製品	2	1.10										

ト・1mm弱の長石を含む。口縁部は粘土を外側に巻き込んで形成し、ヨコナデを入れる。内面は口縁よりやや下にハケ目残る。外面は口縁部の下に板状工具の強いナデが入る。口縁部の断面形が方形に近くなるが、まだ若干逆台形であるので、16世紀末頃のものと思われる。

図19-3は1トレンチで現代耕土と第1層が攪乱状態になっていた部分から出土した土師器規炉火壺片である。残存率は60%ほど。全体ににぶい橙色7.5YR6/4を呈す。胎土には2~1mmの石英を含むが、0.5mm以下の砂粒に黒雲母が目立つ。内面はユビオサエ・ユビナデ。下部部の突帯状の部分と上下の端面はヘラ切り、それらの調整後、全面ナデ。おおよそ江戸時代のものか。

図19-4は2トレンチ側溝出土の須恵器長頸壺頸部片。波状文帯3段で大きく開く頸部を持ち、胴部には甕のようにタタキのあるタイプの壺であろう。外面灰色N5/0、内面灰白色N7/0、破断面灰白色10YR7/1を呈し、胎土に1mm前後の石英わずかにあり、0.5mm以下では石英・長石・黒色粒あり。調整は内外面とも回転ナデ。突帯のシャープさや、波状文の形からもTK208段階、5世紀中葉のもの。

図19-5は4トレンチの攪乱から出土した韓式系須恵器片である。甕胴部か。器表は灰色N5/0~4/0、破断面灰色N6/0を呈し、胎土に5~1mmの石英・長石あり。外面は格子目タタキ。内面はユビオサエ後ハケで最後にそれらをナデで半消しにする。内面調整に朝鮮半島の赤褐色軟質土器の特徴を保持している事からも5世紀前葉頃の初期須恵器段階のものと思われる。

第4節 第2面

1. 概観 (図20・図版7~11)

第1~2層耕土時点の床面遺構として、耕地区画に伴う段差・溝・畦畔基部、耕作方向を示す鬮溝、そして若干の井戸・土坑・ピットを検出している。第2層耕土時点の遺構としては、畦畔の上部を検出している。また、第1面は攪乱が激しく、面的な調査を行わなかったが、そこから切り込んだ遺構で、第2面検出時でも残ったものも一部調査した。

畦畔に関しては、今回の調査ではどの面でも、耕土とまったく同質の盛土を持つものが多いのか、耕土上面で畦畔盛土を確認できたのはわずかであった。多くは耕土下面で、上部に畦畔盛土があったために耕作が深く及ばず、まわりよりわずかに高く削り残された形が検出されたもので、これを「畦畔基部」とした。佐藤甲二氏の分類する「擬似畦畔B」に相当する。

基本的に正方位の耕地区画だが、一部に方位のずれや、不整形な屈曲が見られるものもある。基本的

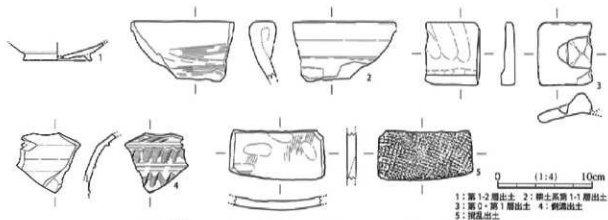


図19 耕土系第1-1層・第1-2層・第0・第1層・側溝・攪乱、出土遺物

Y=43,910

Y=43,900

Y=43,890

Y=43,880

Y=43,870

Y=43,860

Y=43,850

Y=43,840

Y=43,830

Y=43,820

Y=43,810

Y=43,800

Y=43,790

Y=43,780

X=155,940

X=155,950

X=155,960

X=155,970

X=155,980

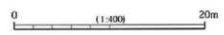
X=155,990

X=156,000

X=156,010

X=156,020

X=156,030



※選柄種別の無いものは全て簡請
※tr.=トレンチ

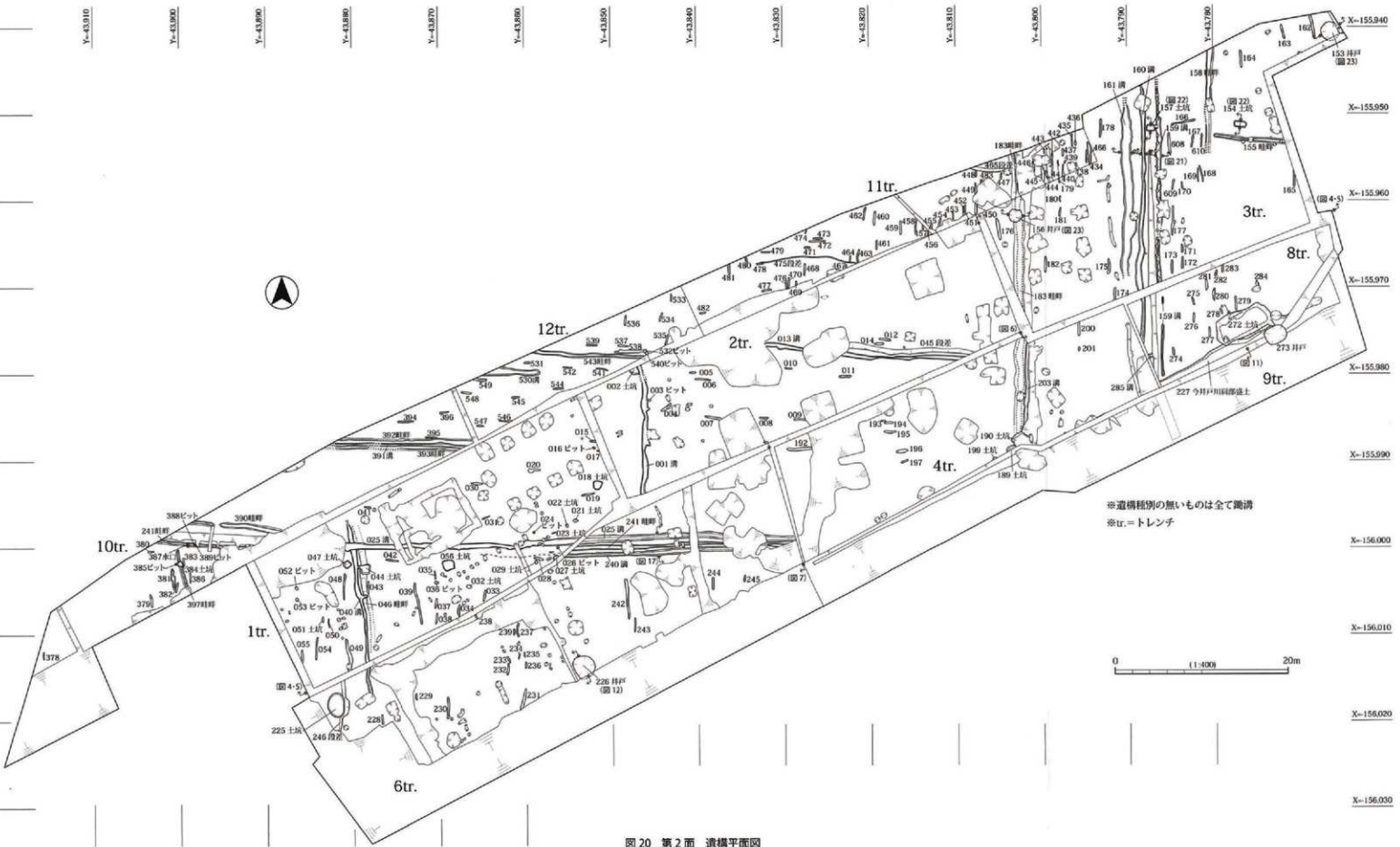


図20 第2面 遺構平面図

な耕地の単位は分かりにくい。

南北方向坪境の183畦畔以西、東西方向坪境の25溝以北の調査区内北西側坪内では南東隅で、南北を13溝と25・240溝、東西を1溝と203溝に画された、東西約44m、南北約22mの長方形の区画が確認できる。また畦畔が検出しやすかった10～12トレンチで見ると、幅10.9mの東西に長い長地型地割りが存在していたようにも見える。基本的には東西に長辺を持つ区画があるようで、13溝・543畦畔のラインより南は東西方向の動溝があり、北側は南北方向の動溝が見られる。

25溝以南の調査区内南西側坪内では46畦畔や397畦畔は正方位から方向がずれるが南北方向であり、動溝も25溝の東西方向坪境沿い以外は南北方向のもののみが検出されている。おそらくは南北方向に長い地割りがあったのであろう。

183畦畔以東の調査区内東側坪内では158畦畔159・160・161溝など南北方向の耕地区画が多いが、155畦畔が唯一東西方向に走る。動溝は南北方向のものがほとんどである。南北方向に長い地割りが基本のようだが、一定の基準幅があったかは不明。183畦畔・160溝・158畦畔を抜き出せば、その間約11m・9mとなり、かろうじて10m前後の幅の区画が並ぶようにも見える。

面の高さは大体T.P.+8.2～8.6mにおさまり、1トレンチの46畦畔以西が一番高い。25溝のある東西方向坪境の南北ではあまり高低差はなく、むしろ13溝・543畦畔のラインで大きく北側に落ちる。2番目に高いのは3トレンチ中央部分の158畦畔以東155畦畔以北の部分で、161溝・183畦畔で西側に低くなっていく。一番低いのは11トレンチの465段差より北側の部分である。

4・6・8トレンチの南東辺附近はやや南東に向けて下がるが、これは9トレンチで検出された、旧落堀川が掘削された時作られた第1面相当の段差沿いの部分が、その後地盤沈下したもので、変形に伴うクラックが目立つ。

2. 主な遺構

(1) 耕地区画に伴う畦畔・溝・段差

155・158畦畔 3トレンチの北東隅に位置する。どちらも第1～2層の耕作により削り出された畦畔基部である。盛土は第1～2層と同質のため確認できなかった。

155畦畔は幅約50cm、上部平坦面の幅約30cm。高さは高い所でも5cm弱。方位はわずかに東が南に傾くが、ほぼ東西方向の直線的な畦畔である。西端は158畦畔との間を約40cm空けて途切れる。水口か。畦畔をはさんだ南北の耕地区画の平坦面は、平均すると3cm前後北のほうが高いようである。

158畦畔は正方位の南北に直線的に伸び、幅50～70cm、上面幅30～50cmほど。高さは3cmに満たない。南に行くに従い不明確になり、3トレンチの南半では確認できなかった。畦畔の両側の平坦面は顕著な高低差は見られない。畦畔が検出できなかった3トレンチ南側でも、その延長線を境にして平坦面が西の方が高いので、耕地区画は存在していた可能性が高い。

159・160・161溝 (図20・21) 3トレンチのほぼ中央で平行して並ぶ南北溝である。3本とも北端は第2面検出時に強く下げ過ぎ、トレンチ北西壁附近では平面的に検出できなかったが、トレンチ壁で存在は確認しており途切れていない。

159溝は幅60～40cm、北側で細く検出したのは面を下げ過ぎたためである。8トレンチ側では遺存度が低く途切れる部分もある。深さは4cm前後で、底部のレベルはわずかに北に向かって低下する。埋土は第1～2層に似て、掘削時の観察でも第1～2層との層境は確認できなかった。

出土遺物はない。

160溝は最大幅78cmだが平均的には50cm弱程度か。深さ4cm前後、底部レベルは3トレンチ中央付近が一番高く、そこから南北に下がる。埋土は第2層に若干明色のシルトが混濁したような質で、第1層に見られるような粗砂は含まない。平面形では3トレンチの南側で若干鈍行する部分がある。159溝との間は北で約130cm、南で約190cm空く。

出土遺物は須恵器の坏身片1、甕片1、瓦器椀片1。

図24-3は須恵器甕口縁部片である。残存率は口縁部周でも10%以下。胎土は器表が灰白色N8/0~7/0、を至し、断面は灰白色7.5Y8/1を呈す。1mm弱の長石をわずかに含むが、特徴的なのは3mm以下の粉末状の青灰色5PB6/1の須恵器片を多く含む点である。

内外面とも最終調整は回転ナデであるが、外面頸部には外反させる以前のタキキが残る。口縁端部に残るのは粘土の皺である。頸部下端には沈線が1条走る。

時期を特定できる要素はないが、口径に比べ頸部高が低いもののようなので古墳時代まで遡るものではなかろう。胎土からは河内や和泉のものでなく他地域からの搬入の可能性が高い。

161溝は3本のうち最も幅が広いが3トレンチの南側で不明確になり、検出できなくなった。最大幅160cm、平均的な幅は110cm程度か。深さ4cm前後、底部レベルは北に向かって低くなる。埋土は第1-2層に粗砂が若干増えたような質で、掘削時の観察によれば、埋土上面は東の肩から水平に伸び、西の肩附近で西に落ちる段差を成して下がる。160溝との間は北で約130cm、南で約80cm空く。この事から見れば160溝の方位はわずかだが北が東に振っているようである。

出土遺物は須恵器14片、うち坏片7、鉢片2、壺片1、甕片3。土師器14片、うち甕片1。瓦器椀片9、弥生土器7片、うち甕口縁片3。土師質瓦片1、いぶし瓦片2。実測可能なものなし。

これら3本の溝は埋土の質が第1-2層と違いが大きいほど時期的に古いとすれば160溝が一番古く、159溝が一番新しい事になる。159溝は埋土と第1-2層との切り合いが認められない事からも最新のものであるのは間違いない。しかし、後述する157土坑のあり方からすれば、3本とも同時期存在した可能性がある。

溝周辺の第2面の高さは160・161溝間がやや他より高く、159溝東側と161溝西側を比較すると東側が高い。それと161溝埋土上面の形態を考え合わせると、160・161溝間に元々段差を伴う畦畔があり、後に161溝を埋めて段差を西側に移動した可能性が高い。つまりこの位置に畦地区画が存在したと考えられる。

おそらくその際、160溝は埋められ、159溝が掘られ、161溝西側に新たに作られた段差から159溝の間、幅3~2.5mが里道のような道になったのではないかと考えられる。里道が存在していたとすると、

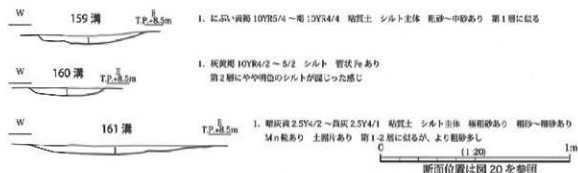


図21 第2面 159~161溝 断面図

この幅は11トレンチの第1-2面で南北方向坪境畦畔の東隣で道路側溝の可能性のある203・407溝間の幅に近い。この面で国境を兼ねる坪境畦畔から河内国側に作られた里道が、第1-2面で坪境畦畔沿いに移動したとも考えられる。

しかし、159・160溝間には溝状の攪乱が見られるので、ここの耕地区画は現代まで踏襲された可能性も考えられる。

13溝 2トレンチのはほぼ中央を東西に走る溝である。北側に5cmほど落ちる45段差を伴う。西側で段差が検出できなかったのは周囲の攪乱の影響か。平均的な幅は約50cm、平面形で細く見えるのは検出時に第2面を強めに下げ過ぎた部分である。深さ約5cm。

底部のレベルは2トレンチ中央の攪乱東側附近が最も高く、東西に下がっていく。東側は203溝のある坪境につながると思われるが、攪乱が集中していたので検出できなかった。

西側では大きな攪乱を隔てて12トレンチの543畦畔と同じ通りの耕地区画になると思われるが、543畦畔の方が1mほど南に位置し、わずかにずれている。

出土遺物は瓦器破片4、土師器片8。図化できるものなし。

1溝 2トレンチ西側で南北に走る溝である。幅60~80cm、深さ約8cm、底部のレベルはわずかに北に下がっていく。北側が調査区端付近で若干西に曲がっている。東側の肩部で2ヶ所、若干突出する部分があるのは水口のようなものである。その形状から少なくとも東側には畦畔が付随していた可能性が高い。溝をはさんだ東西の平坦面では東がわずかに高い。12トレンチの543畦畔とトレンチ境で交差するはずであるが、その部分は検出できなかった。出土遺物なし。

25・240溝・241畦畔(図17) 1トレンチから6トレンチにかけて伸びる東西方向の坪境である。1トレンチの第2面で25溝を検出した時点で、上の面の遺構である事は認識できており、10トレンチで第1-2面での坪境形態が検出できた事は第3節で先述したが、6トレンチ部分では10トレンチと坪境形態が異なっているようなのでここに再述する。1トレンチでは25溝しか検出できず、59畦畔の第2層との切り合いを東側で若干確認できたのみである。6トレンチで上部の攪乱が少なく、ようやくある程度全体像が判明した(図17上段・図版11)。

25・240溝は掘削中に第2面より上の面からの切り込みである事を確認している。その二つの溝の間で、241畦畔盛土が第2面上に乗っているのも確認できた。

241畦畔盛土に覆われる事によって59畦畔の耕土より突出した部分も保護され遺存していた、59畦畔は第2層に伴う畦畔である。従って、この坪境は第2層耕土時から位置を変えず踏襲されてきた事が分かる。

25溝は第2面での検出時で幅60cm~1mほど、おそらく第1面では幅1m以上あったであろう。深さ20cm前後、底部のレベルは若干の凹凸はあるがどちらかに下がる傾向はない。埋土に水成堆積の痕跡は見られず、上下3層に分かれる。下層は砂質土、中層には扁平なブロックが見られ、上層は粘質土で人為的に埋められている。

10トレンチでの埋土とは違い、流水堆積層が遺存せず、叩き締めを行い、最後に粘質土層で埋めているのは、大和川付け替え時点で整地土系第1-1層により整地する際に埋められたからと思われ、10トレンチ部分より幅が大きいのも、底に凹凸が見られるのもそのための変形の可能性がある。

大和川付け替えに伴う旧落堀川の掘削により、調査区付近はそれまでの水利網から切り離されており、そこで水路としての25溝が廃絶するのも妥当と考えられる。

1・6トレンチでの埋土の出土遺物はやや多いほうである。磁器8片、うち肥前碗4、青磁碗2、漳州窯製1。陶器は呉器手碗片1。須恵器13片、うち甕11、壺1。土師器21片、うち羽釜1、小皿1、鉢3。瓦器椀片15。瓦質土器片3。土師質瓦12、うち丸瓦4、平瓦4。須恵質平瓦4。いぶし平瓦23、いぶし丸瓦10。

注目できるのは炉壁らしきものが10片出土している。砂岩の大礫も若干出土し、焼土も見られた。他に軽石1個、二枚貝の殻1枚も出土している。

図18-4は肥前陶器呉器手碗片である。残存率40%、高台部周60%残存。釉色は淡黄色25Y8/3を呈し、胎土は灰白色25Y8/2を呈す。高台端部軸ハギ、他は高台内まで施軸。高台内面を丸く削り出し、器壁が厚い事から呉器手と判断した。17世紀中葉から18世紀のものである。

炉壁片らしきものは包含層では整地土系第1-1層に含まれるようで、それを埋土に含む事も、整地土系第1-1層による整地の際に埋められた事を示す。

240溝は第2面での検出時で25溝と80~140cmの間を空け、南に平行する。幅約70cm。深さ10cm強、底部のレベルはわずかに東に下がる。埋土は現代耕土に似る土の中に整地土系第1-1層の小ブロック土を含む単層である。その事からも本来の切り込み面は現代耕土床面としての第1面であろう。

埋土からも、1トレンチに伸びない事からも常設の溝ではないと思われる。

出土遺物は弥生土器小片5、うち甕2。土師器25片、うち羽釜1。須恵器11片、うち甕5、坏4、壺1。瓦器椀35片。いぶし瓦5片。炉壁2。25溝の遺物組成から陶磁器が抜けたような状況である。実測可能なものはなかった。

241畦畔は25・240溝間を畦畔基底部とする大畦畔である。高さは不明。畦畔盛土は第1-2層に似る。10トレンチ第1-2面の357畦畔と同じ通りにあり、規模も似ていると言える。

240溝が横に沿い、畦畔の幅からも周辺の第1-2面よりかなり突出していたと考えられる事から、この畦畔は現代耕土時点まで存続していた可能性が高い。第1-2層耕土時点から現代耕土まで存続した坪境畦畔と言える。

盛土からの出土遺物は、須恵器は甕2片、坏2片。土師器17片中、甕1片、小皿1片。瓦器椀10片。青磁蓮弁文碗1片。図化できるものはない。

59畦畔は241畦畔盛土下に遺存していた第2層時点での畦畔である。第2面から突出している幅は30~60cm、断面形状から見ると、241畦畔の盛土が盛られた時に若干両側を削平された可能性もある。第2面からの高さは7cm強。断面で確認した部分では基底部からの高さ約18cm、第2層との切り合いは確認でき、基底部幅89cm。その下で第3面が3cmほど高く削り出されている。

畦畔盛土は上下2層に分かれ、上層は第2層に似るがブロック状の構造が認められ、下層は第3層のブロックを含む。それと共に見られる灰色シルトのブロックは、耕作により有機分が増え、酸化状態になる前の第2層の母材のブロックである可能性が高い。

第3面ではコンゴリユートラミナで判然としなが、畦畔の両側でやや下がる部分があるので、第2層耕土時に畦畔両側に溝があった可能性もある。

畦畔盛土からの出土遺物は、土師器17片、うち甕2、小皿1。須恵器甕2、坏2。瓦器椀片10。青磁蓮弁文碗片1。図化できるものなし。第2層以下の包含遺物を反映しているようである。

この部分は大畦畔が位置を変えずに連続と踏襲されていく状況からも坪境にふさわしい耕地区画と言える。南北の区画では南側がやや高い。10トレンチでの成果から、6トレンチ第2面で検出した25溝・

241畦畔がセットになる形は第1-2層から耕土系第1-1層耕土時点までの状況と考えられる。25溝は整地土系第1-1層で整地された時埋められた可能性が高いが、241畦畔は現代耕土成立時点までで継続していたと考えられる。

40溝・45・245段差・46畦畔 1トレンチ西端附近から6トレンチに抜ける南北方向の耕地区画である。1トレンチで40溝とその東側に沿い、東に落ちる45段差を検出し、その間を46畦畔とした。第1-2層耕土時の遺構であり、46畦畔は畦畔基部である。6トレンチではその西側で西に落ちる246段差を検出し、これが45段差と対になるものの可能性がある。1トレンチでは検出できなかったが、ライン上にある48・49筋溝が一つの目安になろう。

40溝は幅30~50cm、深さ5cm前後、底部の傾斜は見られない。南北両端で不明確になるのは検出時に面を下げ過ぎたためか。1トレンチでやや西に蛇行する部分がある。また東側に45段差を越えて突出する部分や44土坑につながる部分があり、段差下に水を落とす水口と思われる。

出土遺物は土師器4片、うち小皿1、甕1。須恵器甕片1。瓦器椀片1。図化できるものはない。

46畦畔は幅20~40cmほど、45段差は高低差5cm弱。245段差は高低差約3cm、45段差との間は1m前後空く事になるが、そのわりには不明確な段差で、若干の耕作深度の差の可能性も否定できず、幅1m前後の道や人畦畔を想定するには躊躇がある。

この耕地区画の東西では西がやや高い。

390畦畔 10トレンチの東西方向坪境で、第1-2面の349畦畔を北側の第1-2面と同じ高さまで削平したところ、その北側裾部付近で頭部を確認された畦畔である。第1-2層耕土時点の畦畔で、残存する高さは5cm程度。幅45~70cm。1ヶ所60cmほど途切れる部分がある。

第1-2層耕土時点の畦畔なので、南側には357畦畔が既に存在していたはずである。しかし、両畦畔の間で、390畦畔から25溝による攪乱までの90~60cm間は平坦であり、溝が存在していた痕跡はなく、近接する畦畔の間としてはおかしな状況である(図版11)。

下面でも対応する畦畔基部を検出できず、直下第3面に筋溝が見られた事と、水口にしては幅のありすぎる途切れた部分を考え合わせると、畝の可能性もあるかもしれない。残りの良い部分で、上面がやや凹んでいた形態を確認したがそれも畝の形に符合する。

391溝・392・393畦畔 10トレンチの第1-2面で検出した耕土系第1-1層併存の畦畔である368畦畔をやや削平した時点で検出した。第1-2層耕土時点での畦畔と溝である。

中央の391溝は幅28~49cm、深さ5cm前後で、底面のレベルは若干東に下がる。

両側の畦畔は391溝の下で盛土はつながり、検出された高さもほぼ同じであり、本来一体のものである。北の392畦畔が幅約60cm、南の393畦畔が幅約50cm、北側の平坦面からは10cm前後、南の平坦面からは6cm前後の高さを持つ。盛土は第1-2層に比べて濃く鉄分に集まる以外はやや砂質な程度である。二つの畦畔を合わせた幅は1.2~1.4mほど。

同じ通りの1・2・4トレンチでは一切検出されなかったが、攪乱の多い部分で鉄分が溶脱していたため認識できなかった可能性がある。

南の59・390畦畔の坪境より正確に東西方向を向き、59畦畔から北に11m前後の通りに位置する。平坦面はこの区画の南北では北が5cmほど低い。坪境に次ぐような主要な耕地区画であろう。

391溝はその規模から見ても水回しの水路とは思えず、用途が不明だが、上面に368畦畔を作る際の作業に関係するものかもしれない。

391溝内から土師器2片、瓦器椀2片、瓦質羽釜1片、砂岩礫1個が出土している。図化できるものはない。

392畦畔盛土からの出土遺物は、須恵器3片中、壺1片、坏1片。土師器14片中、羽釜1片。瓦器1片、炉壁1片、いぶし丸瓦1片が出土している。

543畦畔 12トレンチで、第1-2面の520畦畔直下で確認された。520畦畔は耕土系第1-1層耕土時点の畦畔で、その盛土を除去した第1-2面では、その畦畔基部も第1-2層耕土時の畦畔頭部も検出できなかった。それよりやや下げると、鉄分には濃く染まるが、質的には第2層と変らない、543畦畔頭部が検出された。543畦畔は第2層耕土時点での畦畔である。

543畦畔の頭部が突出して残存していた事と、520・543畦畔が平面的な位置を変えずに重複している事から、第1-2層時点の畦畔も、この位置に存在はしていたが検出できなかった可能性が高い。同じ通りの耕地区画と考えられる13溝が2トレンチで検出されているのもそれを裏づける。

この面での幅は38~55cm、高さ10cm弱。南の392畦畔からほぼ11m北側の通りに位置する。

475段差 11トレンチの南西側で検出された、北から南へわずか3cmほど落ちる段差である。北側に弧を描く形で検出したが、北側に影らむ部分は明確に見えず、検出に手取取った所でもあるので、両端の南寄りのラインで直線的にあったのが本来の形ではないかと思われる。その位置なら593畦畔から北にほぼ11mの通りに位置する。第1-2層床面遺構である。

465段差 11トレンチ北東側で、既に上面が検出されていた第3面183畦畔の西隣に直交する、北に落ちる段差である。トレンチ端で全体形が判然としなが、肩部が直線的に東西方向に走り、北側下段も平坦であったので、耕地区画の段差と判断した。高低差は5cmほど。調査区内の第2面でこの段差の北側の平坦面が一番低い面となる。第1-2層床面遺構である。

(2) 土坑

154土坑 (図22・図版11) 3トレンチ北東側、155畦畔北側に位置する隅丸長方形の平面形を持った土坑である。長軸148cm、幅約60cm、深さ19cm。壁は立ち、底部は比較的平坦である。埋土は単層でブロック土を含む。現代耕土らしき土が含まれるので、本来は第1面の遺構だった可能性が高い。土坑自体の性格は不明。

155畦畔とは北に1mの距離で長軸方向が平行するので、第1面の遺構とすれば、この土坑から、155畦畔の耕地区画が第1面にも踏襲されていた可能性が高いと推測できる。

出土遺物は黒色土器椀A類小片2、唐津らしき陶器底部片1。

157土坑 (図22) 3トレンチの中央北寄り、159溝と160溝にはさまれた位置にある。平面形は長軸1

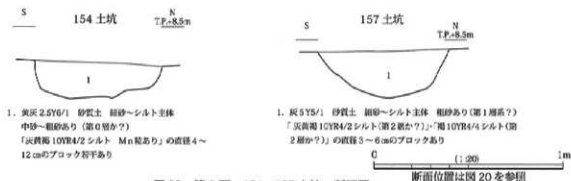


図22 第2面 154・157土坑 断面図

m、幅約70cmの隅丸長方形。深さ24cm。壁は傾斜し、そのまま丸みのある底部に続く。埋土は単層で、161溝埋土とはほぼ同じ質の埋土に第2層系らしきブロック土が混じる。第1-2層耕土時の床面遺構である。

この土坑は159・160溝の間ぎりぎりに取まり、それらと長軸方向を直交させる事から、2本の溝の位置を確認して掘られた可能性が高い。また、161溝との埋土の共通性から、ほぼ同時に埋められた可能性が考えられる。そこから考えれば、この土坑が掘られてから埋められるまでの間は、上記3本の溝が同時併存していたと推測できる。おそらくはそれらの溝の項で先述した耕地区画改変の際に掘られて埋められた土坑なのであろう。しかし具体的な性格は不明である。

出土遺物はサヌカイトチップ1点、いぶし丸瓦片1。

図24-5はいぶし丸瓦片である。残存率10%以下。胎土は器表灰色N4/0、断面灰色10Y6/1を呈し、0.5mm以下の長石・石英・黒色粒を含む。

内面には布目が残るがその端部と側端面はヘラ切り。上面は横方向のハケナデ。近世以降のものか。
32・47・56土坑 1トレンチの第2面で検出したが、埋土に明確に現代耕土を含み、第1面の遺構であるのが確実なものである。

32土坑は1トレンチ中央南東寄りに位置し、平面形は長径約55cm、短径約40cmの楕円形。第2面からの深さ約5cm。出土遺物なし。

47土坑は40溝の西側に位置し、平面形は約80cm四方の隅丸正方形だが各辺は正方位を指向しない。第2面からの深さ約10cmだが、底部に径30cm深さ5cmほどの柱の沈み込みのような小ピットがある。埋土に柱痕は認められない。機種不明の土師器小片2片出土。図化不能。

56土坑は1トレンチ中央付近で、25溝の1.2m南にある。平面形は1.4×1.2mのやや不整な隅丸方形を呈する。第2面からの深さ約15cm。正方位を指向するとは言い難いが、大まかには25溝と方向を合わせているとも言える。土師器小片6、須恵器甕片1、瓦器碗片4、瓦質土器らしきもの1片出土。図化できないものはない。

これらの土坑の性格は不明だが、47・56土坑は耕地区画沿いのなんらかの施設の痕跡の可能性はある。

(3) 井戸

153井戸(図23・図版11) 3トレンチの北東端に位置する。この部分では浅い攪乱が存在していた事と第2面が高い事もあって、表土除去時点で井戸の輪郭が見えていたが、部分的に残った第1-2層を切っていたのを確認しているので、本来第1-2面からそれより上の面の遺構である。

平面形は径201~214cmのやや不整な円形のようなのだが、やや角のある部分もあり、八角形にも見える。

工用仮設道路に近い事もあり調査深度は115cmに留まり、底部は確認できなかった。確認できた埋土は2層あり、どちらも掘り込まれた部分にある各層のブロックが見られるが、粗砂など、若干周囲に見られないブロックも含まれる。井戸枠が抜き取られた痕や裏込め土などは見られず、埋土を一旦掘り上げてから埋め戻したようである。

出土遺物は、土師器甕口縁部片1、黒色土器碗A類片1、瓦器碗小片1、瓦質土器片1、須恵質平瓦片2。

図18-1は須恵質平瓦片である。残存率は10%以下。胎土は灰白色5Y8/1を呈し、2~1mmの石英・1mm前後の長石若干あり、1mm弱の黒色砂粒(泥岩?)をわずかに含む。

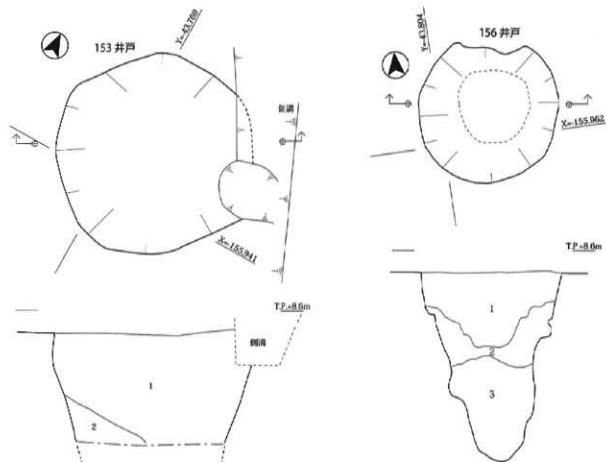
上面には細かい布目、下面は格子目タタキ。厚さから見て平安時代頃のものであろう。

図18-2は土師器壺片である。残存率10%以下、口縁部周10%ほど残存、歪みがなさそうなのでかろうじて復原径が出せた。

胎土は明褐色7.5YR5/6を呈し、1mm前後の石英をわずか、0.5mm以下の石英・長石を若干含む精良な胎土。

器表が摩滅しているが内外面ともヨコナデ、頸部にはユビナデが入る。体部がハケ目のない球形もしくは下膨れの南河内型壺と思われる。口縁部が短く直立する形態から10世紀頃のものであろう。

156井戸(図23) 3トレンチの西隅で183畦畔を切っている。表土除去時点では明確には見えず、埋土内のブロックに第1-2層に似たものはあるが、整地土系第1-1層・現代耕土に似たものは認められない事などから第1-2層耕土時の第2面遺構として良いものと考ええる。



1. 「明黄褐 10YR6/6 ～にぶい黄橙 10YR6/4 シルト～粘土(第6層)」・
「褐灰 10YR4/1 シルト わずかに粗砂あり(第2層)」・
「黄灰 2.5Y4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～中砂あり(第1層)」・
「黄灰 2.5Y5/1 砂質土 細砂～シルト主体 粗砂多し(第0層?)」・
「灰 5Y5/1 粗砂～中砂」等の直径3～15cmのブロック土
2. 1の第6層・「灰 N5/0 シルト(第5層ではない?)」の扁平なブロック(直径10～15cm)と若干の粗砂あり

1. 褐灰 10YR5/1 粘質土 シルト～細砂主体
粗砂～中砂若干あり 管状Feあり(貫は第1-2層に似る)
「明黄褐 2.5Y6/6 粘土～シルト」の扁平なブロック(厚3～1cm・巾2～7cm)わずかにあり(第6層か)
2. 「灰褐 7.5YR5/2 シルト(第2層か)」のブロック主体
「黒 2.5Y2/1 シルト(第5層か)」のブロックあり
「明黄褐 2.5Y6/6 粘土～シルト(第6層)」のブロック
わずかにあり ブロックは扁平(厚2～8cm・巾12～23cm)
3. 灰 5Y4/1 シルト～細砂内に第5・第6層のブロック
(貫は上記に同じ)若干あり(直径2～5cm)

0 1:40 1m
位置は図20を参照

図23 第2面 153・156井戸 平・断面図

平面形は148～156cmの円形だが、北側で不整形にへこむ部分がある。断面形は検出面から50～70cmほどの部分と130～150cmほどの部分で段を成し径を減じていく。底部は丸く、深き202cm。

埋土は上下で3層に分かれる。上層には第1～2層に似たものと第6層のブロック、中層には第2・5・6層のブロック、以上2層のブロックは扁平となり、叩き締められた埋土と分かる。下層には灰色シルト～細砂内に第5・6層のブロック、ブロックは扁平でなく、下層下半部で輪郭が不明確になっていく事から、叩き締められず、かつ埋め戻し時には下層下半部附近まで湧水があった可能性を推測できる。断面形状からは下に行くに従い、径の異なった井戸枠が使用されていたようにも思えるが、裏込め土が一切残っていないため、埋め戻し時の井戸枠除去、液えによる変形の可能性もある。底部付近は第6層の下で砂層に達していた。それが元の滞水層であろう。現在湧水は見られなかった。

出土遺物は、土師器13片、うち羽釜1、甕3、把手1、高坏1。須恵器片17、うち壺1、高坏脚部2、甕3、坏10。瓦器碗片2。瓦質土器裏片3。凝灰岩1、木片1。図化できるものなし。

その他の遺構からの出土遺物(図24) その他の遺構からも若干、図化可能な遺物が出土しているのでここで取り上げる。

図24-1は3トレンチ163箇所出土の土師器小皿片である。残存率は口縁周も含め20%。器表にはぶい橙色7.5YR7/4、破断面にはぶい橙色7.5YR6/4を呈する。胎土には1mm弱の長石・赤色粒あり。磨減激しいが外面は体部ヨコナデ、底部方向不明のナデ、内面はナデか。底部が安定し、法量的にも極小のものではないので、12世紀前後のものか。

図24-2は2トレンチ2土坑出土の須恵器坏身片である。高台部周15%残存。外面明青灰色5PB7/1、内面・破断面灰白色N7/0を呈し、胎土に1mm前後の長石を含む。調整は内外面とも回転ナデだが、高台の外側の接合痕が段を成して残る。高台端部の内側が上がる形は平城宮Ⅲ期以降には減少し、高台径10cm程度は飛鳥Ⅴ期の杯BⅢか平城宮Ⅱ期ぐらいの杯BVと思われる。

図24-4は12トレンチ532ピット出土の青磁碗片である。高台部周30%残存。釉の発色はオリーブ灰色10Y6/2、露胎部分は灰黄色2.5Y7/2。削り出し高台で高台端部から内面は露胎。時期は特定できない。

3. 第1層の包含遺物

(1) 包含遺物の構成(表2)

1～9トレンチの現代盛土直下の現代耕土層は場所によっては盛土施工時の重機などにより第1層と攪乱され、包含遺物を分別できない事もあった。その場合、遺物は「第0・1層」として取上げている。攪乱がそれほど激しくなく、機械掘削で現代耕土まで除去できた所では、それでも第1層内まで達する

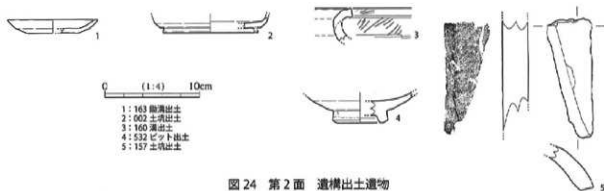


図24 第2面 遺構出土遺物

大系	種別	破片数		種類		型式・部位		種別							
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%						
その他	瓦	281	54.03			いぶし	192	54.10	半瓦	93	61.20				
										丸瓦	16	10.50			
												軒丸瓦	1	0.70	
										土師瓦	22	7.43	半瓦	18	81.80
												丸瓦	1	4.50	
										須恵瓦	52	18.50	半瓦	45	82.70
												丸瓦	3	5.80	
										電突窯	13	4.60			
										石窯系製品	1	18.70	ウツカイト	1	100.00
								割片	5	83.50			ウツカイト	2	60.00
	石種	8	1.20												
	土人形	1	0.20												
	貝殻	8	1.50							二枚貝	1	12.50			
	金属製品	5	1.00	釘	3	60.00									
	宮縄	1	0.20												
	炭	7	1.30												
	骨	1	0.20												
	種	16	3.10							不明動物種	1	6.30			
							焼瓦片地	3	18.80						
							石瓦	1	6.30						
							砂岩	2	12.50	骨器作り	1	50.00			
										燧石	2	100.00			
	伊型	189	36.30												
石製品	1	0.20	鏡	1	100.00				鉄線刷製	1	100.00				
木製品	2	0.40							竹	1	50.00				
									木の棒	1	50.00				
ガラス	1	0.20	おぼんき	1	100.00										
産製品	1	0.20													

攪乱が多かったため、現代粘土が残存しないように強めに機械掘削を行い、部分的攪乱を掘削した後「第1層」出土遺物を取上げている。それでもわずかながら、上層からの混入が見られたようである。

表2でその内容を見ると、陶磁器類に関しては10～12トレンチで分別できた粘土系第1～1層と第1～2層を合わせたような状況で特に変化はない。

ただ、須恵器を見ると、総量が少ないが、第2層に少ない奈良時代の瓦の比率が高く、その時期の遺物の入った土が新たに客土されている可能性を感じさせる。

瓦質土器・土師器の構成は煮沸器と供膳器の割合のバランスが良く、集落的な構成と言え、近辺に中世集落が存在する事を暗示しているようである。

また、炉壁らしきものの点数が多く、被熱痕跡のある礫と合わせて注目できる。

(2) 主な出土遺物 (図25)

ここでは実測可能であった遺物を個々に見ていく。

図25-1は土師器小皿片。3トレンチ出土。残存率85%、底部周90%残存。胎土は器表浅黄色25Y8/3～8/4、断面浅黄色25Y8/3を呈し、2～1mmの石英あり、1mm弱のチャートわずかにあり。

全体にやや摩滅するが、外面底部は無調整もしくは粗いナデか。口縁部はヨコナデ。内面は口縁部ヨコナデ、底部は一定方向ナデか。時期を限定できるものではなく、中世頃のものとしか言えない。

図25-2は土師器碗片。6トレンチ出土。高台部周50%残存。内外面とも明黄褐色～灰白色25Y6/7～8/1、破断面は浅黄色25Y8/3を呈す。胎土に1mm以下の長石・石英わずかにあり。内面は磨滅し、調整

不明。外面は高台貼り付けのナダが残る。瓦器出現と共に消滅する粗製土師器碗と思われる。9～11世紀前半にあるものである。

図25-3は弥生土器甕片の可能性もあるが、やや硬質な焼成と稜の鋭さから近世土師器の鉢片と思われる。2トレンチ出土。残存率10%ほど、口縁部周10%残存。胎土は外面明黄褐色10YR6/6、内部は黒斑でオリーブ黒色7.5Y3/2、断面褐色7.5YR4/6を呈し、1mm前後の石英あり、1mm強の赤色粒わずかにあり、0.5mm以下は石英・長石・赤色粒あり。

器表摩滅するが最終調整はヨコナデか。外反する口縁部の上面には平坦面が2面あり、ナデ前にヘラケズリの可能性あり。

図25-4は土師器羽釜片。3トレンチ出土。残存率10%以下、口縁部周10%残存。胎土はにぶい黄橙色10YR6/4を呈し、3～1mmの石英・長石・チャートあり。

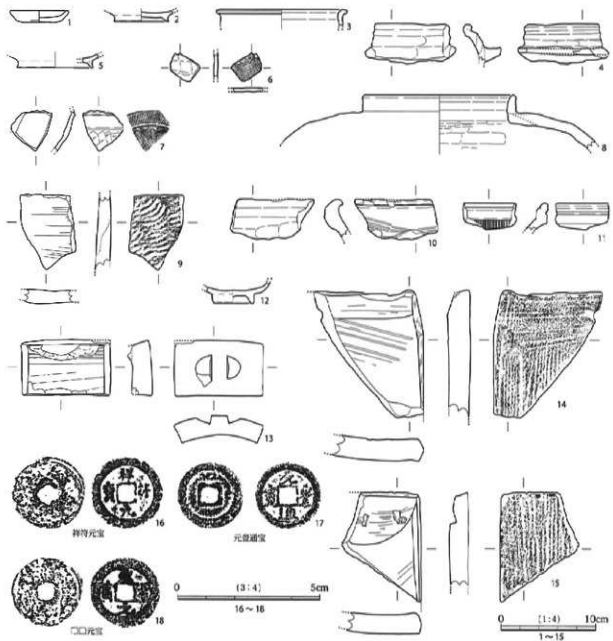


図25 第1層 出土遺物

鋸部と口縁部の接合部分に断続的なヨコユビナデあり、内弯する口縁に段はなく、口縁端部は外面に折り返す。最終調整は全体にヨコナデ。鋸部の上下面に煤付着、薄く口縁外面まで及ぶ。

胎土にチャートを含む事から和泉地域産と思われるが、それならば和泉B型の「く」の字状口縁部が退化した14世紀頃のものであろう。

図25-5は黒色土器B類碗片である。2トレンチ出土。残存率10%ほど、高台部局25%残存。胎土は、器表は灰色N4/0、断面にぶい黄褐色10YR6/4を呈し、粗い砂粒はなく、0.5mm以下の長石・石英あり。調整はヨコナデ。時期は10～11世紀。

図25-6は韓式系須恵器片である。2トレンチ出土。器種不明。器表・破断面とも灰色N6/0を呈す。胎土に粗砂は含まず、0.5mm以下の石英・長石・黒色粒若干あり。外面は斜格子タタキ、3単位確認できるが、切り合い部分はナデで不明瞭となる。内面はタテユビナデ後ヨコナデ。内面調整から見れば壺の肩部付近の破片のように思えるが、破片に弯曲がなく確定できない。5世紀頃のものであろう。

図25-7は須恵器把手付碗片である。1トレンチ出土。残存率10%弱。胎土は外面青灰色5PB6/1、内面灰白色N7/0、断面灰色N6/0を呈し、1mm前後の黒色粒若干あり、0.5mm以下は長石・石英あり。

外面は上半回転ナデ、下半はそれを切る左下がりのナメヘラケズリ上下を突帯に挟まれた液状文は非常に目が細かい。内面は降灰痕で荒れ調整不明。5世紀前半TK73～TK208のものである。

図25-8は須恵器短頸壺片である。2トレンチ出土。残存率10%以下、頸部周15%ほど残存。胎土は外面灰白色5Y7/1、内面灰黄褐色10YR4/2、断面灰白色5Y7/1を呈し、編状粘土でガラス質の光沢がある。

外面は自然軸と降灰痕が激しいが、胴部ヨコナデ、口縁部回転ナデか。内面は胴部ユビナサエ・ユビナデ後断続的なヨコナデ。口縁部は回転ナデ。あまり時期を限定できる要素はなく、飛鳥時代から奈良時代のものであろう。

図25-9は須恵質薄の破片か。3トレンチ出土。破片ではわずかに表裏が凹面と凸面をなす。胎土は灰白色2.5Y8/1を呈し、1mm弱の長石・石英若干あり。

凹面は摩擦するが粗いハケ目残る。凸面は同心円文タタキ。時期は不明である。

図25-10は瓦質土器片である。3トレンチ出土。残存率は10%以下。胎土は器表灰色N4/0、断面灰白色7.5Y8/1を呈し、4～1mmの長石・石英を含む。

外面は肩部にタタキ、口縁部はヨコナデ。内面は肩部断続的なヨコユビナデ、口縁部はヨコナデ3条だが、中央の面は平埴でナデ前にヨコケズリか。口縁端部は摩擦する。15世紀頃のものか。

図25-11は陶器埴摺鉢片である。6トレンチ出土。残存率10%以下。胎土は赤褐色10R4/4を呈し、胎土に0.5mm前後の石英・長石をわずかに含む。

口縁部は回転ナデ、外面体部は回転ケズリか。内面窪目が入る部分は口縁部より一段突出している。埴摺鉢のⅡ型式で18世紀後半から19世紀のものである。

図25-12は9トレンチ第1層相当段差下層耕土出土で「第2節4、」で記述済み。

図25-13は瓦質規炉の火窓である。8トレンチ出土。外面暗灰色N3/0、内面オリーブ黒色5Y3/1、破断面黄灰色2.5Y5/1を呈する。胎土には1mm前後の石英あり、微小な黒雲母が表面に目立つのはキラ粉か。外面と端面はミガキ、上端面はかなり内傾する。内面は上辺に沿って4条の摺り目のような沈線を入れた後、粘土塊を指でナデ付ける。粘土塊は一部欠損。その下はヨコナデ。外面のつまみの両側の刻みは、先端半円形の板状工具を垂直に刺したところに、半筒形の工具を斜めに刺して切り取っている。形態的

には現代の埴戸にも見られる形で、近代に下る可能性もある。

図25-14は須恵質平瓦片である。3トレンチ出土。胎土は灰白色5Y7/1を呈し、長石・石英若干あり。

各端面と上面後方はへら切り。上面はわずかに細かい布目残るが、その上からハケ。図右よりに長石・石英・チャートの離れ砂残る。下面是粗い縄目タタキ、後方はその後横方向にハケ。須恵質でこの厚さだと平安時代頃か。

図25-15はいぶし平瓦片である。3トレンチ出土。胎土は器表灰色N5/0、断面灰白色5Y7/1を呈し、1mm前後の石英・長石若干あり。器表には3～1mmの石英・長石・チャート付着。

各端面と上面後方はへら切り。上面は布目後ナメハケ。上面はへら切りの面に、先の尖った棒状工具を斜めに刺突した痕跡が2ヶ所ある。下面是縄目タタキ後軽くナメハケ。いぶし瓦では古いものか。

図25-16～18は3トレンチで三枚が錆びで付着して出土した銅銭である。16は「祥符元宝」、「祥符」は北宋の「大中祥符」年間（1008～1016年）。17は「元豊通宝」、「元豊」は北宋年号で西暦1078～1085年。18は錆びが進み2字不明「元宝」のみ読める。

これらの遺物はおおよそ調査区全体の包含層遺物の様相を反映していると言える。ただし、図25-11・12は整地土系第1～1層が大和川付け替えに伴う整地層と考えられるのに、それよりも新しく、11は混入と考えたほうが良いだろう。

4. 第2層包含遺物

(1) 包含遺物の構成(表5)

磁器の破片が含まれないのは若干意外である。陶器は肥前としたものは不明としたほうが良いようなものである。

瓦器・瓦質土器と土師器の中の皿類など多くのものが中世遺物の主体を成すが、それらは黒色土器碗B類から瓦質羽釜までをもって、10世紀中葉から14世紀の時期としてまとまる。

土師器・須恵器で飛鳥時代のものは若干あるが、奈良時代のものはかなり少ない。それも平城宮Ⅰ～Ⅱ期のものがほとんどである。8世紀後半から9世紀代に遺物的に空白期間があると言えよう。須恵器で見ればむしろ古墳時代のものが圧倒的に多く、韓式系や初期須恵器まで含まれる。一番多いのは古墳時代後期～飛鳥時代初頭頃のもので、特に大型の甕の破片が多いのが注目できる。いずれにしてもこの古墳時代遺物は、ほぼ直下層の第3層の包含遺物と同時期で、近辺の遺構集積の包含層から客土された「難波大道」盛土に由来するものが多いと考えられる。実際、図27-10など、幾つかの破片が大道盛土出土のものと同接している。

瓦は平瓦ばかりで、近辺に瓦葺建物の存在は考えにくく、耕地内でなんらかの用途に転用されたような状況と言える。石器類の包含が増加するが、石鏃がほとんどなのは特徴的である。また、わずかながら炉壁らしき破片もすでにこの第2層に包含されているのが注目できる。

(2) 主な出土遺物(図26・27)

ここでは実測できた遺物を個々に見ていく。

図26-1は土師器碗片である。3トレンチ出土。高台周25%残存。外面明褐色7.5YR5/6、内面にぶい橙～褐色7.5YR6/4～6/6、破断面褐色7.5YR6/1を呈す。胎土に3～4mmの石英あり。内外面とも磨滅で不明瞭だがナメカ。南河内型粗製土師器碗と思われる。9世紀～11世紀前半のもの。

表5 第2層 遺物破片収集計表

大別	種別	種別		種類		型式・部位			種別							
		破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%							
土器・陶磁器	3282	弥生	19	0.60	高坪	3	15.00									
			1	5.00					口縁	1	100.00					
	陶器	15	0.50										薄板	1	6.70	
														丹家	1	6.70
														厚板	1	6.70
				鉢	1	6.70	片口	1	100.00	厨戸蓋遺	1	100.00				
	瓦器	172	5.20	破	2	12.50										
				甕	73	42.40	高台	3	11.00							
	陶式系土器	8	0.20													
				皿	1	0.60										
	須恵器	1921	66.50										漆塗器	1	0.05	
				皿	1	0.10										
				はちの	19	1.00										
				鉢	3	0.50	高台付	1	11.10							
							片口	1	11.10							
				器台	8	0.40										
				二枚鉢	8	0.40										
				小型器台	1	0.10										
				高坪	36	1.90	脚部	2	5.60							
							把手付蓋蓋	1	2.80							
				柳屋高坪	5	0.30	口縁	4	30.90							
				甕	124	6.50							初期須恵	1	0.80	
							底部	1	0.80							
							肩部	1	0.80							
							横蓋	2	1.60							
							蓋取蓋	1	0.80							
							短頸蓋	1	0.80							
							口縁	1	0.80							
				甕	379	20.30	口縁	26	3.00							
							肩部	124	15.30							
				井	808	43.10							奈良時代	6	0.70	
												古墳時代	28	47.50		
						蓋	50	7.10				飛鳥時代	4	6.80		
						身	102	12.30				古墳時代	65	63.70		
						無蓋身	1	0.10				奈良時代	2	2.00		
瓦質土器	12	0.40	土師	1	7.70											
			羽蓋	1	7.70											
土師器	1110	33.80	輪	11	1.00							奈良土	4	26.40		
			小型輪	1	0.10									古墳時代	1	100.00
			坪	2	0.20	身	2	100.00								
			蓋	23	2.10											
			短頸輪	2	0.20											
			短頸蓋	41	3.70											
			鉢	1	0.10	脚部	1	100.00								
			高坪	29	2.30									飛鳥以降	3	12.00
									脚部	11	44.00					
						脚部～腹部	2	8.00								
			把手	10	0.90							飛鳥時代	4	40.00		

～10YR6/6、内面暗灰色N3/0、破断面は灰白色10YR8/1を呈す。胎土に粗砂はなく、精良な胎土。調整は磨滅で不明瞭だが内外面ともナデ。高台が断面三角形で、底部は削りと平坦、器壁も薄いところから見ると、新A類より古い、体部環形のものか。10世紀前葉か。

図26-8は黒色土器椀B類片である。3トレンチ出土。高台周20%残存。内外面黒褐色2.5Y3/1～3/2、破断面にふい黄褐色10YR5/4を呈する。胎土に粗砂粒は見られない。調整は内外面ともナデか、高台周辺はヨコナデ。時期はあまり限定できず、10世紀中頃から11世紀前半か。

図26-9も黒色土器椀B類片である。3トレンチ出土。高台周25%残存。内外面黒褐色2.5Y3/1、破断面暗灰黄色2.5Y5/2を呈す。胎土に1mm前後の石英・長石あり。調整は高台周辺のヨコナデのみ残る。黒色土器椀B類の高台が高く「ハ」の字形に開き、大中小の法量型式が定型化する段階のものと考えられ、10世紀末葉～11世紀初頭か。

図26-10は黒色土器小皿B類である。10トレンチ出土。残存率は90%。外面は黒色N2/0、内面は暗灰色N3/0、破断面は黄褐色10YR5/6を呈す。胎土は砂粒見えず精良。内面は方向不明だがナデ、外面は口縁部ヨコナデ、底部側面は1列にユビオサエ、底部は一定方向ナデ。全体に歪が見られ、器壁は厚い。10世紀後葉～11世紀前葉のものか。

図26-11は緑釉陶器坏片である。2トレンチ出土。高台周20%残存。釉色は灰白～オリーブ灰色10Y7/2～6/2、露胎淡黄色2.5Y8/3、破断面黄灰色2.5Y6/1を呈す。胎土に粗砂粒なし。高台接合部両側に強いユビナデ、それより内側の外面底部は無調整か。他は回転ナデ。軸は高台の内側のユビナデ部分から外面～内面にあり、高台端部では棒状工具による凹面にわずかに残る。貼り付けの輪高台の形態から近江産の可能性が考えられる。時間的には10世紀頃か。

図26-12は瓦器椀片である。3トレンチ出土。高台周25%残存。磨滅するが内外面灰色N5/0、破断面灰白色5Y8/1を呈する。胎土に粗砂粒なし。調整は磨滅するが高台周辺のヨコナデとその上のユビオサエは残る。底部が高台端部近くまで下がるが、高台径がまだ大きいので12世紀前半頃のものか。

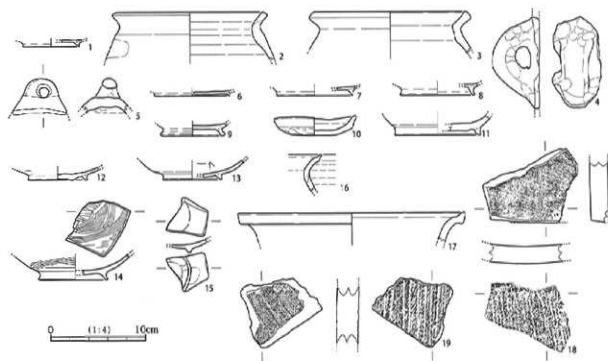


図26 第2層 出土遺物 その1

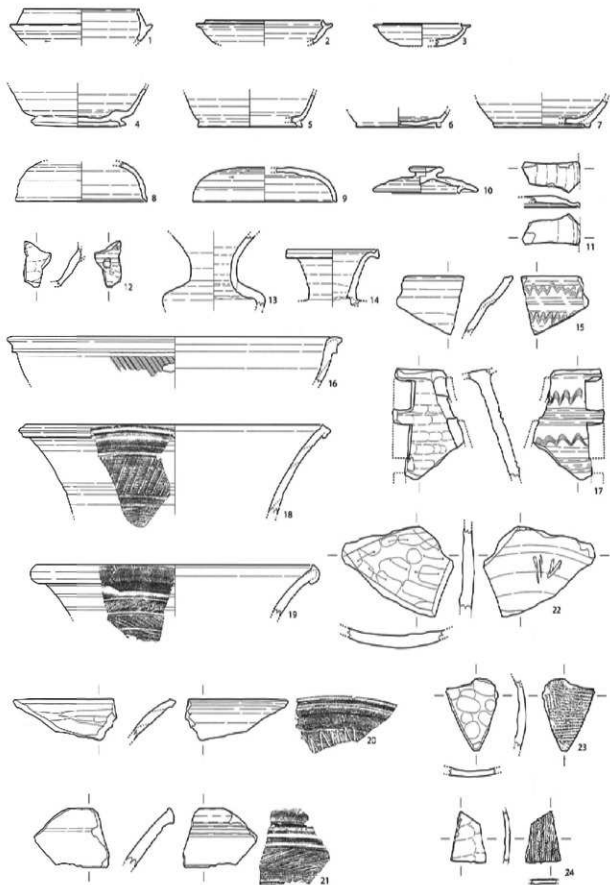


図 27 第 2 層 出土遺物 その 2

0 (1:4) 10cm

図26-13も瓦器碗片である。12トレンチ出土。高台周20%残存。内外面暗灰色N3/0、破断面黄褐色2.5Y5/3を呈す。胎土に1mm弱の黒色砂粒あり。内面はミガキがわずかに残り、外面は高台周辺のヨコナデが残る。体部外面は調整不明だが平滑。ミガキの単位が細い事と、高台の径・断面形から見て、12世紀前半頃のものか。

図26-14も瓦器碗片である。10トレンチ出土。高台周30%残存。内外面・破断面とも灰～灰白色N6/0～7/0を呈す。胎土に1～3mmの長石、1mm弱の黒色砂粒あり。内面は密にミガキ、見込みは直線的。外面は高台周辺ヨコナデ後、体部密にミガキ、底部はナデ。ミガキの密度や高台の形を見ても11世紀後半～12世紀初頭のもの。

図26-15も瓦器碗片である。3トレンチ出土。高台周20%残存。外面灰色N5/0、内面暗灰色N3/0、破断面灰白色5Y8/1を呈す。胎土に1mm弱の黒色粒わずかにあり。内面は重ね焼きの高台圧痕のみ残る。外面はユビオサエ・ユビナデ。12世紀後半～13世紀のものか。

図26-16は常滑焼きか、器種もよく分からない。1トレンチ出土。残存率10%以下。外面にぶい黄褐色10YR5/4、内面自然釉と降灰痕で灰オリープ色5Y5/2、破断面灰白色5Y7/1を呈す。胎土に1mm前後の長石あり。内外面とも回転ナデ。

図26-17は丹波焼きの鉢片である。4トレンチ出土。口縁部周10%残存。外面にぶい褐色7.5YR5/4、内面灰黄色2.5Y6/2、破断面灰白色2.5Y8/1～7/1を呈す。胎土には1mm前後の長石あり。内外面とも回転ナデで、内面には降灰痕あり。中世のものである。

図26-18は土師質平瓦片である。1トレンチ出土。残存率10%以下。上面と破断面にはぶい橙色7.5YR7/4～7/3、下面は灰白色2.5Y7/1を呈す。胎土に3～1mmの石英、1mm前後の長石あり。上面布目痕、下面縄目痕。平安～鎌倉時代頃のものか。

図26-19は須恵質平瓦片である。11トレンチ出土。残存率10%以下。上下面・破断面とも灰白色N7/1を呈す。胎土に1～4mmの長石、1mm前後の石英あり、4～5mmのチャートわずかにあり。上面布目痕、下面縄目痕。平安時代頃のものか。

図27は第2層出土須恵器のうち、実測可能だったものである。

図27-1は坏身片である。2トレンチ出土。残存率15%、受け部周30%残存。内外面・破断面とも灰色N6/0～5/0を呈す。胎土には2～1mmの長石多く、1mm前後の石英若干あり。調整は内面から外面受け部下まで回転ナデ、外面それ以下は回転ケズリ。立ち上がり部端部外面のナデが強めなと、受け部下端の棒状工具による凹線状のナデが目立つ。受け部径が15.0cmに達し、Ⅱ-1～2、MT15を中心にTK10にもわずかに残るもので6世紀前葉～中葉。やや特異な調整や胎土・焼成から陶器産ではないと思われる。

図27-2も坏身片である。3トレンチ出土。残存率10%以下、受け部周15%残存。内外面は灰白色N7/0、破断面灰色N6/0を呈す。胎土に1～2mmの石英・長石わずかにあり、微小な黒色粒あり。残存部分の調整は全て回転ナデである。陶器編年Ⅱ-5段階のもので立ち上がり部がかなり低いタイプで、河内地域では飛鳥Ⅰ期の後期まで残るが、受け部径が14.4cmなので飛鳥Ⅱ期までは下らない。6世紀末葉～7世紀前葉か。

図27-3も坏身片である。11トレンチ出土。残存率10%以下、受け部周も10%以下しか残存しない。内外面・破断面とも灰色N6/0～5/0を呈す。胎土に1mm弱の長石あり。残存率が低いため復元径にやや不安があるが、触ってみても受け部径10cm前後の極小化した杯Hとは言える。飛鳥Ⅱ～Ⅲ期、7世紀中

業～後業に限定できる。

図27-4も坏身片。2トレンチ出土、残存率50%、高台周は100%残存する。外面は明青灰色5PB7/1、内面・破断面は灰色N6/0を呈す。胎土には6mmの長石1個あるが、それ以外粗砂粒なし。微細な長石・黒色粒多し。内面は体部回転ナデ後、底部直線ナデ。外面は高台接合部から体部にかけては回転ナデ、底部は回転ヘラ切りを残す。ここまで高く、「ハ」の字に踏ん張り、端面外側が上がる高台は飛鳥Ⅲ期から平城宮Ⅱ期までに限定できる。7世紀後業から8世紀前業か。その中でも高台径10cm台は飛鳥時代のものである可能性が高い。

図27-5も坏身片である。3トレンチ出土。高台周20%残存。外面灰白～灰色N7/0～6/0、内面灰白色N8/0～7/0、破断面灰色N6/0を呈す。胎土に1mm前後の長石わずかにあり。残存部分は全て回転ナデ。時期はあまり限定できず、奈良時代頃としか言えない。

図27-6も坏身片。3トレンチ出土。高台周30%残存。外面は青灰色5PB5/1、内面・破断面は灰色N6/0を呈す。胎土に1～2mmの石英わずかにあり。外面底部の高台接合部より内側に回転ヘラ切りを残す以外は回転ナデ。杯BⅣ・Vが法量分化している時期の杯BⅣとすれば平城宮Ⅰ～Ⅲ期、8世紀前半頃のものか。

図27-7も坏身片である。3トレンチ出土。高台周20%残存。内外面・破断面とも灰白色N8/0～7/0を呈す。胎土に粗砂粒はなく、微小な長石・黒色粒あり。内面体部は回転ナデ、底部は回転ナデ後に放射状に直線ナデを重ねる。外面は体部から高台周辺まで回転ナデ、底部はヘラ切り後緩くナデ。円盤状の底部側面に体部の粘土を貼り付ける特異な接合が見られる。それと器壁の厚さ・胎土・内面見込み調整から見ると陶器産ではない可能性高い。高台径のみでは時期を限定できず、奈良時代頃か。

図27-8は坏蓋片。11トレンチ出土。口縁部周20%残存。内外面とも灰色N6/0、破断面灰白色N7/0を呈す。胎土に1～5mmの長石あり、1～3mmの黒色粒あり。残存部外面上端に回転ケズリが見られる以外は回転ナデ。胎土に石英なく、外面の稜がゆるく、ナデが粗いので、陶器産ではないと思われる。口縁端部の凹面は明確なので、陶器編年Ⅱ-1、MT15段階の口径の小さめのものか。6世紀前業。

図27-9も坏蓋片である。3トレンチ出土。口縁部周20%残存。外面降灰痕は暗灰色N3/0、それ以外の内外面は灰色N6/0、破断面灰白色～灰色N7/0～6/0を呈す。胎土に1mm前後の石英あり。内面回転ナデ。外面、天井部回転ヘラケズリ後、口縁部回転ナデ。口縁端部の面はまだ保つが、外面の稜はかなり凹線化しており、口径も含めれば陶器編年Ⅱ-2、TK10段階のものである。6世紀中業。

図27-10は壺蓋片、おそらく長頸壺の蓋である。2トレンチ出土。残存率20%、口縁部周15%残存、つまみ部分は完存。外面と破断面灰色N6/0、内面青灰色5PB6/1を呈す。胎土に1mm前後の長石・石英・黒色粒あり。内面回転ナデ、つまみ接合部の下は磨滅。外面は口縁部からつまみの回転ナデの間に回転ケズリ1条。6世紀後半から7世紀頃に見られるものだが、無裝飾でかえり部の下方への突出が少ない事から見れば7世紀中業前後か。図37-7大道盛土出土の破片と接合する事が判明した。

図27-11は坏蓋片。10トレンチ出土。残存率10%以下。内外面・破断面とも灰白色N7/0を呈す。胎土に1mm弱の長石、2mm前後の黒色粒あり、4mm台の酸化粘土粒わずかにあり。内面は回転ナデ。外面天井部に回転ケズリ2条、中心のナデと口縁部からの回転ナデがそれを切る。奈良時代頃のもの。

図27-12は把手付き小型鉢片、コップ形のものである。残存率10%以下。外面明青灰5PB7/1、内面降灰痕で灰色N6/0、破断面紫灰色5RP6/1を呈す。胎土に1mm弱の長石・石英わずかにあり。外面は破片中央の稜の上はヨコナデに波状文、稜部分に断面長方形の把手の下端接合部残存、稜より下は手持ちへ

ラケズリ後ナデ。内面はヨコナデ。外面下半が手持ちヘラケズリであるのでTK208より以前の初期須恵器段階のものである。5世紀前半頃。

図27-13は長頸壺片である。3トレンチ出土。残存率15%、頸部周は80%残存。外面灰色N5/0、内面・破断面は灰色N6/0を呈す。胎土に1～2mmの長石・黒色粒あり。内面は回転ナデだが、肩部にその前の左上がりナメナデ残る。外面は回転ナデ。飛鳥Ⅲ期に成立する肩が張り、稜角を呈する壺K以前のものと思われる。飛鳥Ⅰ～Ⅲ期、6世紀末葉～7世紀後葉のものか。

図27-14は壺片である。3トレンチ出土。残存率10%、頸部100%、口縁部20%残存。外面青灰色5PB6/1、内面灰色7.5Y6/1、破断面紫灰色5RP5/1を呈す。胎土に粗砂粒なく、0.5mm以下では長石・石英・黒色粒が見られる。内外面回転ナデ、胴部との接合部は胴部に開けた孔と頸部の径の差により段差が生じ、ユビオサエ・ユビナデで整える。平城宮Ⅲ期から見られる壺Lで、頸部の接合が直角を為すものは平安時代初めまでしか残らない。8世紀前葉から9世紀前葉までのもの。

図27-15は器台口縁部片か。1トレンチ出土。残存率10%以下。外面灰白色N7/0、内面灰白色7.5Y7/1、破断面灰色N6/0を呈す。胎土に1～2mmの長石多し、石英あり。内外面回転ナデ、粘土帯の接合部分でやや屈曲する。条線の少ない粗い波状文や不明確な突帯を見ると6世紀代のものか。

図27-16も器台口縁部片。4トレンチ出土。残存率10%以下、口縁部周100%残存。外面灰色N4/0、内面灰色N5/0、破断面灰白色N8/0を呈す。胎土に1mm前後の石英若干あり、1mm弱の黒色粒わずかにあり。内外面回転ナデ、波状文は突帯下部のナデを越えて、突帯稜線に当たり痕跡を残す。台部が深くなりそうな口縁部の角度、シャープな突帯、細かい波状文などを見れば5世紀後半のものか。

図27-17は器台脚部片。3トレンチ出土。残存率10%以下。外面灰色N5/0～4/0、内面青灰色5PB6/1、破断面褐色7.5YR6/1を呈す。胎土に粗砂粒なし。内面は断続的なヨコユビナデ、外面はヨコナデ後波状文。透かし孔は3段確認でき、最上段の透かし孔はかろうじて幅が分かり1.8cm。四方透かしか。上下の透かし孔の間には各2条の突帯が巡り、波状文帯を画す。波状文は条線が少なくやや粗いが、突帯はシャープで、焼成も良好な事から、5世紀後半のものか。

図27-18は壺口縁部片である。10トレンチ出土。口縁部周でも残存率は10%以下。外面灰色N5/0、内面・破断面灰色N6/0を呈す。胎土に1mm前後の石英あり。内面は口縁部近くは回転ナデ、以下は方向不明のナデ。外面は回転ナデ、文様帯は断続的なカキ目ではなく、カキ目を入れた後、4～2.5mm間隔で、やや左傾に棒状工具でナデ消しを入れたものである。やや特異な口縁端部の形態や、壺口縁部外面にカキ目による装飾を入れるものは狭山池北堤窟など、陶器でも狭山地区の飛鳥時代前半期に類例が多いように思われる。6世紀末から7世紀後葉のものか。

図27-19も壺口縁部片である。10トレンチ出土。口縁部周の残存率は10%以下。外面黒色10Y2/1、内面灰白色N7/0、破断面青灰色5PB5/1を呈す。胎土に1mm弱の長石・石英わずかにあり。内外面回転ナデの後、外面は凹縁で画した2段の文様帯に、上段左下がり、下段右下がりの櫛形列点文を入れる。口縁端部外側から内面にかけて降灰痕多い。肥厚させた口縁端部の上端をつまみ上げる形や壺口縁部外面の列点文による装飾は、図27-18と同じく狭山地区の飛鳥時代前半期に類例がある。特に列点文は時間的に短いようで、6世紀末葉から7世紀前葉に限定できよう。

図27-20も壺口縁部片である。10トレンチ出土。口縁部周の残存率10%以下。外面灰色N4/0、内面・破断面灰色N5/0を呈す。1mm弱の長石あり、石英わずかにあり。外面は回転ナデ後単線の波状文。内面は口縁端部回転ナデ、それ以下はヨコナデで、破片下部部はナデ方向不明。口縁端部の形や胎土がやや

陶器とは異なる感じがある。時期は6・7世紀頃としか言えない。

図27-21も甕口縁部片。外面灰色N5/0、内面灰色N6/0、破断面紫灰色5RP5/1を呈す。胎土に1mm弱の長石あり。内外面回転ナデ、内面は1条棒状工具による浅い凹線状のナデ入る。外面は端部よりやや下に凹線2条、破片下端にも凹線1条残存、その間に木目の浮き出た柃目板敷部を斜めに押し付け施文している。時期はあまり限定できず、6～8世紀としか言えない。

図27-22は甕底部片である。残存率10%以下。外面灰色N4/0、内面灰色N6/0、破断面灰色N5/0を呈す。胎土に2～1mmの長石あり、1mm弱の石英わずかにあり。内面は無文不定形な内当て具痕跡の上に単位の不明確なナデ。外面はヨコナデの上に持ち上げる時の工具のアタリが残る。内面内当て具は襷を使用しているようで、珠洲焼きの可能性が高い。時期は限定できない。

図27-23は甕胴部片。残存率10%以下。外面・破断面灰白～灰色N7/0～6/0、内面灰色N6/0を呈す。胎土に1mm前後の石英・黒色粒わずかにあり。内面は無文不定形の内当て具痕あり。外面は平行タタキ。珠洲焼きか。時期は限定できない。

図27-24は轆式系甕胴部片である。残存率10%以下。外面青灰色5PB6/1、内面灰白色N7/0、破断面明赤灰色5R7/1を呈す。胎土に粗砂粒なし。内面はヨコユビナデ、外面は縦方向の縄文タタキ。縄文の単位は1mm前後と細かいが、明確に繊維を携っているのが分かる。縦方向に整った縄文タタキや焼成の雰囲気から初期須恵器段階のもの可能性が高い。4世紀末葉から5世紀前葉か。

以上、図化可能な包含遺物のみを見ても、5世紀代から8世紀前半、10世紀から13世紀のものはほぼ時期的に切れ目なしに存在するのに対し、8世紀後半から9世紀代だけに限定できる遺物がない。

その時期に含まれる可能性のある遺物も量的に少ないと言えよう。

個別に注目できる点を見ると、甕が出土しているのは、海から3～4km圏内は普通に出土する和泉地域の状況と比較しても不思議はないだろう。古墳時代の須恵器では器台が見られるのが注目できる。06-1調査区で古墳・家型埴輪などが確認されているのと関係があるかもしれない。須恵器甕では口縁部の加飾が減少する時期の加飾された例が比較的多いという現象があるように思える。

5. 小結

第2面で見えてきた状況は、この面で頭を出した183畦畔など、わずかに第2層耕土時点のものもあるが、総じて第1-2層が耕土である時点での耕地の様相である。

その時点でも183畦畔・203溝のラインや、25・240溝・241畦畔のラインが坪境である事がほぼ確定し、調査区内に三つの坪がかかっている様子が分かってきた。

本来は9トレンチのトレンチ中央付近の南東外側付近に坪境の交点が存在したであろう。

また、鋤溝の方向から、坪毎に耕作方向が異なる事も判明した。

畦畔・段差・溝などから復元される耕地区画は、長方形を基本としながら短冊形でも半折形でもなく、小さめでやや各所に歪みが見られる。これは耕地区画毎の高さからも分かるように、この面においてもまだ、耕地開発以前の複雑な微地形を反映しているためと考えられる。

流路の痕跡以外は糸里制地割が整然としている河内平野中央部とはやや異なる状況と言えよう。

面の時期を第1層の包含遺物から見れば、近辺の遺構集中域に見られ第2層にも包含されている古墳時代中期から奈良時代前半の遺物、第2層が耕土として使用されている時期を示す10世紀～14世紀の遺物の他に、15世紀～17世紀頃の遺物が含まれる。また、第1-2面もしくはそれ以上の面から切り込む

遺構には18世紀以降の遺物が若干含まれる。

つまり第1-2層を耕土とした床面としての第2面は14世紀~17世紀頃の状況と言える。

9トレンチを中心とした第1面相当面の調査や、10~12トレンチの第1-2面の調査結果と合わせる
と、第1-2層は17世紀まで耕土として存続し、本来1~10トレンチにもあったであろう耕土系第1-
1層が耕土である時期は、17世紀に入ってから18世紀初頭到大和川付け替えで整地土系第1-1層が敷
かれるまでと判明した。

また、第2層の包含遺物から見ると、第2層が耕土であった時期は包含遺物の空白期以降、10世紀中
葉から14世紀頃と考える事ができる。また、最も包含量が多かった古墳時代から飛鳥時代初頭にかけて
の遺物は、層位的には第3層形成より前の時期のものであり、調査区以外の遺跡内から客土された土に
包含され、一種の逆転現象を起していると言える。

第5節 第3面（「難波大道」の調査）

1. 概観

第3面は第2層が耕土であった時点の床面であると同時に、その耕地が開発される以前に「難波大道」
が作られた面でもある（図28・図版12-16）。

第3層が耕土であるかは不明な層なので、耕土上面としての性格があるかは分からない。

第2層を耕土とした耕地開発時に、かなりの削平がなされているようで、「難波大道」の盛土は一部
が畦畔基部に残された以外は失われ、調査区南西側では第3層から第5層までが遺存しておらず、第6
層が第2層の直下で平坦面をなし、第3面と第6面が同一面に重複しているような状況であった。

第3面と第6面が重複している部分は、10トレンチの南半、1トレンチのほぼ全域、6トレンチの南
西半の範囲である。1トレンチでは第3面の遺構と第6面の遺構を同時に検出したが、6・10トレンチ
では、コンポリュートラミナで層境が乱れている上下幅の中で、第2層床面遺構として第3面の畦畔基
部が検出される高さ、第6面で検出される第5層を埋土とする木根痕の輪郭が明確に見える高さに分
けて検出・調査した。

そのため、調査区全域の第3面平面図では、1トレンチの部分で第6面相当の木根痕も図化されてお
り、6・11トレンチでは図化されていないが、堆積状況の差ではない。

この第3面と第6面が重複している部分は、第2層を耕土とした耕地が開発される以前はさらに高か
ったようだが、現状でも第3面で最も高い部分である。そこから耕地区画毎に北東に低くなっていく。
そして、11トレンチ中央付近、2トレンチ東半、4トレンチ中央付近の「難波大道」西側溝である115
溝付近が最も低い。

そこから北東へはまた若干高くなり、3トレンチ北東隅付近ではまた第3層から第5層が遺存してお
らず、第6層が露頭していた。

検出された遺構は、「難波大道」の側溝・盛土・盛土直前の土坑、「難波大道」を浸蝕した痕跡と思わ
れる落込、それらを削平し、埋め立てて開発された耕地区画の畦畔・溝・側溝などである。

畦畔は6トレンチ部分の59畦畔、10トレンチの431畦畔、11トレンチ部分での183畦畔、12トレンチの
554畦畔以外は盛土を確認できず、床面に削り残された畦畔基部である。

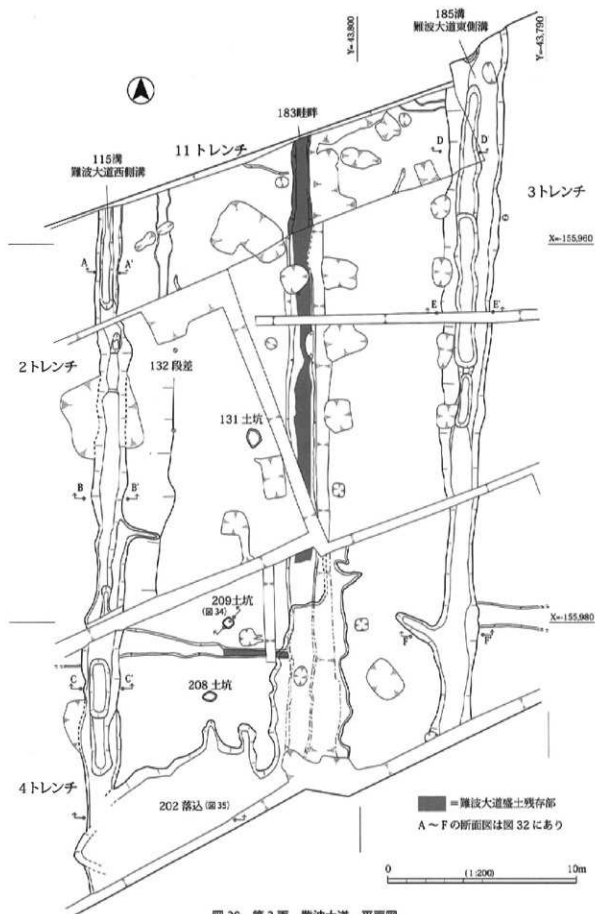


図29 第3面 難波大道 平面図

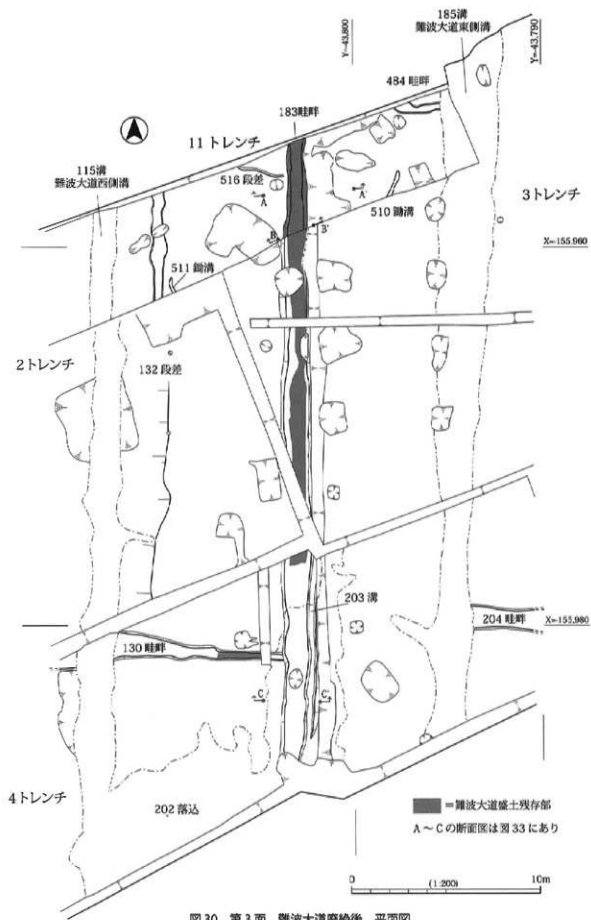


図30 第3面 難波大道廃絶後 平面図

2. 「難波大道」関連遺構（図29・図版16）

この面では、「難波大道」に先行する遺構は3トレンチで大道盛土下から検出された207畦畔しかない。それも遺構と認定するにはやや疑問のあるものである。実質的に「難波大道」がこの面で始めに作られた遺構であると言っても良いような状況である。

「難波大道」は、約17mの間隔をもって平行して走る115溝・185溝がその東西の備溝として道幅を示す。またその間で、130畦畔・183畦畔の畦畔基部に削り残された大道盛土が見られる。そして、盛土を盛る直前に掘られたと思われる、土師器坏の破片が出土した209土坑がある。

そして、大道が廃絶してから、それを削平して耕地化されるまでに大道の調査区南端付近が大きく浸蝕される。それが202落込である。

これらを「難波大道」関連遺構として各遺構について述べていきたい。

207畦畔（図31・図版20） 直接「難波大道」に関連する遺構ではないが、この面で唯一「難波大道」に先行するものであるのでここに述べる。

3トレンチで、南北坪境である183畦畔の基部に残されていた大道盛土を除去した際に検出された。幅60cm弱、高さ7cmほどの畦畔状の高まりである。北西から南東に直線的に伸びている。ただし残存していた大道盛土の下で、長さ2mほどしか検出されていないので畦畔と確定しづらい状況である。

土質・土色とも第3層とならぬ違いはなく、畦畔だとすれば第3層が耕土であった証拠となり、第3層耕土時点での畦畔頭部となる。正方位からほぼ45度の角度に斜行するので、大道造成以前には後の条里制地割りとは異なる耕地区画が存在した可能性を示唆する。

115溝（「難波大道」西側溝）（図29・32・図版14・17・19） 11トレンチ、2トレンチ、4トレンチをまっすぐ南北に貫く溝である。幅1.1～2.1m、面の変形が少なく、肩部の形態も整っている部分での幅は1.4mほど。深さ74～22cm。浅い部分の平均的深さは30～35cmほどである。

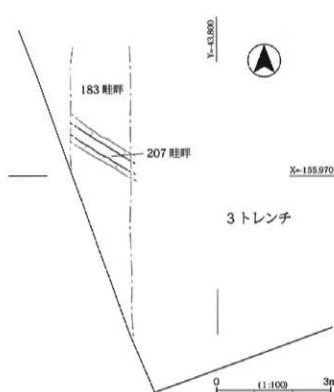


図31 第3面 207畦畔 平面図

溝内で、底部をさらに掘り込んだように深い部分が3ヶ所認められた。一つは11トレンチ北東壁から5m南まで。壁は立ち、深さ53cm。南側の浅い部分より18cm深い。

もう一つは2トレンチの北西壁から南に60cmほどから南へ長さ3.1m。壁は立ち、北端は階段状に2段落ちの形状をなす。深さ44cm。南側の浅い部分より14cmほど深い。

最後の一つは2トレンチと4トレンチにまたがり、長さ9.1m。4トレンチ側にさらに深い部分が長さ3mほどあり、その深さは74センチ。壁は立ち、南端は深い部分へ斜面を成して落ちていく。南側の浅い部分との差は52cm。

底面のレベルは、浅い部分だけを比較しても南北どちらにも傾斜を示さない。

断面図（図32）を見ると、浅い部分の断面

形状は基本的にB-B'断面のような皿型である。埋土はA-A'断面の1とC-C'断面の1にブロック土層が認められた他は、ブロック土の入り方やコンポリュートラミナの状況で分ける事はできるが漸移的な変化で、基本的には第3層よりやや暗色のシルト～極細砂の単層で埋まる。深くなる部分と浅い部分とで埋土に変化はない。泥土や流水堆積を示すラミナのある砂層などは一切なかった。深い部分の底部は特にコンポリュートラミナの上下動が激しい。

わずかに混じるブロック土には、大道盛土に似たものが見られる。また、12トレンチでは上を第2-2層が覆っていたので、第2-2層耕土時点で既に埋められている事が確実になった。

調査区内の南端付近では東側の肩部を202落込に浸蝕されている(図版17)。その部分の溝西側肩部が



1. 埋戻 7.5YR4/1 シルト わずかに粗砂あり ブロック構造 第2-2層盛土
2. 埋戻 7.5YR5/1 シルト～極細砂 Mn 粘あり コンポリュートラミナあり
わずかに「黒戻 10YR3/1 シルト(大道盛土?)」のブロックあり
3. 埋戻 7.5YR5/1 シルト～極細砂 管状Feあり コンポリュートラミナあり
第6層から置れたコンポリュートラミナ状ブロックあり
2との境界は漸移的である

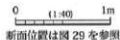


1. 埋戻 10YR5/1 シルト～極細砂 管状Fe・Mn 粘若干あり 第3層に似る
2. 「黒戻 10YR3/1 粘土(第5層系)」と「灰白 2.5Y7/1 シルト～極細砂(第3層と粒子は同じ、有機分が少ない)」の混層 コンポリュートラミナあり 部分的にFeに染まる



1. 埋戻 10YR5/1 粘質土 シルト主体 中砂～粗砂若干あり 「濃い黄 2.5Y6/4 シルト(第4層)」・「黒戻 10YR3/1 シルト」の直径3～9cmのブロック若干あり 管状Fe 若干あり
2. 埋戻 7.5YR5/1 シルト～極細砂 管状Fe 若干あり 下部に「明黄褐 10YR6/6～に濃い黄褐 10YR7/2 粘土～シルト(第6層)」・「黒 2.5Y2/1～黒戻 2.5Y3/1 シルト(第5層)」の直径1～6cmのブロックあり

115 溝(難波大道西側溝)



断面位置は図 29 を参照



1. 埋戻 7.5YR4/1 粘質土 シルト主体 粗砂あり わずかに炭化物あり 第2-2層
2. 1と3の激しいコンポリュートラミナ
「黒戻 10YR3/1 シルト(大道盛土系)」の直径0.5～3cmのブロックわずかにあり
3. 埋戻 7.5YR5/1 シルト～極細砂 2-4との境界は漸移的である
4. 3に第6層から置れたコンポリュートラミナ状のブロック混じる



1. 「黒 10YR2/1 シルト」・「黒戻 10YR5/1 シルト～極細砂」・「黄戻 2.5Y4/1 シルト～細砂」の直径1～5cmのブロック土 わずかに炭化物あり 難波大道盛土由来の人為的埋土か 点状は地産磁石で、左方はちぎれて下部に巻き込まれている
2. 戻 5Y5/1 シルト～極細砂
コンポリュートラミナで第6層をフレア状に巻き上げる(地産磁石)



1. 埋戻 10Y3/6/1～灰黄戻 10YR5/2 粘質土 シルト主体
中砂～細砂若干あり 管状Fe わずかにあり
第3層の直径1～2cmのブロック若干あり ラミナなし

185 溝(難波大道東側溝)



断面位置は図 29 を参照

図 32 115 溝(難波大道西側溝)・185 溝(難波大道東側溝) 断面図

やや膨らむもの202落込の浸蝕が及んでいる可能性が高い。202落込との埋土の関係は、埋土上面と埋土の途中で精査し、断面でも確認したが、切り合いはなく、同一の埋土で埋められている。

他に平面形で肩部ラインが凹凸する部分も浸蝕によるものようである。2トレンチ南側で東側肩部から枝津状に突出する部分も、最初水口かとも考えたが、そのような機能の必要性もなく、浸蝕痕の可能性が高いだろう。

溝内で深い部分があるのは以下のように考えられる。

溝埋土に一切水成堆積層が遺存していない事からすると、締まりが悪く、埋めた後に沈下する原因となる水成堆積層を一旦浚えてから溝を埋めた可能性が高い。また、浅い部分と深い部分に埋土の差がない事から、埋める作業は一気に行われている。

深い部分が掘り込まれているのは極めて良質な粘土層である第6層内であり、深い部分の片方の端が、上り下りしやすい階段状や斜面になっている例がある。

以上から考えると、耕地開発で溝を埋める前に底浚いをした際、良質な粘土を発見し、それを採掘した痕跡が溝の底部の深い部分である可能性が高い。

本来の大道側溝としての溝の深さは、浅い部分の深さに第2層形成時の削平を加えたものとなる。

183畦畔基部に残存していた大道盛土の底面がほぼ大道造成時の面の高さだとすれば、115溝の肩部は10cm前後削平を受けていて、大道側溝としての深さは本来40cm前後であったと推定できる。

出土遺物は土師器片42片、器種に分かるものなし。須恵器片98片、うち甕38片、坏39片、高坏2片、壺8片、はそう1片。図化できるものはなかったが、須恵器坏身片で陶邑欄年Ⅱ-3~4、飛鳥Ⅰ期よりは古く位置づけられるもの1片と、立ち上がりが高く、受け部僅もかなり小さくなっているが、極小まではいっていない、飛鳥Ⅰ~Ⅱ期頃に位置づけられるもの1片があった。

185溝（難波大道）東側溝（図29・32・図版16・19） 3トレンチ西半、4トレンチ東半を通り、西側肩部が11トレンチ北東端をかすめる、115溝と平行し、南北に直線的に走る溝である。

幅は3~1.3m。調査区内北端が最大で3m、北側は2.6m以上ある部分が多く、南側は1.9~1.6m幅の部分が多い。これは溝の通る部分の地形が、北東側が高く、溝の北側の肩部の高さが高いためと思われる。また、南側は202落込に近く、表土が流失し、後発的に溝が浅くなった可能性もある。

深さは93~7cm。浅い部分は36~14cmの深さに収まる部分が多く、断面形は皿状である。

1ヶ所、溝底部をさらに掘り込んだように深い部分がある。調査区北西壁から南に2mから、南に長さ18mの部分である。そのほぼ中央付近の長さ8.2mほどの部分がさらに深く、最深93cmで平均的には60~40cmほどの深さ。壁は立つ。115溝の深い部分と同じような性格のものと思われる。

本来の側溝の形は、浅い部分に近く、やはり第2層成立時の削平を加えて考えると、当初は深さ40cm前後であったと推測される。

浅い部分の底部のレベルは、北側がやや低い傾向はあるが顕著な傾斜は見せない。

断面図（図32）を見ると、埋土は115溝と共通する。E-E'断面で最後に大道盛土のブロック土で上を覆っていたのが、コンポリュートラミナで崩れているのが観察できた。断面図の1の層である。

D-D'断面では上に第2-2層が覆っているのが確認できた（断面図の1）。2の層はE-E'断面の1と同じ性格のものかもしれない。3と4の層は漸移的变化で堆積の途切れはない。

F-F'断面は、溝西側肩部に枝津状の突出が見られる部分の断面だが埋土に変化はない。この突出部の形もおそらくは浸蝕による崩れであろう。

溝の全ての部分において水成堆積層はなく、深い部分と浅い部分の埋土は、深い部分が最上部を大道盛土のブロック土で蓋をするように埋める傾向があるが、その下層は浅い部分と同質である。やはり115溝と同じように底渡いをしてから埋めたものと考えられる。その後の変形も、深い部分の底部でコンクリートミナが激しいのが115溝と共通する。

出土遺物は、黒色土器椀A類1片、埴輪片らしきもの2片。土師器38片のうち、甕1片、棒状片1片、土錘1点。須恵器50片のうち、甕15片、坏29片、高坏2片、壺1片。

須恵器坏である程度時期が分かるものは、ほとんど陶邑福年Ⅰ-4~Ⅱ-3・4、5世紀後葉から6世紀後葉のものだが、2片ほど飛鳥Ⅰ期後半でもありえる杯Hがある。

図37-1~4は図化可能なものである。

図37-1は埴輪片である。円弧ははっきりしないが円筒埴輪の可能性が高い。内外面・破断面とも明褐色5YR5/6を呈す。胎土に3~1mmの石英・長石多し、2~1mmのチャートあり、4~1mmの赤色粒あり。磨減が激しくほとんどの調整不明。わずかにタガよりやや下の内面にヨコユビナデが残る。時期は古墳時代としか言えないが、地域的には日置荘型埴輪の分布地域の縁辺であり、比較的高いタガが日置荘型のものであるなら6世紀代か。

図37-2は土師器管状土錘である。外形。外面は浅黄褐色10YR8/4を呈す。胎土に1mm弱の石英・赤色粒わずかにあり。外面に2個のユビオサエ残る。時期を限定する要素はない。

図37-3は黒色土器椀A類片。高台周は20%残存。外面と破断面明黄褐色10YR6/6、内面黒色5Y2/1を呈す。胎土に1mm前後の石英・赤色粒若干あり。磨減激しく調整不明。高台は断面三角形で底部は平坦なので、9世紀代のもの可能性もあるが限定はできない。

図37-4は須恵器坏身片である。口縁部周10%残存。内外面青灰色5PB6/1、破断面赤灰色5R6/1を呈す。胎土に1~2mmの長石あり、1mm前後の黒色粒あり。外面の破片下端に回転ケズリ残る以外は回転ナデ。陶邑福年Ⅱ-3・4前後、6世紀中葉~末葉のものである。

「難波大道」 両側溝（115溝・185溝）間の規模 115溝と185溝の間が「難波大道」の道幅と考えられる。その幅は16.4~17.2m。ほとんどの部分でちょうど17mの距離を測る。中軸線同士の芯々距離で18.8m、両溝の外側肩部の距離は19.9~21.3m。

両溝の肩部が削平を受けているのと、本来の厚さは知るすべもないが盛土の法面を加味すると、実際の道幅は最大でも16mほどであろう。また後述する130畦畔基部で残存していた大道盛土の範囲から推測すると、両側溝間一杯に盛土が成されていたとも限らない。

道の敷地幅としては側溝幅も含め、両側に耕作地があるとすれば側溝との間に畦畔が必要ではなく、最小でも21mほどと考えられる。

「難波大道」盛土残存部（183畦畔・130畦畔基部）（図29・33・図版19） 「難波大道」廃絶後、耕地開発された際に大道のほぼ中央に作られた南北方向坪地畦畔である183畦畔と、183畦畔から真西に伸びる130畦畔の削り残された基部の一部に大道盛土が残存していた。

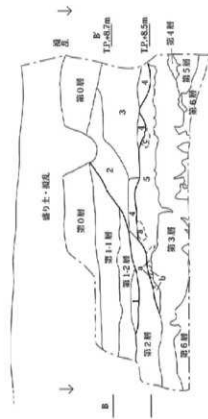
183畦畔は3トレンチで第2面を検出した際、既にその面に畦畔基部が露出しており、そこに固く締まった黒褐色土を主体とするブロック土層が見えていた。その黒褐色土は調査区内の基本層序で唯一の黒色層である第5層よりも主体的粒子が粗く、酸化も強い。また、砂粒と遺物を含んでいた。調査区外の包含層を母材とするものと思われる。

そのブロック土層はブロック土が扁平になるまで引き締められており、最下部のブロック土は下面に



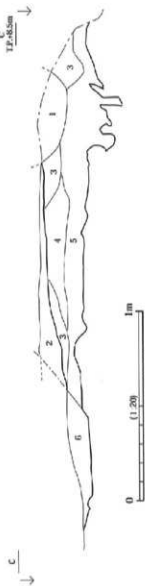
1. 底層 107946/1 シルト 粗砂-中砂がかり 粘岩層あり 第2.1層
2. 底層 753946/1 砂質土 シルト主体 粗砂-中砂あり 小礫むきかあり Mn 粘むきかあり 第2.2層
3. 底層 107956/1 ~ 107957/2 粘質土 シルト主体 中砂-粗砂がかり 小礫むきかあり 第2.3層(土質砂質土)
4. 底層 107957/1 粘質土 粗砂がかり 粘岩層あり 粘岩層あり 第2.4層(土質砂質土)
5. 底層 107957/1 ~ 5/2 シルトの7のブロックの間に 1.5m 厚層 107947/1 シルトの間に 1.5m 厚層 107947/1 シルトの間に 1.5m 厚層あり 第2.5層(土質砂質土)
6. 底層 107957/1 ~ 753957/1 シルト-粗砂層 第3層

第0層 底層 25573/3 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂-中砂あり 小礫むきかあり
 底層 25573/1 層 底層 107957/6 ~ 底層 107957/1 粗砂土 シルト-粗砂主体 粗砂-中砂あり 上にFe多し、アロックス層あり



1. 底層 107947/1 シルト 第2.2層(底層あり、その下に粗砂多し)
2. 底層 25575/1 ~ 底層 25574/1 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂-小礫多し 粗砂層あり 第1層(粘岩層砂質土)
3. 底層 107957/2 ~ 底層 107957/1 砂質土 シルト-粗砂主体 粗砂あり 第2層(粗砂 1~2cmのアロックスあり)

4. 底層 107957/1 シルト わずかに粗砂-中砂あり 第2層(粘岩層砂質土)
5. 底層 107957/1 シルト 中砂-粗砂あり 上小礫あり 底層のFe-Mnあり
 a=5 ~ b=3層、c=底層の粗砂層のアロックスとせられ下部の粗砂層でも、他の部分も全てaのブロックか
 しまり直し、第2層(粘岩層砂質土)に粗砂層に粗砂層入層土が入ったものか



1. 底層 753957/2 砂質土 粗砂-シルト主体 粗砂-小礫多し
 (底層のシルト)の粗砂2~5cmのアロックス層あり 202 底層土
2. 底層 107957/1 シルト 第2層(粘岩層)
3. 底層 25573/3 粘質土 シルト主体 粗砂-中砂がかり 粗砂層あり
4. 底層 107957/1 砂質土 粗砂-シルト主体 中砂がかり アロックス層粗砂層あり
5. 底層 107957/1 砂質土 粗砂主体 中砂あり シルト-粗砂がかりあり
 Mn 粘あり 202 底層土
6. 5.と同層 粗砂層あり 202 底層土

断面位置は図30を参照

図33 第3面 183 畦断 断面図

めり込んでいた。残存する厚さは最大で12cmほど、平均10センチほどである（図33A-A'・B-B'断面）。

離れた場所から土を持ち込んでいる事や、かなり叩き締めている事などは畦畔の盛土としては異例である。また、4トレンチの南側では202落込に切られ、その部分では183畦畔は202落込埋土の上に砂質土の盛土を盛って作られている事（図33C-C'断面）、11トレンチではそのブロック土層の上にさらに粘質土の盛土を盛って作られている事（図33A-A'断面）が判明し、このブロック土層は、202落込の浸蝕が始まる前から存在し、「難波大道」廃絶後の耕地開発の際、坪境畦畔の基部として削平を免れて残存していたものであると分かった。

そこで、これは「難波大道」の盛土が残存したものと判断した。

ブロック土層上面付近に顕著な風化の痕跡は見られず、ブロック土の単位も鮮明に見られる事から、大道存続時の本来の厚みは保っていないものと思われる。

過去の調査で大道の両側溝間で「整地土らしきもの」が認められた例はあるが、平面・断面で確実に「難波大道」盛土と言えるものが確認されたのは初の例となる。

また、4トレンチで183畦畔から直角に西に伸びる130畦畔の基部にも黒褐色土が認められた。こちらは残りが悪く、ブロック土の構造は確認できなかったが、同じ「難波大道」盛土の残存と思われる。

130畦畔基部の黒褐色土は、183畦畔から西へ3.7mまでの範囲で認められ、大道西側溝である115溝まで5.5mの距離を残す。第3面の凹凸や、第2層成立時の削平の差によるものかもしれないが、大道盛土が側溝ざりぎりまではなされていなかった可能性も考えておく必要があるだろう。

包含遺物は弥生土器と思われる小片が6片。須恵器は85片中、甕21片、坏49片、高坏3片、壺2片、壺蓋1片、鉢1片。土師器は77片中、甕1片、高坏1片、把手1片。

須恵器坏身片には図化はできないが、受け部径10cm程度に矮小化した、飛鳥I期頃ではないかと思われるものがある。

図37-5は土師器把手片である。舌状把手だが中空なのが奇妙である。外面橙色7.5YR7/6、内面灰白色10YR7/3、破断面にぶい黄橙色10YR7/3を呈す。胎土に1～2mmの石英・長石あり、2～1mmのチャートわずかにあり。外面はユビナデ、破断面から見える中空内部は体部側から螺旋状に巻いた粘土紐を詰め込んでいる形が見える。把手としての類例も付属する器種も不明である。

図37-6は須恵器坏身片。残存率10%、口縁部周25%残存。外面褐色～灰色10YR5/1～N6/0、内面灰色N6/0、破断面暗赤灰色5R4/1を呈す。胎土に1mm弱の長石、4～1mmの石英あり。内面から外面上半は回転ナデ、外面下半回転ヘラケズリ、立ち上がり部外面のナデは最後ナデ上げる。TK10段階、6世紀中葉のもの。

図37-7は須恵器壺蓋片。口縁部周10%残存。外面と破断面灰色N6/0、内面青灰色5PB6/1を呈する。胎土に1mm前後の長石・石英・黒色粒あり。内面回転ナデ、外面は回転ナデの間に回転ケズリ1条。6世紀後半から7世紀頃に見られるものだが、無裝飾でかえり部の下方への突出が少ない事から見れば7世紀中葉前後か。実測後、第2層出土の図27-10と接合する事が判明した。

図37-8は須恵器坏壺片である。口縁部周15%残存。外面灰色N6/0、内面青灰色5PB6/1、破断面紫灰色5P6/1を呈す。胎土に1mm弱の石英・長石あり。内外面回転ナデ、外面破片上端に回転ケズリ残る。TK10段階を中心に、MT15からありえるもので、6世紀前葉から中葉。

大道盛土の包含遺物は、その最新のものが大道造成時期に近い事になる。それで見れば大道が造成されたのは飛鳥I期以降とは言え、飛鳥II期頃の可能性が高い。

209土坑 (図29・34・図版20) 4トレンチの北寄り、183畦畔と115溝の間、115溝より東に2.6mの位置にあった土坑である。平面形は一辺50cmほどの隅丸方形を呈し、各辺の方位は正方位より45度ほど傾く。検出面からの深さは40cm。壁は立ち、底部は平坦である。

埋土に大道盛土と似た黒褐色土を主体に第3層・第6層のブロックが混じる層があり (図34断面図の2)、そのブロック土が扁平で、層が良く締まるなど、大道盛土の状況と酷似していたため、「難波大道」盛土施工直前に掘られ、施工と同時に埋められた可能性が高いものと判断した。

底部から5cmほど浮き、断面図の3と4の層の境目で土師器坏が出土した。正位置での出土だが、残存率は60%ほどで、口縁は数mmほどしか遺存していない。欠失部分の破片は埋土内にはなかった。4の層は掘り込んだ第3層が崩れて土坑底部に溜まったものであろう。鉄分が多いが質は第3層と同じである。土器はその上面に置かれたような状況である。3の層には炭化物が含まれている。

土器の完形率に問題はあるが、大道造成時の地鎮などに関係する可能性のある遺構として注目できる。

遺物は土師器坏1点、須恵器は蓋1片、坏身1片が出土している。土器1として図34に出土状況を記録した土師器坏は、残存率60%ほどだが口縁部がほとんど遺存していないため、口径を復元できず、傾きも確定できず、重みの有無も不明な状態で図化できなかった。器高は3.6cmほどか。口径は少なくとも12cm以上はある。胎土に粗砂粒を含まない「精良な胎土」で、底部は平たい。内面はやや磨滅するが、暗文のあった形跡はない。底部外面には平行する直線的なケズリが見られる。口径が13cmを越えなければ、飛鳥Ⅱ期の杯CⅡとしてならん問題ないものである。7世紀中葉頃か。

図37-9は須恵器坏身片である。残存範囲内で外面に回転ケズリが見られない事、坏蓋であるなら屈曲部で天井部との接合部が厚くなり、内面全体も凹凸があるはずだが厚みが均一な事、口縁端部外面に細い単位の回転ナデが入り、端部内面は外反気味に終るように丁寧に仕上げられている事などから坏身と判断した。やや丸味の強い土師器坏形の坏であろう。残存率10%、口縁部周30%残存。内外面灰色N6/0～5/0、破断面灰色N5/0を呈す。胎土に1～2mmの石英あり、1mm前後の長石あり。内外面回転ナデ。復元口径が10.4cmで、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期に限定できる。7世紀中葉～後葉。

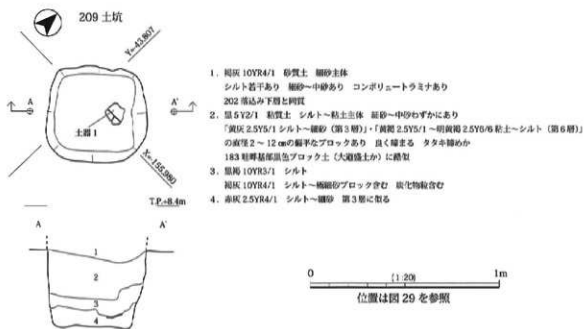


図34 第3面 209土坑 平・断面図

図37-10は須恵器蓋片である。坏身にしては受け部となる部分が厚く、その端部が丸く、立ち上がり部となる部分の内面の接合部分の屈曲がシャープなので、蓋と判断した。残存率は10%以下、口縁部周20%残存。外面灰白色N7/0、内面灰色N6/0、破断面黄灰色2.5Y6/1を呈す。胎土に粗砂粒は見られない。残存部分の調整は回転ナデのみ。壺の蓋の可能性が高いが、飛鳥Ⅰ～Ⅱ期頃のものか。6世紀末葉～7世紀中葉。

これら3個の遺物で土坑の時期を絞り込む事が許されるなら飛鳥Ⅱ期、7世紀中葉となろう。またこの土坑が「難波大道」造成直前に掘られ、大道盛土を盛る時に埋められたのであるなら、その時期が大道の造成時期になる。

202落込(図29・35・図版18・20) 4トレンチ南東壁沿いで115溝と183畦畔の間を中心に広がり、一部は183畦畔の下で溝状に北に伸び、3トレンチとの境まで達する不定形な落込である。

183畦畔の下を北に伸びる部分の西側にも、溝状に北に伸びる肩部が2ヶ所ある。最も深い部分は115溝より東に4mほどのトレンチ南東壁際で、深さ42cm、そこに向かって掘鉢状に深くなっていき、溝状に伸びる部分の底部も南側に下がる傾斜を見せる。

それらの形状から、202落込は浸蝕痕と考えられる。底面に「V」字状に切り込んだ形はなく、緩やかな傾斜を見せるので、急激な水流で短期間に形成されたものではなく、ある程度の時間を経て徐々に形成されたものであろう。

その形成期間は、183畦畔の基部に残存していた「難波大道」盛土がこの落込に切られており、落込埋土の上では183畦畔は全て盛土で作られているので、「難波大道」廃絶からそれを削平した第2層を耕土とする耕地開発までの間と分かる。

埋土には、泥土や砂層など水成堆積層はなかった。「難波大道」西側溝である115溝を切っているが、埋土は切り合えず同一層で埋まっているのは115溝のところで上述した通りである。

埋土は上下層に分けられる。図35の断面図の1が上層で、これは一部平面図の肩部よりやや外に広がる部分もあった。この層上面が北側の第3面とほぼ平坦となる。下層は断面図の2～4である。2の層はやや鉄分が多いが、115溝・185溝と同質の埋土である。3の層はそれより前に入る埋土だが、主に183畦畔の下を北に伸びる溝状部分に堆積している。砂粒が多いが水成堆積ではない。

4の層はトレンチ南東壁沿いの北東部の限られた範囲に堆積している。砂質土だが黒褐色を呈し、土器細片を多く含むので、大道盛土由来の可能性が高い。しかし、ブロック土は見られないので、浸蝕された盛土の土が徐々に二次堆積していったものと思われ、唯一人為的埋土でない可能性がある。

落込の形は、浸蝕を起した水の流れが北から南に向かっていった事を示し、調査区内の南西から北東に下がる地形と齟齬を成す。調査区外南側近辺に低い地形があった可能性が高い。

この落込は、「難波大道」廃絶から、それを削平する耕地開発までの間に、ある一定の期間が存在した事を示すものである。それは「難波大道」の廃絶が管理の放棄という形で為され、道を消滅させて、その跡地を他に転換するという行政処理が同時期的には行われなかった事を示す。

202落込出土遺物は、弥生土器らしき小片が2片ある。須恵器は262片の内、甕94片、坏101片、高坏14片、壺16片、はそう1片がある。坏はほとんどが杯口で蓋より身が多いが、1片のみ高台のある杯Bがある。壺には平瓶1片あり。はそう片は183畦畔基部の大道盛土出土片と接合した。また、高坏片のうち、4トレンチ第2層出土片と接合したものがある。

土師器は139片の内、碗2片、高坏5片、甕1片、把手2片。わずかに「精良な胎土」が見られるが、

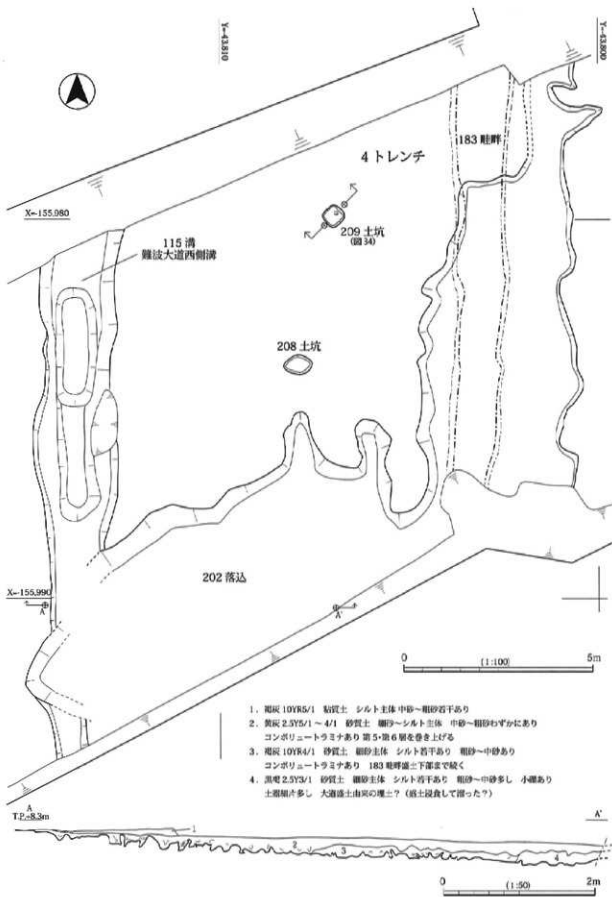


図35 第3面 202 落込 平・断面図

碗片は粗製土師器碗のようである。

他に下層でも底部に近い位置で青磁碗の小片が1片出土している。小さすぎて蓮弁の有無も不明。

埋土上層からはあまり遺物が出土せず、ほとんどが下層出土である。上下の遺物に時期差は見られない。大道盛土と第2層とに接合例が見られた事は、大道盛土の削平と202落込の埋め立て、第2層の形成が一連のものとして行われた事を示唆する。

最新の遺物は粗製土師器碗片と青磁片であるが、時期の限定はあまりできず、粗製土師器碗の存続期間、9世紀代から11世紀前葉までとしか言えない。

図37-11～17が図化できた遺物である。11～14が下層出土、15～17が上層出土である。

図37-11は須恵器坏身片。残存率10%以下、高台周20%残存。外面青灰色5PB5/1、内面青灰色5PB6/1、破断面赤灰色5R5/1を呈す。胎土に1mm前後の石英多し。内面は回転ナデ後、底部中央に直線ナデ。外面は底部回転ヘラ切り後回転ナデ、体部も回転ナデ。高台径からは時期を限定できず、飛鳥Ⅲ期以降奈良時代頃、7世紀後葉から8世紀頃としか言えない。その前半に多いタイプとは言える。

図37-12は須恵器坏蓋片である。残存率15%、口縁部周20%残存。内外面・破断面とも灰色N5/0を呈す。胎土に1mm弱の長石あり。内面から外面下半にかけて回転ナデ、外面上半は回転ケズリ、つまみ周辺のナデは残存範囲にはない。かえし部が口縁部よりだいぶ下方に突出しており、口径10.8～12.0cmの杯Gに対応する蓋なので、飛鳥Ⅰ期、6世紀末葉から7世紀前葉に限定できる。

図37-13は須恵器高坏脚部片である。破片上端、高さ3cmの位置にわずかに透かし孔の痕跡が残っていた。透かし孔の形態も大きさも分からないが、さほど大きくない円形ではないかと思われる。残存率10%以下、脚端部周25%残存。外面灰色N6/0、内面灰白色N7/0、破断面オリーブ灰色2.5GY6/1を呈す。胎土に1～2mmの石英あり、1mm前後の黒色粒あり、1mm前後の黒色砂粒わずかにあり。内外面回転ナデ。この形態の高坏脚部は陶器TK43号窯に類例があり、わずかながら光明池地区・狭山地区にも分布する。6世紀後葉に限定できる。

図37-14も須恵器高坏脚部片。残存率15%、脚端部周も15%残存。外面灰色N5/0、内面灰白色2.5Y7/1、破断面紫灰色5P5/1を呈す。胎土に4～1mmの石英若干あり、1mm前後の長石あり。体部内面は螺旋状ユビナデ、自然釉発泡で荒れる。脚部内面は回転ナデ、脚部外面も回転ナデで下半以降灰痕多く、突帯に自然釉溜まり発泡する。透かし孔は1個のみ残存で残存部分からは何方透かしか不明。TK208段階、5世紀中葉のもの。

図37-15は須恵器坏身片である。口縁部周10%残存で復元径には若干不安がある。内外面・破断面とも灰色N6/0を呈す。胎土に粗砂粒を含まない。陶器編年Ⅱ-3・4前後のもので6世紀中葉～末葉にありうる。

図37-16も須恵器坏身片である。高台周15%残存。内外面・破断面とも灰色N6/0を呈す。胎土に1～2mmの石英、1mm前後の長石あり、1mm前後のチャートわずかにあり。内外面回転ナデ、外面底部の高台貼り付けのナデより内側は回転ヘラ切り後不定方向の緩いナデ。時期は限定しにくいが高台径10cmほどで高台より体部が外に張り出す杯Bは奈良時代より、飛鳥時代後半に多いと言える。

図37-17は須恵器把手付き無蓋高坏片。口縁部周10%残存。外面灰色N6/0、内面灰色N5/0、破断面灰色N4/0を呈する。胎土に粗砂粒なし。内外面回転ナデ、内面には降灰痕あり。器形は初期須恵器段階からTK208段階までありうる。4世紀末葉から5世紀中葉。

なお、図37-23の208土坑出土の遺物もここに紹介しておく。208土坑は202落込と同一の埋土で埋ま

り、その位置関係からも一連のものと思われるからである。

須臾器片身である。高台周15%残存。外面灰色N5/0、内面灰色N6/0、破断面灰白色N7/0を呈す。胎土に1mm弱の石灰わずかにあり。内外面回転ナデ。時期はあまり限定できず、奈良時代前後か。

3. 耕地区画関連遺構

「難波大道」が廃絶し、その道路敷き部分を浸蝕した202落込が形成された後、大道側溝と202落込を埋め、大道盛土を削平し、第2層を耕土として正方位を指向する耕地区画が調査区全体に出現する。

条里制地割りの研究においては、「難波大道」推定ラインの東西に東西幅が115mを越える坪が集中し、それは「難波大道」の道路幅を坪内に取り込んだからと考えられている。

つまり、「難波大道」が存続している時期に、大道を基準として条里制地割りが施行されたと考えられており、当然「難波大道」沿いには、それと同時期存在する条里制地割りの耕作地が広がっていたはずである。

しかし、今回の調査区では「難波大道」と平行する時期の可能性のある耕地区画や耕作痕は一切なく、大道廃絶後の耕地開発が正方位を指向する耕地区画の初源となる。

この面で「難波大道」の中軸線近くに南北方向の坪境、その西側1・6・10トレンチを通るラインに東西方向坪境ができ、調査区内には東側・北西側・南西側に三つの坪がかかる事になり、それが現代まで踏襲される。

183畦畔(図30・33・図版17・19) 「難波大道」中心近くに作られた南北方向坪境畦畔である。畦畔中軸線で見ると、大道両側溝間17mの中で、東から7.6m、西から9.4mで、正確な大道中軸線から東に0.9m寄った位置を通る。

東側を攪乱や第1-2面203溝などで切られているため、正確な幅が分かる部分は少ないが、基底部幅1.2~1.6mはあったようである。一番残りの良い11トレンチ東西セクション断面(図33A-A'断面)での高さは25cmである。

3・4トレンチ境から南に1m前後から北側は「難波大道」盛土と第3層上部を高さ15cmほどに削り出して基部としている。

3トレンチでは図33B-B'断面を見てもわずかに盛土が残っていたはずだが(B-B'断面の4)、第2面直上まで達する攪乱が多かった事もあり確認できず、第2面と同じ高さで畦畔基部である大道盛土上面が露出する状態で検出された。しかし、平面的に盛土を検出できた11トレンチでも図33A-A'断面で見ると盛土上面、畦畔基部上面は第2面よりわずかに高いほどである。

第2層は層厚が厚い事から第1-2層形成時にそれほど削平を受けていないと思われ、A-A'断面の盛土(3の層)の形状が第1-2層形成時に403畦畔基底部におさまって、第1-2層形成時の削平がほとんどないと推測できるところからも、畦畔基部は耕土である第2層の本来の上面とほぼ同じ高さまで削り残されていた事が分かる。

つまりこの畦畔の基部は、他の多くの畦畔基部のように耕作による攪拌を受けない結果で残ったものではなく、耕地開発当初から計画的に削り出されたものであると考えられる。

それを補強するものとして、3トレンチでは削り出された畦畔基部と耕土との間にシルト層が斜面に貼られた様に残っていた(図30 3トレンチ部分の183畦畔基部と「難波大道盛土残存部」との間)。11トレンチでは検出できなかったが、図33A-A'断面で畦畔基部西側の法面にブロック土層が貼られている

のが確認できた。

183畦畔の南部分は、削り出し部分が4トレンチの北端で途切れ、そこから南は全て盛土で作られている。なぜなら、畦畔の下に202落込があり、それを埋めた埋土の上面に作られているからである。

この部分でも畦畔頭部は第2面で検出されたが、輪郭がややはっきりせず、少しきつめに下げるようにして検出した。図33C-C'断面で見ると、第2層と区別のつかない2の層が3・4の層の上を覆う。畦畔が一度3・4の上面まで削平され、第2層と同質の盛土で盛り直されたようである。それで第2面で輪郭の不明瞭な部分があったのであろう。

3・4の層は202落込の埋土である5の層の上に盛られている。4は5に近い砂質土で、それを保護するように3の層が法面に貼られているようである。202落込埋土である5と6の層に同質ながら切り合いが見えるのは、畦畔部分直下の埋め戻しを優先させたのであろうか。

畦畔の東西の平坦面に高さの違いはなく、南北方向も顕著な高低差はない。4トレンチ南東辺に近い部分がやや低いのは、第1面からのクラックが見られ、旧落堀川への段差形成後の後発的な変形である。183畦畔は耕地開発当初から計画的に作られた事や規模からも坪境の大畦畔と言うにふさわしいが、それに伴う水路の痕跡はまったくない。現代のコンクリート水路によって破壊されたとしても、幹線的な水路なら肩部程度は遺存していてもよさそうだが、それも見られず、元から水路を伴わないものと考えられる。

畦畔盛土内から若干の遺物が出土している。須恵器71片のうち、甕22片、坏39片、高坏1片、壺1片、壺蓋1片、はそう1片。土師器51片のうち、高坏3片、把手1片、小皿4片。瓦器椀8片。平瓦2片はいぶし1片、土師質1片。

盛土内に第2層形成以降の時期と思われる瓦器椀片やいぶし瓦片が含まれている事は、断面において盛土の盛り直しが見られる事と整合する。瓦器椀片は11トレンチで削平を免れた畦畔盛土でも、4トレンチの202落込埋土上の盛土でも出土している。いぶし瓦は遺跡内で鎌倉時代にまで遡る可能性があるものも出土しているので、時間的に齟齬はないだろう。遺物からは13~14世紀頃に畦畔盛土の盛り直しがあったと考えられる。

183畦畔盛土内出土遺物で図化できたものは図37-18~21の4点のみであった。

図37-18は須恵器壺片である。残存率25%、高台周30%残存。内外面・破断面とも灰白~灰色N7/0~6/0を呈する。胎土に1mm前後の長石わずかにあり。内外面回転ナダだが外面はその前に回転ケズリ。また、ナダ後に1条、工具痕が巡る。2×4mmほどの挟りとその粘土をナダ付けた痕が繰り返し並ぶ。平城宮Ⅲ期に現れるもので、今回の調査では遺物の少ない時期のものである。8世紀中葉から9世紀前半葉か。

図37-19は須恵器壺つまみ片である。かなり大きいので、皿の蓋か短頸壺の蓋のつまみと思われる。つまみの周は100%残存。外面・破断面は灰色N6/0、内面は青灰色5PB5/1を呈す。胎土に1mm前後の長石・石英あり。つまみは回転ナダ、蓋天井部内面は同心円タキ後ナダ。これほど大きいつまみは平城宮Ⅱ期に多いが、その時期に限定できるかは分からない。8世紀前半頃か。

図37-20はいぶし平瓦片である。片方の側端面がわずかに残る。器表灰色N5/0、破断面灰白色N8/0を呈す。胎土に1~2mmの石英多くあり。上面はかすれるが布目残る。端面近くは調整不明だが面取りしてある。端面はケズリ。下面は荒れ、横位の沈線状の工具痕のみがわずかに残る。いぶし瓦でも中世に属するものであろう。

図37-21は土師質平瓦片。2辺端面が残る。器表は明褐～青灰色2.5YR5/6～5B6/1、破断面にぶい橙色7.5YR6/4を呈す。胎土に1～2mmの石英・長石あり。上面は磨滅するが布目か。側縁は1条ケズリ、上縁はタテにケズリが並ぶ。端面はケズリ。下面はタタキで上縁ヨコナデ。厚みなどから見ると平安時代頃のものか。

130畦畔(図30) 4トレンチで183畦畔から西に伸びる小畦畔の基部である。ここにも一部「難波大道」盛土が遺存していた事は上述した。幅0.4～1.4m。高さは残りの良いところでも5cmに満たない。115溝と交差する部分では溝埋土上面に畦畔が形成されていたはずであるが、溝埋土上面に到った所で判然としなくなり検出できなかったため、溝を掘削した状態で図化した。

そのため、平面図上は115溝が130畦畔を切っているような図になっているが、115溝の西側2トレンチでも畦畔の続きは検出されており、畦畔が溝埋土上面を通っていた事は確実である。

なお、第2面でこの畦畔に後続する耕地区画と考えられる13溝・45段差は130畦畔より約3m前後北にずれている。それは、12トレンチで第3面554畦畔から第2面543畦畔に踏襲される耕地区画ラインに合わせる変化であり、後述する元「難波大道」付近に特殊な地割りを残すという、第3面の状況を解消する変化である。

183畦畔の東側、130畦畔と対称的な位置に204畦畔があり、この畦畔も185溝埋土上面から183畦畔までの間が検出できなかったが、その間はコンポリュートラミナが激しく、上からの小さな攪乱も多いため不明確になったものと思われ、本来は183畦畔に取り付いていたものと考えられる。

59・426畦畔(図28) 6トレンチ北東側から1トレンチを横切り10トレンチ南西部を抜ける東西方向坪境を成す畦畔である。59畦畔は、第1～2層耕土時点の畦畔である241畦畔盛土の下で第2面に頂部を突出させていた畦畔である。1トレンチでは盛土を確認できず、畦畔基部を検出したのみであるが、6トレンチでは盛土と耕土の境を追って検出でき、その下で、一回り幅の大きい畦畔基部を検出した。426畦畔とは1・10トレンチ境の大きな攪乱で隔てられるがラインは通り、同じ耕地区画である。

幅は2.5～0.4mと差が激しいが、部分ごとに特徴がある。

10トレンチ426畦畔は畦畔基部を検出した。427段差との交点より西側は北側の肩部が上面の25溝の攪乱で切られているが、それでも幅55cm以上あるのが分かる。東側で最小幅は38cm。高さは最大でも6cmである。

1トレンチ部分での59畦畔は基部のみ検出し、東側ではコンポリュートラミナが激しく、土色の違いによる痕跡が見られるのみだったが、西側では58畦畔との交点付近が太く幅1.7m。そこから東は細く90～80cmほどになる。最小幅75cm。高さは5cm前後。

6トレンチでは盛土と畦畔基部で南に2段落ちの形を取り、畦畔基部は幅2.5～1.28m、盛土は幅1.2～0.8m。畦畔基部の高さは5cm前後、盛土は検出時に5cm程度上部を削平してしまいが最大高15cmで、平均12～14cmある。

6トレンチ部分で盛土と畦畔基部が二段落ちの形状になるのは、南側の平坦面が東に行くに従って低くなる事もあるが、当初設定された畦畔基底幅が残存する畦畔基部最大幅に近いもので、第2層が耕土として機能している間に耕作で削られたり、補修されたりを繰り返して残存したのが盛土部分であると考えられる。この基部の幅と盛土の幅の違いは、この坪境畦畔がやはり耕地開発当初から計画的に基部を削り出して作られている事を示唆する。

畦畔両側の平坦面の高さは、畦畔の南側の58畦畔より西側は北が南より5cmほど低い、249・250畦

畔間では3cm差、250・251畦畔間ではほとんど同じ高さになる。251畦畔より東では後発的な面の变形もあるが、南側が北側より低い可能性がある。

254落込 (図28・36) 6トレンチの東側近く、59畦畔と251・252畦畔の交点部分で、59畦畔の盛土の質が異なり、粗砂が多くなり、それが畦畔基部のみの検出である251・252畦畔にも若干伸びているのが確認された。

その下にさらに砂質の土が見えたので、掘削してみると、畦畔交点を浸蝕したような落込が検出され、それが第2・3層に比べ格段に砂の多い土で埋められ、その上に畦畔が復旧されていた事が判明した。

不定形で攪乱に切られた部分もあるが、東西1.6m、南北1.35mの規模を測る。深さは15~20cmほど、底部は北西より南東が深い傾向にある。

底部の高さと形状から見ると、畦畔交点北西側に西方向からきた水流が、畦畔を破壊・浸蝕して南東に抜けた痕跡と思われる。埋土が砂質なのはその水流による堆積物を利用しているのであろう。

この面で唯一の洪水痕跡である。第2層に部分的に砂粒が含まれるのも、「難波大道」盛土を鋤き込んだからだけではなく、耕地開発以降の洪水堆積物の影響もある事をこの落込が示す。水流が西から来たとする、溢流したのは依網池方面からという事になる。

北西側坪内耕地区画 (図28) ここから、調査区内にかかる三つの坪内の耕地区画について述べる。

59畦畔以北、183畦畔以西の坪である。基本的には東西方向に長い長地型地割りが為されているようで、耕作方向を示す鋤溝も東西方向のみである。

10~12トレンチで検出された畦畔・段差の南北間距離を芯々距離で見ると、10cm前後の誤差を許容す

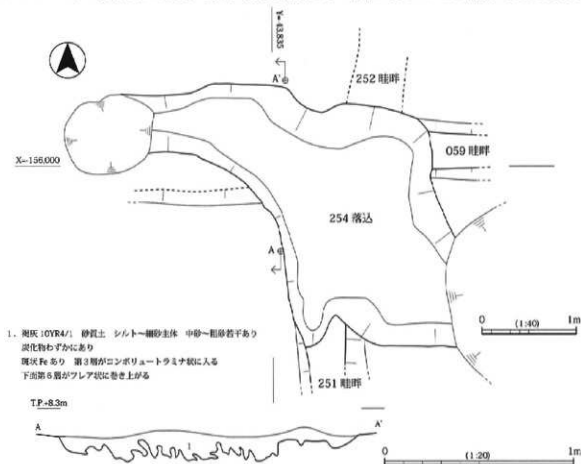


図36 第3面 254落込 平・断面図

れば、426・431・554・513畦畔間の各距離は、ほぼ10.9mと言ってよい。この距離は典型的な条里制地割り坪一辺の長さの10分の1に当たる。(以下耕地区画関係距離は芯々距離)。

ただし、513畦畔から516段差の距離は10.5mほどしかない。

10～12トレンチで平坦面の高さを見ると、431畦畔の南がT.P.+8.50mで一番高く、北側がT.P.+8.40mと10cmほど下がる。514畦畔の東西は西がT.P.+8.32m、東がT.P.+8.28mと差が少なく、513畦畔より北、517畦畔の東西は共にT.P.+8.24mほどで差がない。516段差以北は面積が狭いので判然としませんが、T.P.+8.14mほどで一番低い。

ただし、130畦畔のところ上で上述したが、130畦畔と554畦畔のラインが南北3mほどずれる問題がある。これは、252・514畦畔のラインより東側で、そこから西側とは若干違った変則的な地割りが為されている可能性を示す。513畦畔・516段差間の10.9mに満たない距離もその変則的地割りに属する可能性がある。

252・514畦畔ラインは「難波大道」西側溝の115溝より20.3m、183畦畔より30.3mを測る。252畦畔の東西の平坦面はどちらもT.P.+8.30mほどの高さで、高低差はない。むしろそのもう一つ西側の253畦畔の方が高低差があり、西側の平坦面が8cmほど高い。その事から、やはり252・514畦畔ラインは高低差に伴う耕地区画ではなく、変則的な区画範囲を画するものである可能性が高い。また、西側の東西方向長地型地割りも、高低差により途中で区切られている部分もある事が分かる。

183畦畔と252・514畦畔との間の東西方向畦畔間の南北距離は59・130畦畔間19.3m、130・513畦畔間13.3mであり、513畦畔・516段差間10.5mも含め、特に規則性は認められない。

南西側坪内耕地区画(図28) 59畦畔以南、183畦畔以西の坪である。基本的に南北に長い長地型地割りが為されているようである。難溝も南北方向のみ検出されている。

南北方向の段差・畦畔による耕地区画幅は427段差・58畦畔間21.4m、58・248畦畔間10.9m、248・249畦畔間11.7m、249・250畦畔間9.3m、250・251畦畔間11.8m。

一見ばらつくようだが、249・250畦畔間9.3mの10.9mに足りない分1.6mを両側の区画から0.8mずつ繰り込むと、3区画ともほぼ幅10.9mになる。また、427段差・58畦畔間の21.4mは10.7mの2倍なので、ほぼ10.9m幅区画二つ分の幅と言ってもよく、1トレンチ西隅の攪乱付近で一つ耕地区画を見逃した可能性が高い。

ただし、251・183畦畔間の距離は31.2mであり、10.9mの3倍より1.5m短い。むしろ251畦畔から「難波大道」西側溝である115溝の東肩部までの距離がほぼ21.8mと10.9mの倍数になる。

これを妥当とすれば、大道廃絶後の耕地開発においても、坪内の地割りにさえ大道のラインが基点とされている事になる。

また、この南西側坪の状況を通じて北隣の北西側坪を見ると、東西長地型地割りの中に南西側坪の251畦畔のラインに近い252・514畦畔ラインを取り入れ、そこから東に変則的な地割りを導入する事によって、「難波大道」の道幅の半分強を取り込んだ変則的な坪の形態に対応しているようにも見える。

ただ、「難波大道」西側の摂津国住吉郡の条里が、大道西側溝東肩部を基準ラインとしているとすると、大道と併存して西側に接していた坪は、大道側溝の幅が耕地区画から削られていた事になるのが疑問である。単純に考えれば大道西側溝の西肩部に畦畔を作り、その中軸線を大道西側の条里制地割り基準ラインとするのが妥当なはずであろう。

耕地区画平坦面の高さは、427段差の東側が調査区内で最も高いT.P.+8.55mで、その西側は段差で2

cmほど落ちるがほとんど差はない。248畦畔の東西は高さの差なくT.P.+8.44m、249・250畦畔間T.P.+8.41m、250・251畦畔間T.P.+8.31m、251畦畔以西は残存面積が少なく後発的な沈下が見られるため本来の高さは不明だが、西よりわずかに落ちるようである。ちなみに1トレンチ部分では畦畔基部を検出した後、第6面相当の木根痕などの輪郭が明瞭に検出できる高さまで下げているので、耕土床面としての正確な高さは不明である。

東側坪内耕地区画(図28) 183畦畔以東の部分である。北西側坪の東隣の坪に当たる。検出された耕地区画が少なく、農溝も部分によって南北方向と東西方向があるので、基本的な区画が分かりにくい。第2面に踏襲されると考えると南北方向長地型地割りを基本としていた可能性が高い。

3トレンチの184畦畔と8トレンチの296畦畔は調査区境で食い違ってしまいが、その理由は良く分からない。296畦畔は明確に検出でき、184畦畔は第2層に粗砂の混じりが多くなる部分を手ごたえて検出していったので、184畦畔の南側部分の検出が間違っていた可能性が高い。

184畦畔は蛇行もするが、296畦畔も含め、南北正方位の2m幅の中には収まる。そこから291畦畔までの東西距離は10.9~13.1mで、極々おおまかに見れば10.9mに近いとも言える。183畦畔へは14.8~17.1mで、強いて言うなら10.9mの1.5倍に近似する。大道東側溝の185溝東肩部へは6.6~5.0mで10.9mの半分の距離

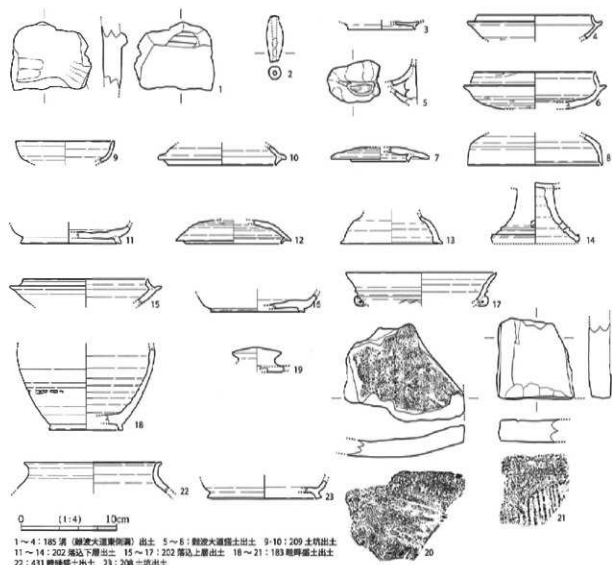


図37 第3面 遺構出土遺物

須恵器では、表で埴輪としたものは図38-8で、器種不明だが埴輪の可能性は低い。上層では甕と坏の破片数は拮抗する事が多いが、この層ではかなり坏の割合が高いと言える。時期的には初期須恵器の段階から飛鳥Ⅰ期後半のものまであり、特に飛鳥Ⅰ期後半のもの存在は、「難波大道」がその時期以降の造成である事を示し、重要である。

土師器は量も少ない。泉北地域の周辺部でもあり、早い段階で須恵器が一般の集落にも普及する状況を反映している可能性がある。土師器高坏の破片にも飛鳥時代に入る可能性のあるものがある。

石器では石鏃の他に剥片・チップが見られ、石器製作址の存在を暗示する。金属製品としたものは不定形な鉛の塊らしきもの(図版33-3)で、溶かしたものがこぼれて固まったかのような形である。

包含遺物のうち、図化出来たのは図38の8点のみである。

図38-1は土師器高坏片である。2トレンチ出土。残存率10%以下、脚柱部周は100%残る。磨滅して、内外面橙色7.5YR6/6、破断面明褐色7.5YR5/6を呈する。胎土に1mm前後の石英・赤色粒あり、長石若干あり。体部内面底面にユビオサエ残る他は調整不明。太めの中空円筒形の脚柱部を体部に貼り付けるタイプの高坏は飛鳥Ⅰ～Ⅱ期に定型化した主流の高坏と共に少数存在するものである。7世紀前葉から中葉か。

図38-2は須恵器坏身片である。9トレンチ出土。残存率は口縁部周も10%以下。内外面灰色N6/0、破断面紫灰色5RP5/1を呈する。胎土に1mm弱の長石あり、黒色粒わずかにあり。内面回転ナデ、外面上部回転ナデ、下部回転ケズリ。外面の受け部より下は降灰痕多い。TK208に多いがTK23まであるタイプである。5世紀中葉から後葉。

図38-3も須恵器坏身片。3トレンチ出土。残存率10%以下。内外面灰色N6/0、破断面灰白～灰色N7/0～6/0を呈す。胎土に1mm前後の石英若干あり。内外面回転ナデ。陶器編年Ⅱ-3～5にありうる。6世紀後葉～末葉。

図38-4も須恵器坏身片である。2トレンチ出土。残存率10%以下。内外面・破断面とも灰白色N8/0を呈す。胎土に1mm前後の長石あり。外面破片下端に回転ケズリを1条残す他は回転ナデ。外面受け部以下には降灰痕。陶器編年Ⅱ-3～5にありうるもので6世紀後葉～末葉のもの。

図38-5は須恵器坏蓋片。3トレンチ出土。残存率40%、口縁部周10%残存。内外面灰白色5Y7/1、破断面灰白色7.5Y8/1を呈す。胎土に1～3mmの石英あり、1～4mmのチャートあり。外面天井部が回転ケズリの他は回転ナデ。口径・口縁端部の凹面・やや開き気味の口縁部・段差化していない屈曲部の稜線などから見て陶器編年Ⅱ-1、MT15段階に限定できるが、陶器産とは異なる胎土のため、やや古色を引きずった新しい時期になる可能性もある。6世紀前葉か。

図38-6は須恵器坏身片である。残存率15%、口縁部周20%残存。内外面灰色N5/0、破断面灰色

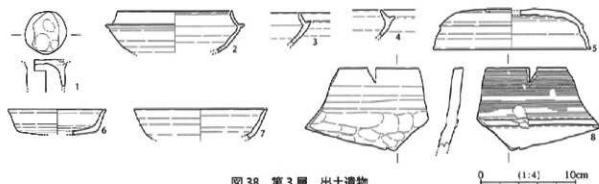


図38 第3層 出土遺物

N6/0を呈す。胎土に粗砂粒は含まず、1mm弱の白色粘土粒・黒色粒あり。内面から外面口縁部は回転ナデ、外面底部は未調整に粗いナデ。径高指数は26だが、口径は10.2cmあるので、飛鳥Ⅱ期に下る可能性は少ない。南河内では飛鳥Ⅰ期が3期に細分できるがその後期に限定できる。その時期の杯Gの器高の低いタイプである。7世紀前葉。これをもって、「難波大道」は7世紀前葉より後に作られたと言える。

この遺物は、12トレンチで第3面の調査が終了した後、第3層を掘削し始める時に筆者自身が掘り出し、その際に、コンポリユートラミナによる第2層などの沈み込み内などではなく、確実に第3層の層内から出土したのを確認しているため、混入の可能性はありえない。

図38-7は須恵器坏身片である。無蓋高坏か、土師器坏形坏であろう。2トレンチ出土。残存率10%、口縁部周25%残存。内外面・破断面とも灰白色N7/0を呈す。胎土に粗砂粒を含まない。内外面回転ナデ。粗砂粒を含まない胎土からは飛鳥時代のもの可能性が高い。口径を見ると飛鳥Ⅱ期に下る可能性は少ない。6世紀末葉から7世紀前葉頃か。

図38-8は須恵器片である。須恵質埴輪かとも考えたが、調整が異なり、焼成も完全に須恵器である。3・4トレンチ出土の破片が接合。外面灰色N5/0、内面と破断面灰色N6/0を呈す。胎土に2mm前後の石英、1mm前後の長石若干あり。外面は、突帯より上はカキ目、突帯直上にカキ目のエビオサエが1個のみ残る。突帯以下はヨコナデ。口縁部端面から突帯より上の内面はヨコナデ、突帯裏面はエビオサエ・ヨコエビナデ、突帯以下はエビオサエか。歪みがなければかなり大きい口径になりそうで、ゆうに径60cmは越えると思われる。貼り付け突帯は非常に低い。突帯より下は若干内弯するようである。二段口縁の臺の可能性もあるか。時期は不明である。

図化遺物だけを見ても、第3層の包含遺物の中心的な時期は古墳時代後期から飛鳥時代初頭と分かる。第4面の186溝出土遺物と照合しても、第3層の形成は古墳時代後期以降と考えられよう。

遺跡内で調査区より南西側に古墳時代後期の集落があるようなので、第3層が耕土であるならば、その集落の耕作地であった可能性が高い。水成堆積層であるなら、飛鳥時代初頭頃の洪水でその集落から遺物が流されてきたのであろう。

いずれにしても「難波大道」直下の遺物包含層として「難波大道」造成の上限を画する資料が得られた意義は大きい。

5. 小結

今回の調査では、「難波大道」が検出され、その後の条里制地割りによる耕地開発の状況も判明したこの第3面の調査が最も大きな成果と言えるだろう。「難波大道」に関しては1980年に発見されて以来、調査成果が積み重ねられてはいるが、今回の調査でも新たな知見が得られ、存続期間に関してもより確かな時期が限定できるようになったと言える。

その調査成果を要約すると以下ようになる。

1) 第3層は水成堆積層か旧耕土か結論の出ない層であるが、大道盛土残存部の下から検出された207畦畔を畦畔と認めうるならば、「難波大道」以前は、第3層を耕土として、正方位を指向しない耕地区画が存在した可能性がある。

2) 第3層包含遺物から、「難波大道」造成時期は飛鳥Ⅰ期後期、7世紀前葉より後であると言える。

また、大道盛土と209土坑にわずかに飛鳥Ⅱ期に限定できそうな遺物があり、飛鳥Ⅲ期以降のものは見られないことからすると飛鳥Ⅱ期に造成された可能性が高いと言える。

3) 大道のラインは過去の調査で発見されたものと同一ライン上にあり、正確に南北を指向する。大和川今池遺跡では最北端の検出位置である。

4) 大道の幅は17mでその両側に深さ40cmほどの側溝を持ち、盛土がなされていた。調査区での盛土は、離れた場所の遺物包含層を客土してある。盛土の厚さは10cm以上、版築は認められないが、かなり叩き締められている。

5) 大道は一定期間管理されず放置されていたようで、浸蝕され202落込が形成される。

6) その後、10世紀中葉頃に大道側溝や落込を埋め、大道盛土を削平して条里制地割りの耕地が開発される。その際、摂津と河内の国境を兼ねる南北坪境畦畔は大道中軸線より0.9m東に寄った位置に作られ、現代まで踏襲されていく。

7) 大道側溝や落込には水成堆積層がほとんど遺存せず、沈下を防ぐために底浚いをしてから埋められたようである。従って大道側溝埋土の包含遺物は大道廃絶後の耕地開発の時期を示す。

また、側溝内の深く掘り込まれた部分は、底浚いの際に粘土採掘をした痕である可能性が高い。

8) 条里制地割りによる耕地開発は調査区内では大道廃絶後10世紀代であるが、大道西側の坪は大道西側溝を基準線として地割された可能性がある。また、周辺の現代に踏襲された地割りから見ると、「難波大道」ライン東西の坪は、調査区付近でも大道の道幅を取り込んだため東西が長い坪になっているようである。つまり周辺の条里制地割りの施行は大道存続期間内になされ、調査地点の耕地化はそれより遅れ、大道廃絶後10世紀代になされたと考えられる。

9) 耕地開発された坪内の地割りは基本的に幅10.9mを基準とした長地型地割りだが、南北方向坪境の東西付近には「難波大道」の幅より大きい幅で、やや変則的な地割りが為されていた。

10) また、長地型地割り内部も高低差によりさらに区画される例もあり、長地型の幅も10.9mでない部分もある。整然とした定型的な条里制地割りとは当初からやや異なる状況であった。調査区内西側の高い部分をかなり削平して耕地開発を行っているが、それでも高低差を変則的な区画で解消していかなければならない状況であったようである。

11) 第2層を耕土としたこの耕地区画は14世紀頃まで存続するが、254落込で分かるように、その間に洪水の被害を受けた事もあったようである。

以上、第3面は大きな変化のあった遺構面と言えるだろう。その中でも上下の包含層から難波大道の存続時期を限定でき、盛土の存在も確認でき、その廃絶の状況もうかがい知れるようになったのは大きな成果であろう。

第6節 第4面

1. 概観 (図39・図版20～22)

第4面は不明な点の多い面である。結局遺構は186・187溝の2本の溝のみであり、それ以外の部分はただ面の高さを記録するのみの調査となった。コンボリュートラミナの影響はあるが、第2面・第3面がそれでも耕土床面として造成された平坦面を把握できるような状況であったのに対し、この面は細かな凹凸が顕著になり、人の手の加わらない自然地形のような状況であった。

1・6・10トレンチでは第3面の時点で大部分が削平を受けているので元の高さは分からないが、2・4・12トレンチの南西側では面の高さは平均T.P.+8.26～8.28mほどあり、3トレンチの北東側は

T.P.+8.21mほど。186・187溝の通る部分は南東側でT.P.+8.0m前後、北西側でT.P.+8.15mほどで、2本の溝は調査区内で低い部分に通っている。

南西側では第4層の堆積は薄く、第5層が後述する木根痕内で陥没した部分に残る程度で、第5層もかなりの部分で見えるような状況であった(図版20)。第4層は洪水堆積層である事が、高い部分での堆積が薄い事からも分かる。

第3層と第4層の層界としての第4面は断面観察でも明確であり、土壌化層の漸移的な層界ではなく、堆積層の単層同士の層界である。第4層の上部に自然に形成された古土壌は残存していないと言え、第3層の性格を考える一つの資料となる。

なお、第4面以下は発達したクラックの痕跡が断面でも平面でも顕著に確認される。平面的に見ると切り合いがあり、数回に分けてクラックが形成されていたようである。コンポリュートラミナによる層の乱れとも合わせ、わずかな第4層包含遺物に混入の不安を残す要素でもある。

2. 遺構(図版21・22)

186溝(図39・41) 幅1.9~3.0m、深さ25~50cmほどの溝である。調査区北東側、3・8・9トレンチを蛇行しながら南東から北西に抜ける。埋土上面と断面で1回の掘り直しが確認され、底部で細く深くなる部分が所々で二股に分かれる形が見られるので、2回の掘り直しが考えられる。

始めは平均的な幅が2.3m、深さ10~20cmほどの広く浅い溝であったようである。図41のB-B'断面では、それを埋めて幅1m弱、深さ30cmほどの断面逆台形の溝を掘り直しているのが分かる。その掘り直した溝に流水があった事を断面図の4のラミナのある粗砂層が示す。

A-A'断面では細い深い部分が人為的に埋められた後、3の層の流水堆積層があり、まだ溝として機能している事が分かる。底部が二股に分かれる部分ではその片方が若干浅く、この3の層のレベルに近いので、これが2回目に掘り直された溝の底部の堆積と思われる。この断面の2の層はその後周辺の土壌が流れ込んで徐々に埋まった状況を示し、その堆積の過程でこの部分では溝の肩が当初の幅広く浅い形に近くまで崩壊したもののようである。その上の1の層はB-B'断面の1の層と共通する。

つまりB-B'断面では、細く深い部分が2回目に掘り直された溝の部分で、A-A'断面の3の層がB-B'断面の4の層と同一層位の可能性がある。

底部のレベルは浅い部分も深い部分も顕著な傾斜は示さない。

8トレンチの南東端から9トレンチにかけて、187溝に南西側肩部を切られているのが確認できた。しかし、埋土で見ても切られているのは幅広く浅い部分だけであるので、掘り直された溝は187溝と並存していた可能性もある。

出土遺物はサヌカイト製石錐1点、弥生時らしき小片5片。土器13片中、甕胴部片らしきもの7片。須恵器坏身片1片である。

図化可能であったのは図40-1の須恵器坏身片のみであった。残存率10%以下、口縁部周15%残存。外面灰色N6/0、内面・破断面灰白色5Y8/1を呈す。胎土に2~1mmの長石、1mm前後の石英・黒色砂粒あり、5mmほどの石英に黒雲母がかみあった岩石片も1個あり。内外面回転ナデ。復元受け部径が15.6cmで、口縁部部に内傾面あるが、それと受け部の形状がシャープさを欠くところから、MT15段階、6世紀前葉のものと思われる。第3層の包含遺物と照合しても、この須恵器片が、溝のおおよその時期を示すものと考えても良いように思われる。溝の存続期間は6世紀代か。

Y=43,910

Y=43,900

Y=43,890

Y=43,880

Y=43,870

Y=43,860

Y=43,850

Y=43,840

Y=43,830

Y=43,820

Y=43,810

Y=43,800

Y=43,790

Y=43,780

X=155,940

X=155,950

X=155,960

X=155,970

X=155,980

X=155,990

X=156,000

X=156,010

X=156,020

X=156,030

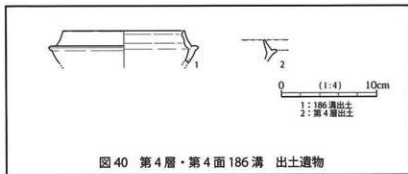


図40 第4層・第4面186溝 出土遺物

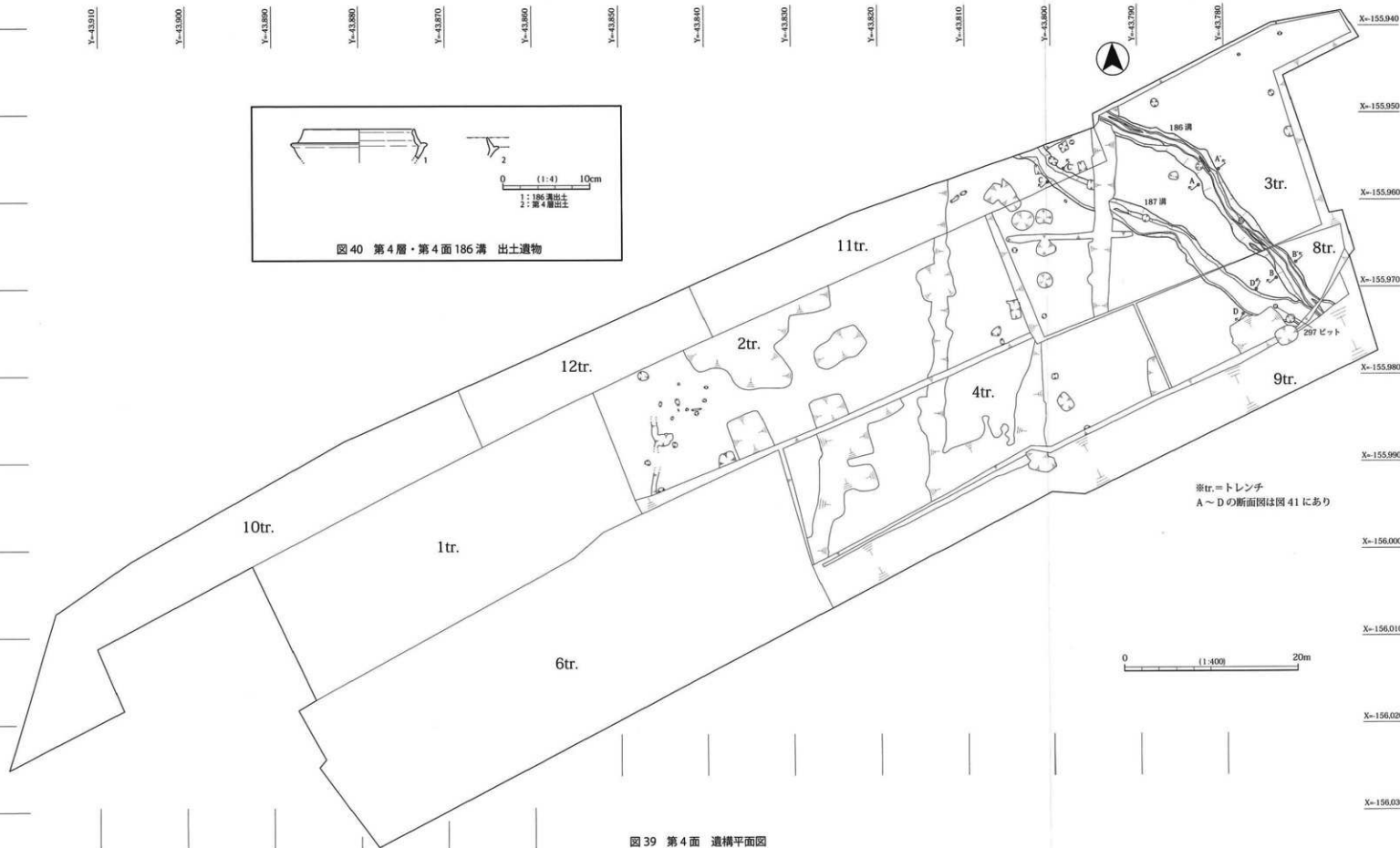


図39 第4面 遺構平面図

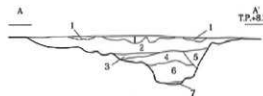
187溝(図39・41) 南東側で186溝の埋土を一部切る事は上述したが、そこから徐々に186と離れるような形で蛇行しながら北西に伸びる溝である。幅1.5～3.1m、平均的な幅は2.5m前後か。深き25cm前後。幅広く浅い皿状の断面形で、埋土に掘り直しの痕跡はない。流水堆積を示すラミナのある砂層が、底部に普遍的にある。底部のレベルに傾斜は見られない。

出土遺物は弥生土器らしきもの4片中、壺胴部2片。甕底部1片。土師器6片中、甕胴部1片、高坏2片。小片ばかりで図化できるものも時期を限定できるものもない。

3. 第4層包含遺物

第4層自体、あまり残りが良くないが、遺物もほとんどいと言ってもよいような状況である。サヌカイト製大型の有蓋石鏝1点。弥生土器らしき小片1片。土師器小片1片。須恵器7片中、3片は内面半擦り消しの甕胴部片3片、坏3片。

図化できたのは図40-2の須恵器坏身片のみである。残存率10%以下。内外面灰白色5Y8/1、破断面灰白色7.5Y7/1を呈す。胎土に1mm前後の長石・石英あり。残る調整は回転ナデのみ。高坏の破片である可能性もあるが、陶色編年Ⅱ-3・4段階、6世紀後葉前後のものとして良いだろう。ただし、小片であり、他と合わせても数量的にも微々たるものなので、コンポリュートラミナやクラックによる混入の可能性も否定できない。これを以て第4面の時期を6世紀後葉以降とするのは危険と思える。



1. 灰灰 10YR5/1 シルト～細砂 第3層
2. 黒 2.5Y2/1～灰灰 2.5Y4/1 粘土～シルト 部分的わずかに用砂あり 内筋にのみラミナあり 止水堆積
3. 灰 5Y5/1 粗砂～細砂 ラミナあり 流水堆積
4. 灰 5Y4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～細砂多し ブロック状 人為的埋土か
5. 灰 5Y4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～細砂多し 明黄褐色 2.5Y6/6 粘土～シルト(第6層)の直径2～4cmのブロックあり 堆めて時空閉鎖域か
6. 1 灰褐色 2.5Y5/4～1 に近い黄 2.5Y6/3 シルト)の直径4～6cmのブロックあり その下に灰 5Y4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～細砂多し 流水時に人為的埋土か
7. 灰 5Y5/1 シルト～細砂 粗砂あり 泥土状 止水堆積砂



1. 灰灰 10YR4/1～灰黄褐色 10YR4/2 シルト 細砂と塊状 Fe 若干あり
2. 灰黄 2.5Y3/4～暗灰黄 2.5Y5/2 砂質土 粗砂～細砂にシルト混じる 下の第6層(明黄褐色 2.5Y6/6 粗砂～細砂)に1が混入
3. 灰黄 10YR5/1 シルト～粘土 塊状 Fe 若干あり 下部に第6層の粗砂若干あり
4. 粘土・黄褐色 10YR5/4 粗砂 Fe+ラミナあり

0 (1:40) 1m
断面位置は図39を参照

185溝 新断面図



1. 灰黄褐色 10YR5/2～暗灰 10YR5/1 シルト～細砂 塊状 Fe・Mn 散りわずかにあり コンポリュートラミナあり 第3層
2. 黒褐色 10YR3/1 シルト Mn 散りわずかにあり
3. 灰灰 10YR4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～細砂若干あり Mn 散り若干あり
4. 灰黄 10YR4/1～黄褐色 10YR3/1 シルト 粗砂混りわずかにあり 塊状 Fe・Mn 散りわずかにあり
5. 4 内に「灰オリーブ 5Y5/2 中砂～細砂」ラミナ状に入る コンポリュートラミナで乱れる



1. 黒褐色 2.5Y3/1～黄褐色 2.5Y4/1 粘質土 シルト主体 粗砂～粗砂含む ブロック状の構造あり 人為的埋土?
2. 灰灰 2.5Y5/1～4/1 中砂～細砂 シルト若干含む ラミナあり
3. 灰灰 10YR4/1 粘質土 中砂～細砂主体 シルト含む コンポリュートラミナあり 第6層の粘土(明黄褐色 10YR6/5)のラミナ状にちぎれたブロック若干あり 下部もコンポリュートの加圧痕、フレア状の構造面あり 2と湿地的な埋土が混入したのか

0 (1:40) 1m
断面位置は図39を参照

187溝 新断面図

図41 第4面 186・187溝 新断面図

4. 小結

186・187溝は1996年度の大和川高水敷の調査でも続きが(その1)の第5面14溝・15溝として報告されている。それらは今回の調査区から西に曲がりながら二つの溝の間は広がっていく。

どちらの溝も水路と思われるが、微地形的に低い部分を通るので、調査区部分では周辺に給水は行えない。南西から北東に伸びる尾根状地形の低い部分を越える導水路と考えられる。水流方向は2本の溝が近接する南東側近くに取水地点があり、北西へ導水していたと考えるのが自然であろう。

2本の溝は186溝が先行するが、掘り直し後、同時併存の可能性も高い。後発の187溝が、北西側でより南側に伸びる事からすれば、給水すべき耕地が南側に拡大していく過程を反映していると思われる。

立地を見れば、開折谷の狭小な谷底平野に耕作地があり、そこに別の開折谷から取水した水を導水していたものである可能性が高い。

問題は溝が掘られた当時の土壌が確認できない事である。溝埋土は第3層が流入したにしては質が異なりすぎ、埋土上面が沈下した部分では第3層がなら質的变化を見せずその凹部に堆積している。

溝埋土から類推すれば、溝が存続していた時には、第3層よりかなり暗色を呈し、中砂～粗砂の粗い粒子をより多く含んだ土壌が存在していたと思われる。

第3層がその土壌を攪拌した耕土とするには、耕作による有機分の消費・溶脱で明色化する事はありえても、溝埋土にも多く含まれる中砂～粗砂が消滅するとは考えられない。

溝が完全に埋まり、何故かその土壌が消滅した後、第3層が成立したと考えざるをえないのである。

ここで、第3層についてもまとめておく。第3層を耕土として考えると以下の事が疑問として残る。

耕作地床面としての平坦面の造成が第4面にまったく見られない。これはまだ自然地形に合わせた小区域画水田などを想定すればよい可能性もある。

耕作痕跡がまったくない。古墳時代に遡る耕作地であれば、唐鋤による鋤溝がない事は考えられるが、鋤跡の痕跡が床面にまったく見られない耕作地は考えにくい、また、第3面は削平を受けているとは言え、207畦畔以外、第3層に伴う畦畔・段差・溝などが痕跡すら認められないのは疑問である。

第3層を森林や草原で自然に出来た古土壌と考えるのは、第4層との層境が明確で、土壌化層のような漸移的变化が見られず、堆積層の単層と認識できるので無理である。

では、水成堆積層と考えると、それも以下の点で疑問がある。

ラミナや級化構造が見られず、生物擾乱や人為的攪拌を受けたような状態である。混濁した状態のまま堆積したと考えられなくもないが、そのような堆積が均質に広範囲に起こりうるかも疑問である。

水成堆積だとすると、混濁状態であったとしても、高低差のある地形にほぼ等しい厚みで堆積するのは考えにくい。また、堆積時の下方浸蝕の痕跡も認められない。

以上のように、第3層の性格は今回の調査では明らかにできないと言わざるをえない。ただ、どちらかと言えば旧耕土である可能性が高いのではないかと考える。

その場合、第4面の溝が埋まり、その周辺にあった、粗砂を含む土壌がほとんど消滅するような浸蝕か人為的削平があった後、やや有機分が少ない土砂を攪拌して第3層が成立したと考えるしかない。凹凸のある地形でも水路や畦畔があまり必要ない畑のような耕作地が候補として考えられるだろう。

第4面の、調査区内には導水路が通っているだけの状況より、格段に耕作地が拡大している事になるが、かえって水路は消滅しているような状況なので、その点でも疑問は残る。

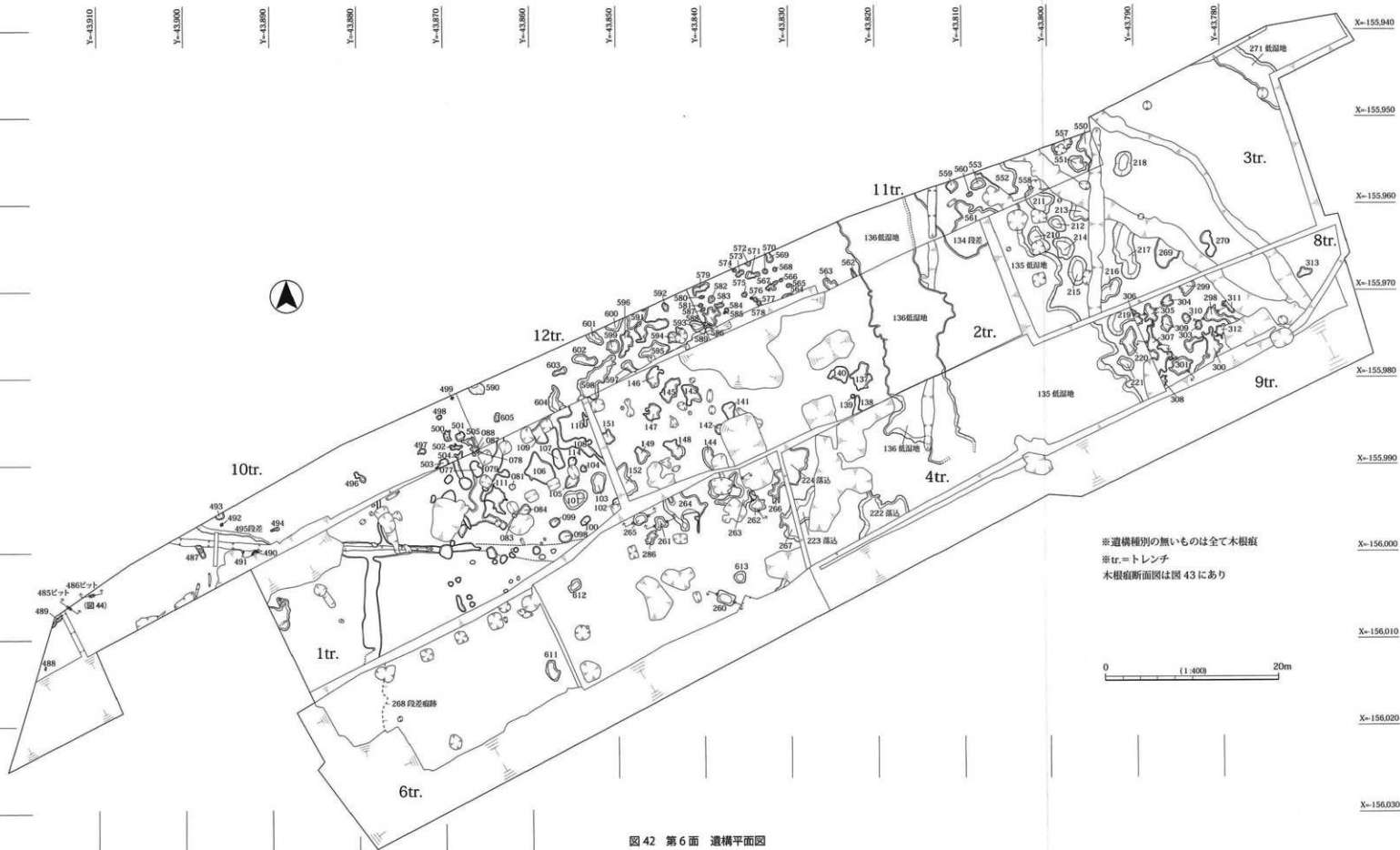


図42 第6面 遺構平面図

第7節 第6面

1. 概観 (図42・図版23～26)

第5層は、黒褐色の森林土壌であり、断面でも土坑状に第5層が第6層に深く入る部分などが確認できたが、その部分でも第5層内では切り込みは確認できなかった。一部第5面を平面的に検出してみたところ、木根痕の中心が陥没してその部分に第4層が堆積しているのは確認できたが、木根痕や遺構などの輪郭は第5面では検出できない事が分かった。

そこで、第5面の平面的調査は省略し、第6面で遺構検出を行なう事にした。結果としては風倒木痕を含む木根痕と考えられる不定形な土坑状・落込状のものの多数と流路状の形をした小規模な低湿地を検出した。人為的遺構の可能性のあるのは10トレンチで検出した485・486ピットのみである。

なお、今回の調査では第5層以下は完全に無遺物であった。

2. 遺構その他

(1) 木根痕 (図42・43・図版26・27)

第6面では、埋土で、ブロック土層と流入土層が斜めに切りあう典型的な風倒木痕も少数あったが、その他に第5層を埋土とした不定形な土坑状・落込状のものが多数検出された。平面形は全て不整形で、細かい凹凸が多く、輪郭付近では第6層のブロックが埋土にかぶるようにある事が多い。

平面形でも鈍行した溝状の形態が放射状に伸びるものも見られ、埋土を掘削すると土坑状の壁面に斜めの穴状に埋土が入っていく形もしばしば確認できた。それらを木の株を中心として広がる根の痕跡と見て、「木根痕」と総称する事にした。

深めの土坑状で数本の枝根の痕跡が壁面に入っていくものや、浅めの落込状で、底面の中央付近が浅く盛上がるものなどが見られる。

多くの場合、第5層による埋土の上面で、中央付近が陥没し、第4層が入り込んでいる(図43-265木根痕など)。木根痕中央に木の株があり、その腐朽と共に陥没が起り、第4層が降下したものと思われる。第5層にクラックが生じ、その中に第4層が降下したものもある(図43-298・305木根痕など)。

ほとんどの場合、断面で木の根自体の痕跡を確認する事はできなかったが、たまに木の根が腐朽して灰色シルトに置換されたと思われる痕跡もあった(図43-307木根痕など)。

長く不定形な溝状に伸びるものの中には浸蝕痕も含まれている可能性はあるが、埋土で区別はつかない。いずれにしても多数の木が生えている森林状態で、森林土壌として第5層が形成されていた事は間違いないであろう。

(2) 低湿地 (図42)

浅い流路状の地形である。2・4・11トレンチで南東から北西に抜ける136低湿地と、そこへ北東から二段落ち状に低くなる135低湿地、3トレンチ北東端付近で検出された271低湿地がある。136低湿地から、135低湿地の一部にかけて、第5層の下に、ラミナのある黒色シルト層が確認された。そのため、緩い流れのある低湿地であったと推測された。271低湿地でもわずかだがラミナ層が確認された。

特徴的なのは低湿地周辺に大きな木根痕が見られない事である。その代わり、周辺から低湿地底部にかけては、直径10～30cmほどの小型の木根痕のようなものが密集し、それらを掘り上げると、細かい凹凸のある地形となる(図版23)。平面形の輪郭が毛羽立つようになっており、コンボリユートラミナの

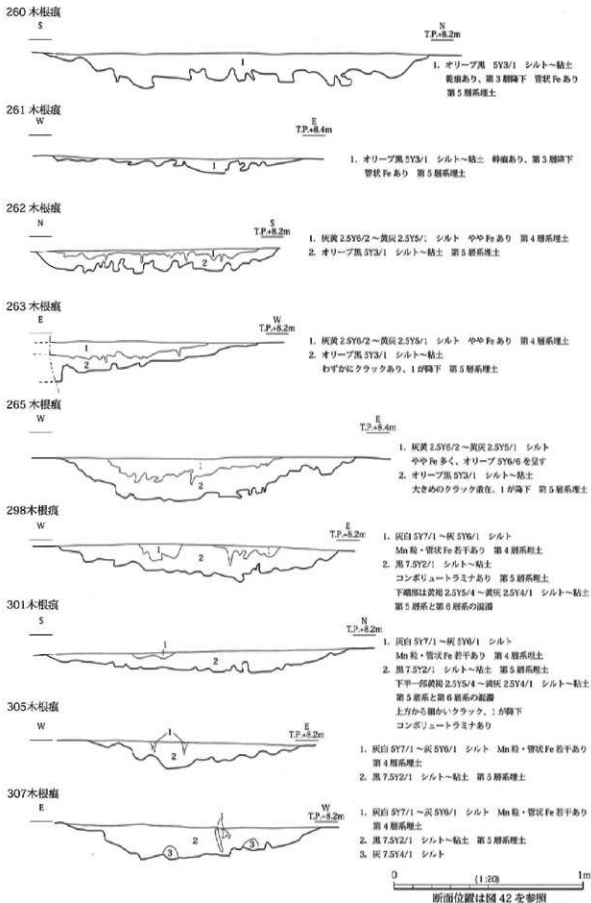


図43 第6面 260・261・262・263・265・298・301・305・307木根痕 断面図

凹凸とも形が異なる(図版26)。木が育たない水際で、株立ちする草本植物の痕跡ではないかと考える。

しかし、最終的にはこれらの低湿地のラミナのある層は第5層に覆われている。第5層が発達していく過程で、森林の中に小規模な低湿地が散在している状態から、その低湿地が埋没し、乾燥化していくという変化があったと思われる。

(3) ビット

485・486ビット(図42・44・図版27) 第6面は無遺物で、このまま遺構もない状態かと思われたが、10トレンチ南西端近く、北西壁沿いで、自然のものとは思えないビットを2個検出した。

自然のものとは思えない理由としては、485ビットが15cm、486ビットが29cmと、検出面からでもしっかりした深さを持ち、壁が立ち、底部が平坦な事、埋土が第5層内に第6層のブロックが入ったもので、そのブロックも埋土内の上下で量的変化がない事などである。

ただし無遺物でもあり、第6面全体の状況を見ても遺構と断言するのは躊躇する。埋土は半層で柱痕などもない。

3. 小結

第6面上に第5層が形成されていく環境が森林状態であったという事が判明したのは大きな成果である。ほとんど人の手が入っていない環境と考える事ができよう。

また、低位段丘平坦面であっても森林の中に小規模な低湿地が散在するという環境も復元でき、それは第5層・第6層上部の花粉・珪藻分析からも裏づけられた。

しかし、無遺物であるので、その時期的な把握が難しい。

确实には第4面の古墳時代後期、6世紀より前と言う他ないが、低湿地が埋没し、乾燥化が進む過程が判明しているので、森林状態はある程度長い期間維持されていたと思われる。また、花粉分析から、この時期は寒冷期を過ぎて照葉樹林が成立するような環境になっていた事が分かるので、縄文時代前期以降と考えて良い。

そう考えると二つだけ見つかったビットも遺構と考えてもおかしくなく、基本的に遺物が出土する可能性のある層位であると言える。

洪水堆積層である第4層が第5層を覆った後、森林は廃絶しており、その洪水が環境変化の契機になったと分かる。おそらくは、沖積平野の堆積が進行し、低位段丘崖を埋没させ、それに伴い低位段丘を開削した谷も堆積が進み、増水時には低位段丘平坦面まで洪水が及ぶような変化が起こったのであろう。

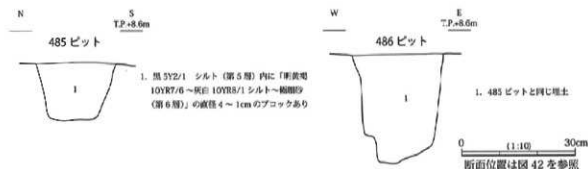


図44 第6面 485・486ビット 断面図

第8節 石器類

1. 概観

今回の調査では、包含層や各種遺構から石器・石核・剥片・チップなどが出土している。しかし、遺物から確認できる最も古い面の時期は第4面の古墳時代後期であり、石器類は全てそれ以降の遺物と共存しているため、製作時期から遡推した遺物である事は明白であった。なので、各遺構・包含層にまとめるのではなく、石器の様相を把握しやすいようにここでまとめて報告する。

図45～47に図化した以外に若干の微細なチップや加工痕跡のないサヌカイトの原石などがある。

2. 遺物の説明 (図45～47)

図45には石鏃と石錐・石核を掲載した。全てサヌカイト製である。

図45-1は凹基式石鏃である。3トレンチ第2層出土。わずかに欠失はあるが重量0.95g。図左面の刃部に細かい剥離多い。やや風化。

図45-2も凹基式石鏃である。4トレンチ第2層出土。重量0.92g。やや風化軽い。

図45-3も凹基式石鏃。2トレンチ第2層出土。重量0.90g。刃部は鋸歯状である。やや風化軽い。

図45-4も凹基式石鏃。3トレンチ第2層出土。欠失多いが重量0.70g。やや風化。

図45-5も凹基式石鏃。8トレンチ第3層出土。重量0.70g。やや風化軽い。図45-1～4に比べると、かなり加工剥離の回数少ない。

図45-6も凹基式石鏃。2トレンチ第3層出土。重量0.92g。やや風化・磨滅。これも剥離回数が少ない。ただし刃部は鋸歯状を呈す。

図45-7は大型の凹基式石鏃。8トレンチ第3層出土。欠失あるが重量2.7g。やや風化軽い。刃部の剥離は非常に細かい。

図45-8は大型の有茎式石鏃。2トレンチ第4層出土。重量2.29g。やや風化軽い。図左面右辺、図右面左辺の刃部の剥離が他方の辺の剥離に比べ細かい。

図45-9も大型の有茎式石鏃。2トレンチ第2層出土。重量5.64g。やや風化、磨滅あり。他の石鏃と比較して格段に分厚く重い。両面に剥片時点での剥離面を残し、それを見ると剥片剥離の打撃面は茎部側にあり縦長剥片であった事が分かる。現存茎部先端付近が打撃面か。

図45-10は大型柳葉形有茎式石鏃。6トレンチ第2層出土。重量3.8g。風化・磨滅強い。図左面中央付近の剥離面が剥片時点のものであるなら、横長剥片を加工した可能性がある。

図45-11は石錐である。8トレンチ第4面186溝出土。重量5.92g。風化やや軽い。打点から左右不均等に剥離した横長剥片の、打撃面を含む2辺を両面から加工し刃部を形成したものである。

図45-12は石核。1トレンチ第2層出土。重量32.8g。やや風化。ネガ面の打撃面は図上辺だが、ポジ面の打撃面は異なる。打撃面同士はポジ面の打撃面の方が先なので、剥片採取途中で打撃面を変更したのではなく、ポジ面の剥離は母材としての板状剥片形成時点のものと思われる。つまりこれは石核である。

図45-13も石核。10トレンチ第2層出土。重量27.3g。やや風化。図右面、ポジ面相当の面は原礫面の残り方から見ても原礫の端に近い。その面の二つの剥離面は打撃面形成前、原礫面除去の剥離か。ネガ面の右上の剥離でその右辺で二つに折れ、廃棄か。

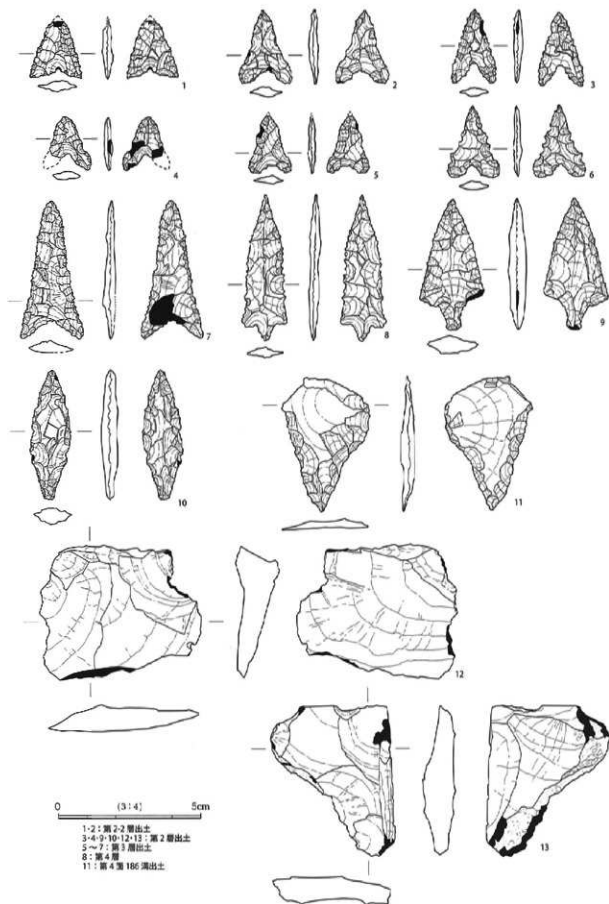


図45 出土石器 その1 (石鏃・石錐・石核)

図46には未製品・二次加工のある剥片を掲載した。全てサヌカイト製。

図46-1はスクレイパー未製品である。1トレンチ第2層出土。重量65.3g。石の目が強く出て、石質悪い。やや風化。図左面右上の辺が折れ、厚く剥離した事故的な剥片を、下辺に刃部を形成してスクレイパーに転用しようとしたか。しかし、下辺もステップ状剥離になり、刃部形成に失敗している。

図46-2もスクレイパー未製品か。2トレンチ第1層出土。重量32.8g。やや風化。図右面、ボジ面の右下辺に原礫面が残る。他3辺は刃部形成。両側の辺は両刃が付くが、原礫面に対向する辺は片刃でその左下半分は角度厚くツブシ状の剥離になる。それが事故的剥離で廃棄か。

図46-3は二次加工のある剥片。おそらく凹基式の石鏃の未製品である。3トレンチ第1層出土。重量1.8g。やや風化。図左面、ネガ面で見ると、上辺が剥片の打撃面である。左下の辺が石鏃の凹基部になるものと思われる。全体にフィッシャーが強く出ており、それで加工を諦めたものか。

図46-4は石鏃の未製品である。10トレンチ第1-2層出土。欠失あるが重量10.4g。やや風化。横長剥片から柳葉形の石鏃を作りかけた未製品と思われる。図右面、ボジ面の刃部形成は左辺の突出した部分を除去し、基部を形成すれば済む状態まで進んでいる。ネガ面左辺の中央よりやや下の剥離面が、ボジ面の一つの剥離面と同時期割れであり、かなり深くえぐるように剥離しているの、これが事故的剥離となって廃棄されたものか。ネガ面左辺鋒部付近には気孔が残存する。

図46-5は二次加工のある剥片である。10トレンチ第1-2層出土。重量9.9g。やや風化。ネガ面とボジ面の打撃面は180度方向が異なる。ネガ面のものは原礫面除去の剥離か。その右上の剥離面は剥離面調整か。ボジ面上辺に並ぶ剥離は打撃などの厚みを除去するものか。その左下辺に刃部が形成される。右下辺にもネガ面から若干の刃部形成。用途的にはスクレイパーか。

図47には剥片・チップを掲載した。ほとんどがサヌカイト製だが、図47-8のみは緑泥片岩製。

図47-1は剥片である。9トレンチ第2面316落込出土。重量7.9g。やや風化軽い。原礫面を打撃面にしており、母材もかなり小さな礫のようである。石鏃を作る程度の大きさはあり、おそらく図右面、ボジ面層当面の原礫面を除去している途中で、その右寄りに縦の亀裂が入ったため廃棄か。

図47-2も剥片。12トレンチ第1-2層出土。重量8.0g。やや風化。剥離時にネガ面右下辺の折れと右の剥離が起きているが、その後左辺に両面から加工を加えている。刃部形成途中で廃棄か。

図47-3も剥片。2トレンチ第1層出土。重量13.3g。風化強い。上辺は折れであり、打撃面は残っていない。図左面、ネガ面の左の面は石の目ばかり目立ち、リング・フィッシャーは見えない。

図47-4も剥片。10トレンチ第3面431哇畔盛土出土。重量8.1g。風化軽い。わずかに残る原礫面を見ると、母材もほぼ同じ幅の小さな礫のようである。ネガ面上辺に二次加工を始めた時に、下辺の折れ・割れが生じ廃棄か。

図47-5も剥片。2トレンチ第1層出土。重量14.9g。風化強い。ネガ面上左の剥離面は剥離面調整か。その左辺の原礫面沿いは厚く、下辺から右下辺は薄くなり折れる。その不均等な剥離で廃棄か。

図47-6は剥片。11トレンチ第3層出土。重量20.2g。やや風化軽い。原礫面を打撃面としている。母材から剥片を取る前の原礫面除去のチップの可能性も高いが、母材も縦長のようで、これと同じようなサイズの縦長剥片を取ろうとしていた可能性もある。であるなら、これ自体も原礫面の気孔の発達弱ければ剥片素材として使用できたはずである。

図47-7はチップ。1トレンチ第1層出土。重量1.8g。やや風化。剥離面の厚い部分を除去する調整のチップか。

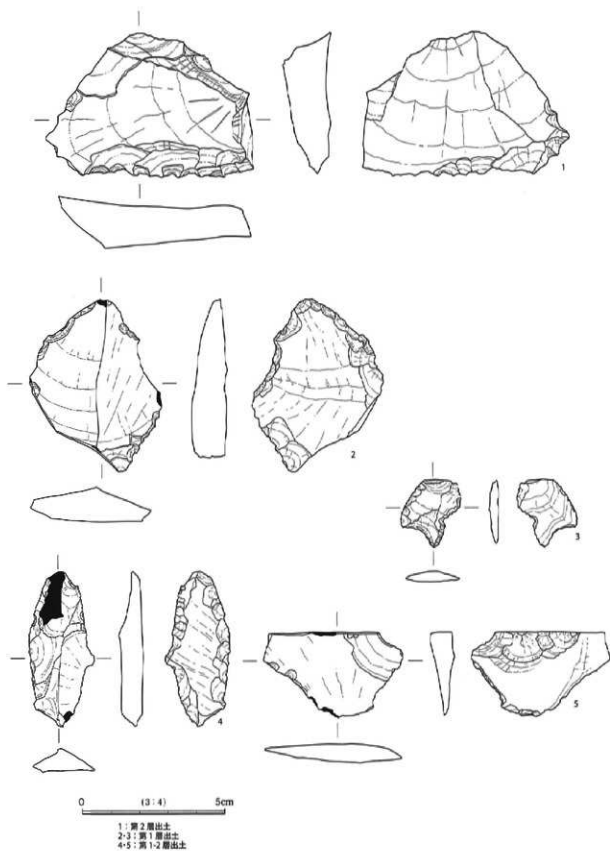


図46 出土石器 その2 (未製品・二次加工あり)

図47-8は緑泥片岩のチップか。10トレンチ耕土系第1-1層出土。重量8.6g。やや風化。剥離の仕方はよく理解できないが、石の質から考えれば、石彫り製作過程のチップであろう。

3. 小結

今回の調査で出土した石器類は製品・剥片・チップ・石核が揃うが、遊離遺物であり、各々の製作時期が不明であるので、一括性のある遺物群としては扱えない。

しかし、後期旧石器の技法を示すものではなく、縄文時代から弥生時代のものとは言えるであろう。

石鏃は、使用痕らしき鋒部の欠失が見られるものは図45-5のみ、図45-9の磨滅も使用痕かもしれないが、他は未使用の可能性高い。

図45-7～10の大型の石鏃は弥生時代に属するものと思われるし、小型のものの中には縄文時代のものもあろう。但し、図46-3・4のように小型も大型も未製品が存在する。また剥片には図47-1・4のように小型の石鏃を作る以外は考えにくいサイズのものもある。

それらを総合して考えれば、弥生時代の、石鏃を中心とした石器製作場が存在していた可能性は高いと言えるだろう。それも極めて小さな礫を母材とした生産が窺える。一括大量生産をする製作場ではなく、携帯に便利な母材を使用した極めて小規模な製作場が想定される。

石鏃以外の用途別の器種としては石錐とスクレイパーが認められるだけで極めて少ないと言える。また、磨製石器が1点も確認できず、石彫りに関連すると思われるチップが1点のみという状態は、農耕関連の石器が皆無に近いと言える。

総じて言えば、今回の調査で出土した石器の様相は、縄文時代から弥生時代にかけてのもので、弥生時代になっても、現地生産のような小規模な石器製作を行った、狩猟場の様相を示していると言える。

第5章 自然科学分析

第1節 分析の目的と資料の採取

1. 立地環境と第6・7層の堆積時期・環境の解明

大和川今池遺跡は低位段丘平坦面から沖積平野にまたがる遺跡ではあるが、低位段丘崖が埋没しているため、その境界線は判然としない。

調査区内でも、分厚い黄褐色粘土層である第6層がいかなる時期に堆積した層で、遺物包含の可能性があるのかが不明であった。そのため、2トレンチの一部で下層確認のためのトレンチを下げ、旧森林土壌である第7層を確認したが（図版1）、その部分では第6層以下は無遺物であり、火山灰なども検出されず、堆積時期は不明なままであった。また、層厚1mに達しながら上下方向にほとんど粒子の粗密がない第6層の堆積する環境も不明であった。

時期の確定に関しては、堆積当時の植生により、冷涼な気候か温暖な気候かが判明すれば推測できると考えた。

冷涼な気候であるならヴェルム氷期である更新統上部の堆積で、低位段丘構成層上部、後期旧石器時代に当たる。温暖な気候とすれば、縄文海進ピーク付近から以降で、沖積平野の堆積、縄文時代前期

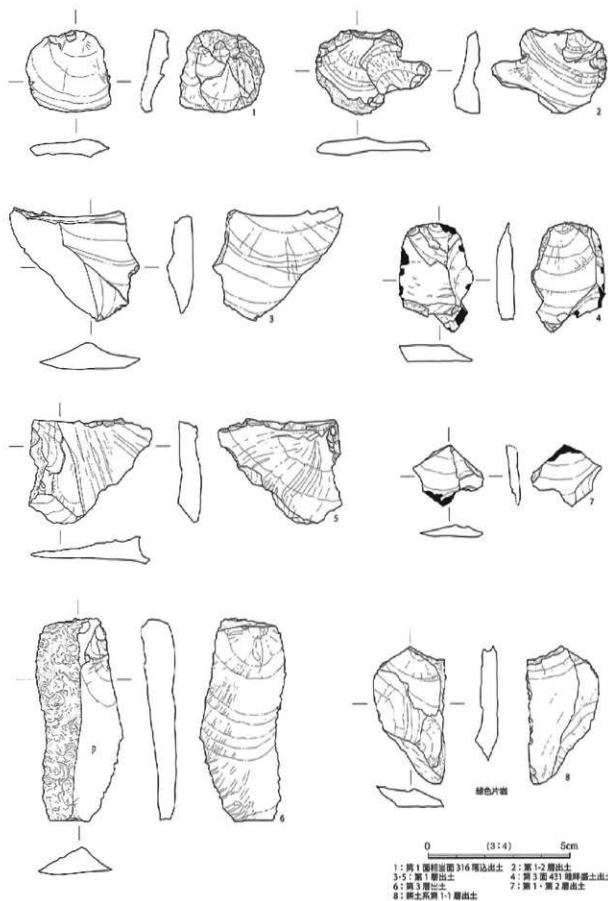


図 47 出土石器 その3 (剥片・チップ)

以降に相当すると判断できる。

それには科学的分析として花粉分析が有効であろうと考えた。

また堆積環境、水中か陸上か、一挙に堆積したのかどうかなどには建築分析が最適と考えた。

そこで、第6層・第7層のサンプルを採取した(図6・48)。第6層は分厚いだけでなく、上部はコンクリートラミナで変形し、かつ、クラックが発達しているの、肉眼で確認できるクラックは避けながらも、層内で上中下の3ヶ所でサンプルを採取した。

2. 第3層の性格の解明

その後、調査が進展するにつれ、第3層が旧耕土であるのか水成堆積層であるのかという問題が、発掘調査ではどちらの場合も矛盾があり解明できないと分かってきた。

そのため、遺構により確実に水田耕土であると分かる第2層を耕土の典型例とし、一部でラミナも認められ、有機分が少なく、級化構造があるのでほぼ水成堆積であるのが確実な第4層を水成堆積層の典型としてその両者と比較して判断の一助とするため、第2～4層のサンプルを8トレンチ南東壁断面で採取した(図48)。また、第6・7層との比較のため第5層のサンプルも必要と考えたが、その時点で断面で残りの良い第5層が残存していなかったため、8トレンチ平面で第5層のサンプルを採取した。

これらもその目的のためには花粉・建築分析が最適と考えた。

以上、サンプルは第2層・第3層・第4層・第5層・第6層上部・第6層中部・第6層下部・第7層の8点である。いずれも露出した土層表面を削り落とした後、水洗した道具で土塊を採取し、すぐにラップでくるみ、ビニール袋に収納して密封した。

分析に関しては(株)古環境研究所に依頼した。

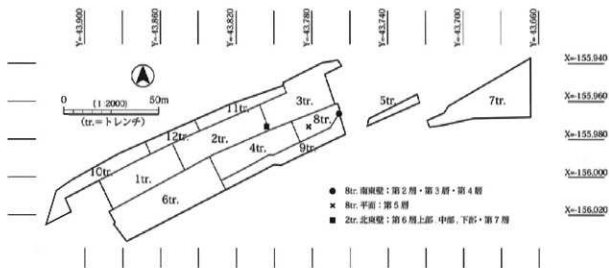


図48 土壌サンプル採取地点

第2節 自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、8 tr.南東壁から採取された第2層（試料1）～第4層（試料3）の3点、8 tr.平面から採取された第5層（試料4）の1点、2 tr.東壁から採取された第6層上部（試料5）～第7層（試料8）の4点の計8点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）
- 6) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本の対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉24、樹木花粉と草本花粉を含むもの3、草本花粉18、シダ植物胞子2形態の計47である。これらの学名と和名および粒数を表7に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、

周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図49、図50に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、トウヒ属、ツガ属、マツ属複雑管束亜属、マツ属単雄管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤナギ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、カエデ属、ハイノキ属、モクセイ科、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

バラ科、ゴマノハグサ科、ニワトコ属-ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属-ミクリ属、オモダカ属、イネ科、カヤツリグサ科、クダ属サナエタデ節、ソバ属、ナデシコ科、ユキノシタ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、キカシグサ属、アリノトウグサ属-フサモ属、セリ亜科、セリ科近似種、ミツガシワ、シソ科近似種、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

それぞれの地点において、花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

1) 8 tr.南東壁

・第2層 (試料1)

樹木花粉が約50%を占める。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属とコナラ属アカガシ亜属が優占し、スギ、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダなどが低率に出現する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属を主に、セリ亜科、セリ科近似種、カヤツリグサ科、オモダカ属などが出現する。

・第3層 (試料2)

樹木花粉が約60%を占める。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属が優占し、スギ、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダなどが低率に出現する。草本花粉ではヨモギ属、イネ科、セリ亜科、セリ科近似種、ユキノシタ科、カヤツリグサ科などが出現する。

・第4層 (試料3)

花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されない。草本花粉のソバ属がわずかに認められた。

2) 8 tr.平面採取 (第5層 (試料4))

花粉密度が極めて低く、ほとんど検出されず、わずかに樹木花粉のコナラ属アカガシ亜属、草本花粉のオモダカ属、イネ科が出現する。

3) 2 tr.東壁

・第6層 (試料5~7)

第6層上部 (試料5)、第6層中部 (試料6) は花粉密度が極めて低く、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ、イネ科などがわずかに検出される。

第6層下部 (試料7) は花粉密度が低い、樹木花粉と草本花粉は同程度の比率を占める。樹木花粉

ではハンノキ属優占し、マツ属複雑管束亜属、ツガ属、トウヒ属、ニレ属-ケヤキ、クマシデ属-アサダが伴われる。草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科が優占し、イネ科は集塊が認められた。

・第7層（試料8）

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、約65%を占める。樹木花粉ではハンノキ属が卓越し、ハシバミ属、ニレ属-ケヤキなどが伴われる。草本花粉ではセリ科近似種、シソ科近似種、イネ科、カヤツリグサ科などが低率に出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

それぞれの地点において、層毎に花粉群集の特徴の検討および植生の復元を行う。

(1) 8 tr.南東壁

1) 第2層（試料1）

樹木花粉の占める割合は少なくなく、周辺にはコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹とコナラ属アカガシ亜属の照葉樹を主要とする森林が分布していた。カバノキ属、クマシデ属-アサダ、ハシバミ属などもその構成要素であった。この森林は花粉群集の変遷の中で解釈しなければ位置付けられないが、立地と時期から、コナラとクスギやアラカシの暖温帯域の二次林と推定される。やや遠方の地域の山地にはスギ林も分布していたとみられる。堆積地および周囲は、イネ科、ヨモギ属をはじめセリ亜科、セリ科近似種、カヤツリグサ科、オモダカ属などの草本が分布し、湿潤からやや乾燥した環境が示唆される。イネ属型が検出されていないため明らかな水田とは示唆しがたいが、特徴的に水田雑草の性格を持つオモダカ属が検出され、またイネ科が多い。イネ属型が検出されないのは、水田の分布が小さかったか耕作形態によって雑草が多く反映されたなどが考えられる。

2) 第3層（試料2）

周辺はやや森林が多く、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹とコナラ属アカガシ亜属などの照葉樹を主要構成要素とする森林が分布していたと考えられ、ハンノキ属、クマシデ属-アサダなどもその構成要素であった。この森林は、この森林より下部からの花粉群集の変遷の中で解釈しなければ位置付けられないが、立地と時期からコナラとクスギやアラカシの暖温帯域の二次林と推定される。やや遠方の地域の山地にはスギ林も分布していたとみられる。堆積地および周囲には、ヨモギ属をはじめ、イネ科、ユキノシタ科、セリ亜科、セリ科近似種、カヤツリグサ科などが多様に生育し、やや湿潤からやや乾燥した環境が推定される。

3) 第4層（試料3）

花粉密度が極めて低く、淘汰により花粉などの微細な有機質遺体が堆積されなかったと考えられる。ソバ属が検出され、この層単での栽培が示唆される。

(2) 8 tr.平面採取（第5層（試料4））

花粉密度が極めて低い。その原因としては、乾燥や乾湿を繰り返す堆積環境や土壌生成による有機質の分解、淘汰により分別、堆積速度の速さなどが考えられる。本層では、薬理等水成の堆積構造は観察されておらず埋没土壌とみなされ、低湿ではない環境下の土壌生成による分解が考えられる。検出された分類群は極めて少ないが、樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属が検出され、照葉樹林下の森林土壌の可能性が考えられる。草本花粉では、オモダカ属とイネ科が検出され、湿地になった時期があったか近隣に湿地の環境が分布していたと推定される。

(3) 2 tr.東壁

1) 第6層 (試料5~7)

・第6層中部 (試料6)、第6層上部 (試料5)

花粉密度が極めて低く、花粉などの有機質遺体が分解されるような乾燥を繰り返す堆積環境や堆積時間が速かったことなどが考えられる。わずかではあるが、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ、イネ科が検出され、これらを要素とする植生の分布が推定される。

・第6層下部 (試料7)

樹木花粉はハンノキ属が優占するが、マツ属複雑管東亜属、ツガ属、トウヒ属の針葉樹、ニレ属-ケヤキ、クマシテ属-アサダ、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属、ブナ属の落葉広葉樹で構成される。これら樹木花粉群集には、トウヒ属の寒冷な亜高山帯 (亜寒帯) の常緑針葉樹林要素、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属、ブナ属の冷温帯落葉広葉樹林要素が含まれ、明らかな暖温帯照葉樹林の構成要素は伴わない。このことから第6層下部 (試料7) の樹木花粉群集は、冷温帯落葉広葉樹林から亜高山帯 (亜寒帯) 常緑針葉樹林の要素であり、最終寒冷期の植生・環境を示し、第6層が更新統上部であることが示唆される。周辺の植生はハンノキ属の湿地林とイネ科とカヤツリグサ科の生育する湿地ないし湿原の分布が示唆される。

2) 第7層 (試料8)

優占するハンノキ属は湿地林を形成するハンノキが考えられ、堆積地は湿地の環境が示唆され、ハシバミ属、ニレ属-ケヤキなども生育していた。草本がやや少なく、やや湿潤からやや乾燥した環境が推定され、セリ科近似種、シソ科近似種、イネ科、カヤツリグサ科が生育していた。

6. まとめ

大和川今池遺跡07-1のそれぞれの地点において、層毎に花粉群集の特徴の検討および植生の復元を行った。

8 tr.南東壁の第2層 (試料1) では、堆積地と周辺にはイネ科、ヨモギ属を主とし水田雑草の性格を持つオモダカ属が分布し、周辺にコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹とコナラ属アカガシ亜属の照葉樹を主とする暖温帯域の二次林の分布が推定された。第3層 (試料2) では、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹とコナラ属アカガシ亜属などの照葉樹を主要構成要素とする暖温帯域の二次林の分布、堆積地および周辺にはヨモギ属をはじめ、イネ科、ユキノシタ科、セリ科、セリ科近似種などが多様に生育するやや湿潤からやや乾燥した草地が推定された。第4層 (試料3) は花粉密度が極めて低いが、この層準の時期でのソバ属の栽培が示唆された。

8 tr.平面の第5層 (試料4) では、花粉密度が極めて低く、土壌生成による分解が考えられた。

2 tr.東壁の第6層では、下部 (試料7) の花粉群集には寒冷な亜高山帯 (亜寒帯) の常緑針葉樹林要素のトウヒ属、冷温帯落葉広葉樹林要素のカバノキ属、コナラ属コナラ亜属、ブナ属が含まれ、明らかな暖温帯照葉樹林の構成要素は伴わないことから、更新統上部であることが示唆された。第6層下部 (試料7) と第7層 (試料8) ではハンノキ属の湿地林が分布し、第6層下部 (試料7) ではイネ科やカヤツリグサ科の生育する湿地ないし湿原が拡大した。

参考文献

- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表7 大和川今迄遺跡07-11における花粉分析結果

学名	分類群	和名	8 tr. 南東壁			8 tr. 平面		2 tr. 東壁		
			2層 (1)	3層 (2)	4層 (3)	5層 (4)	6層上部 (5)	6層中部 (6)	5層下部 (7)	7層 (8)
Arboreal pollen			樹木花粉							
<i>Podocarpus</i>		マキ属			1					
<i>Abies</i>		モミ属							1	1
<i>Picea</i>		トウヒ属							7	
<i>Tsuga</i>		ツガ属			1				12	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>		マツ属楡組曹東亜属							19	9
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylois</i>		マツ属単組曹東亜属							1	1
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ	14	4						
<i>Sciadopitys verticillata</i>		コウヤマキ			1					
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae		イチイ科・ノスガヤ科・ヒノキ科	3							2
<i>Salix</i>		ヤナギ属							1	7
<i>Pterocarya rhoifolia</i>		サワグルミ							1	1
<i>Alnus</i>		ハンノキ属	1	4	1			3	9	92
<i>Betula</i>		カバノキ属	5	1						5
<i>Corylus</i>		ハシバミ属	3						1	10
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>		クマシデ属・アサダ	5	2						8
<i>Fagus</i>		ブナ属	2					1		1
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属	54	40						4
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>		コナラ属アカガシ亜属	42	26	2	1				3
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>		ニレ属・ウケキ	1		1			1	1	25
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>		エノキ属・ムクノキ			1					1
<i>Acer</i>		カエデ属			1					2
<i>Symplocos</i>		ハイノキ属								1
Oleaceae		モクセイ科								1
<i>Fraxinus</i>		トネリコ属								2
Arboreal・Nonarboreal pollen			樹木・草本花粉							
Rosaceae		バラ科			1					3
Scrophulariaceae		ゴマノハグサ科	1							
<i>Sambucus-Fibremus</i>		ニフコ属・ガマズミ属								1
Nonarboreal pollen			草本花粉							
<i>Typha-Sparganium</i>		ガマ属・ミクリ属			1					1
<i>Sagittaria</i>		オモダカ属	4			1				1
Gramineae		イネ科	46	9	1	1	1	4	77	31
Cyperaceae		カヤツリグサ科	5	3						83
<i>Polygonum</i> sect. <i>Pertusaria</i>		タデ属サネタデ亜属								2
<i>Fagopyrum</i>		ソバ属			1					
Caryophyllaceae		ナデシコ科								1
Saxifragaceae		スキシタ科	1	6						16
<i>Sanguisorba</i>		ワレモコウ属								8
<i>Impatiens</i>		ツリフネソウ属								1
<i>Rotala</i>		キカシグサ属	1							
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>		アリノトウグサ属・フサモ属								1
Apioidae		セリ属科	14	7						4
Apioidae cf.		セリ科近似種	10	7						3
<i>Mentha</i> cf.		ミツガシワ								2
Labiatae cf.		シソ科近似種	1							45
Asteroidae		キク属科			1			1		2
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	41	14				1	2	5
Fern spore			シダ植物孢子							
Monolete type spore		単条溝孢子		5	1			1	14	61
Trilete type spore		三条溝孢子	4	1						2
Arboreal pollen		樹木花粉	130	82	4	1	5	11	192	428
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	1	1	0	0	0	0	1	3
Nonarboreal pollen		草本花粉	123	47	3	2	2	5	174	225
Total pollen		花粉総数	254	130	7	3	7	16	367	656
Pollen frequencies of 1cm ³		試料1cm ³ 中の花粉密度	1.7	9.0	0.3	2.1	0.4	1.2	6.9	3.2
			$\times 10^3$	$\times 10^2$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10$	$\times 10^2$	$\times 10^3$	$\times 10^4$
Unknown pollen		未同定花粉	16	11	2	0	0	1	9	21
Fern spore		シダ植物孢子	4	6	1	0	1	14	91	23
Helminth eggs		寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion remains		明らかな消化残滓	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

II. 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

2. 試料

分析試料は、8 tr.南東壁から採取された第2層（試料1）～第4層（試料3）の3点、8 tr.平面から採取された第5層（試料4）の1点、2 tr.東壁から採取された第6層上部（試料5）～第7層（試料8）の4点の計8点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

3. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1 cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（5～6回）
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果

(1) 分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）2分類群、真-中塩性種（海-汽水生種）2分類群、中-貧塩性種（汽-淡水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）35分類群である。表8に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図51に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe (1974) や渡辺 (2005) 等の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986) により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉 (1988) により、淡水生種は安藤 (1990) による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下に主要な分類群を記載する。

[真塩性種]

Actinocyclus spp.

[真-中塩性種]

Cyclotella striata-stylorum

[中-貧塩性種]

Rhopalodia gibberula

[貧塩性種]

Amphora copulata, *Aulacoseira ambigua*, *Aulacoseira granulata*, *Aulacoseira* spp., *Caloneis bacillum*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia circumborealis*, *Eunotia implicata*, *Eunotia minor*, *Eunotia pectinalis*, *Eunotia praeurupta*, *Eunotia pseudoserra*, *Eunotia serra*, *Eunotia* spp., *Fragilaria construens*, *Frustulia rhomboides* v. *saxonica*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Neidium ampliatum*, *Neidium* spp., *Pinnularia angusta*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia gibba*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia schroederii*, *Pinnularia* spp., *Pinnularia viridis*, *Stauroneis phoenicenteron*, *Stephanodiscus* sp.1, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

(2) 珪藻群集の特徴

1) 8 tr.南東壁

・第2層 (試料1)

珪藻密度が低く、好止水性種の *Aulacoseira ambigua* などがわずかに出現する。

・第3層 (試料2)

珪藻密度が低く、好止水性種ないし流水不定性種の *Amphora copulata*, *Aulacoseira ambigua*, *Stauroneis phoenicenteron* などがわずかに出現する。

・第4層 (試料3)

珪藻は検出されない。

2) 8 tr.平面採取 (第5層 (試料4))

珪藻密度が極めて低く、わずかに破片が認められる。

3) 2 tr.東壁

・第6層 (試料5～7)

第6層上部 (試料5) では、貧塩性種 (淡水生種) がほとんどで、わずかに中・貧塩性種 (汽・淡水生種) の *Rhopalodia gibberula* が出現する。貧塩性種 (淡水生種) では真・好止水性種と流水不定性種それぞれ約47%～42%を占め、陸生珪藻、好流水性種と続く。真・好止水性種で沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor* が優占種で、*Eunotia praeurupta*, *Pinnularia viridis*, *Gomphonema gracile* などが伴われる。好止水性種では *Pinnularia microstauron*, *Neidium ampliatum*, *Eunotia bilunaris*, *Eunotia serra* などが出現する。流水不定性種では *Eunotia* spp., *Eunotia circumborealis*, *Caloneis bacillum*, *Eunotia pseudoserra* などが出現する。陸生珪藻では *Navicula mutica*、好流水性種では *Gomphonema parvulum* などが出現する。

第6層中部 (試料6)、第6層下部 (試料7) では、珪藻密度が低く、第6層中部 (試料6) では湖沼浮遊性環境指標種群の *Aulacoseira granulata*、第6層下部 (試料7) では陸生珪藻の *Navicula mutica* などがわずかに出現する。またいずれの試料からも沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、真塩性種の *Actinocyclus* spp.、真-中塩性種の *Cyclotella striata-stylorum* などがわずかに認められた。

・第7層 (試料8)

珪藻密度が低く、真・好止水性種の *Aulacoseira* spp.、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、陸生珪藻の *Navicula mutica* などがわずかに出現する。真-中塩性種の *Cyclotella striata-stylorum* なども

極わずかに認められた。

5. 珪藻分析から推定される堆積環境

(1) 8 tr.南東壁

1) 第2層 (試料1)

珪藻密度が低く、珪藻の生育できない乾燥した環境か不安定な環境が示唆される。好止水性種の *Aulacoseira ambigua* などがわずかに出現し、滞水する時期が短期間あった可能性がある。

2) 第3層 (試料2)

Amphora copulata, *Aulacoseira ambigua*, *Stauroneis phoenicenteron* など好止水性種ないし流水不定性種がわずかに出現することから、珪藻の生育しにくいやや乾燥した環境か不安定な環境が示唆されるが、滞水することもあったと考えられる。

3) 第4層 (試料3)

珪藻は検出されない。水流による淘汰および堆積速度が速かったため、珪藻が堆積されなかったと考えられる。

(2) 8 tr.平面採取 (第5層 (試料4))

珪藻密度が極めて低く、珪藻の生育しにくいやや乾燥した環境が推定される。

(3) 2 tr.東壁

1) 第6層

第6層上部 (試料5) では、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor* が優占種で、真・好止水性種と流水不定性種で占められる。水生植物が生育する沼沢湿地が示唆されるが、流水不定性種が多く、珪藻種も多いため、やや不安定さが考えられる。好流水性種はほとんど出現せず、沼沢や湿原の縁辺の不安定な水域から湿地であったと推定される。

第6層中部 (試料6)、第6層下部 (試料7) は、珪藻密度が低く、乾燥した環境か不安定な環境が示唆される。湖沼浮遊性環境指標種群の *Aulacoseira granulata*、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、陸生珪藻の *Navicula mutica* などが検出され、沼沢や湿原の縁辺の不安定な環境が推定される。

・第7層 (試料8)

珪藻密度が低く、真・好止水性種の *Aulacoseira* spp.、沼沢湿地付着生環境指標種群の *Eunotia minor*、陸生珪藻の *Navicula mutica* などがわずかに検出されることから、沼沢や湿原の縁辺の不安定な環境が推定される。なお、真-中塩性種の *Cyclotella striata-stylorum* などは移動化石と考えられる。

6. まとめ

大和川今池遺跡 (その2) における珪藻分析の結果から、以下の環境が推定された。

8 tr.南東壁の第2層 (試料1) と第3層 (試料2) は、珪藻の生育しにくい乾燥した環境や不安定な環境が示唆された。第4層 (試料3) は珪藻が検出されず、水流による淘汰および堆積速度が速かったと推定された。

8 tr.平面の第5層 (試料4) は、珪藻の生育しにくいやや乾燥した環境が推定された。

2 tr.東壁の第6層は、上部(試料5)では水生植物が生育する沼沢湿地ないし湿原が示唆され、中部(試料6)と下部(試料7)は沼沢や湿原の縁辺の不安定な環境が推定されたことから、第6層は沼沢湿地ないし湿原およびその縁辺の環境であったと示唆された。第7層(試料8)においても同様の環境が推定された。

参考文献

- Hustedt,F.(1937_1938)Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol.Suppl.15,p.131_506.
- Lowc,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh_water diatoms. 333p. National Environmental Reserch.Center.
- K. Krammer · H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae · 1 - 4.
- Asai,K.&Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom.10,p.35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能. 内田老鶴圃, pp.666.

表8 大和川今池遺跡07-1における珪藻分析結果

分類群	8 tr.南東壁			8 tr.平面		2 tr.東壁		
	2層 (1)	3層 (2)	4層 (3)	5層 (4)	5層上部 (5)	6層中部 (6)	6層下部 (7)	7層 (8)
貧塩性種（淡水生種）								
<i>Amphora copulata</i>		3						
<i>Aulacoseira ambigua</i>	2	2					2	3
<i>Aulacoseira granulata</i>						8		
<i>Aulacoseira</i> spp.		1			1	3	2	8
<i>Caloneis bacillum</i>					3			
<i>Cymbella amphioxys</i>		1						
<i>Eunotia bilunaris</i>					3			
<i>Eunotia circumborealis</i>					5			
<i>Eunotia implicata</i>					1			
<i>Eunotia minor</i>					27	1	2	10
<i>Eunotia pectinatis</i>							1	
<i>Eunotia praerupta</i>					9		2	2
<i>Eunotia pseudoserica</i>					3			
<i>Eunotia serica</i>					2			
<i>Eunotia</i> spp.		1			9		1	
<i>Fragilaria construens</i>								2
<i>Frustulia rhomboides</i> v. <i>saxonicum</i>					1			
<i>Gomphonema gracile</i>					3			
<i>Gomphonema nitidum</i>					1			
<i>Gomphonema parvulum</i>					2			
<i>Gomphonema</i> spp.					1	1		1
<i>Hantzschia amphioxys</i>							1	1
<i>Navicula mutica</i>					9		11	3
<i>Neidium ampliatum</i>					4			
<i>Neidium</i> spp.					2			
<i>Pinnularia angusta</i>					1			
<i>Pinnularia borealis</i>								1
<i>Pinnularia gibba</i>					1			
<i>Pinnularia microstauron</i>					5			
<i>Pinnularia schroederii</i>							1	
<i>Pinnularia</i> spp.					2		1	
<i>Pinnularia viridis</i>					4			
<i>Saxtronella phoenicenteron</i>		3						
<i>Stephanodiscus</i> sp.1						3		2
<i>Tabellaria fenestrata-flocculata</i>						1		1
中一貧塩性種（汽水-淡水生種）								
<i>Rhopalodia gibberula</i>					1			
真一中塩性種（海-汽水生種）								
<i>Cocconeis scutellum</i>	1							
<i>Cyclotella striata-stylorum</i>						2	2	1
真塩性種（海水生種）								
<i>Actinocyclus</i> spp.						3	1	
<i>Grammatophora macilentia</i>	1							
合計	4	11	0	0	101	21	27	35
未同定	0	1	0	0	2	4	0	2
破片	16	93	0	2	148	16	13	31
試料 1 cm ² 中の殻数密度	1.2	3.6	0.0	0.0	4.4	8.0	7.2	1.1
	$\times 10^3$	$\times 10^3$			$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^4$
壳形殻保存率（%）	-	-	-	-	41.0	-	-	-

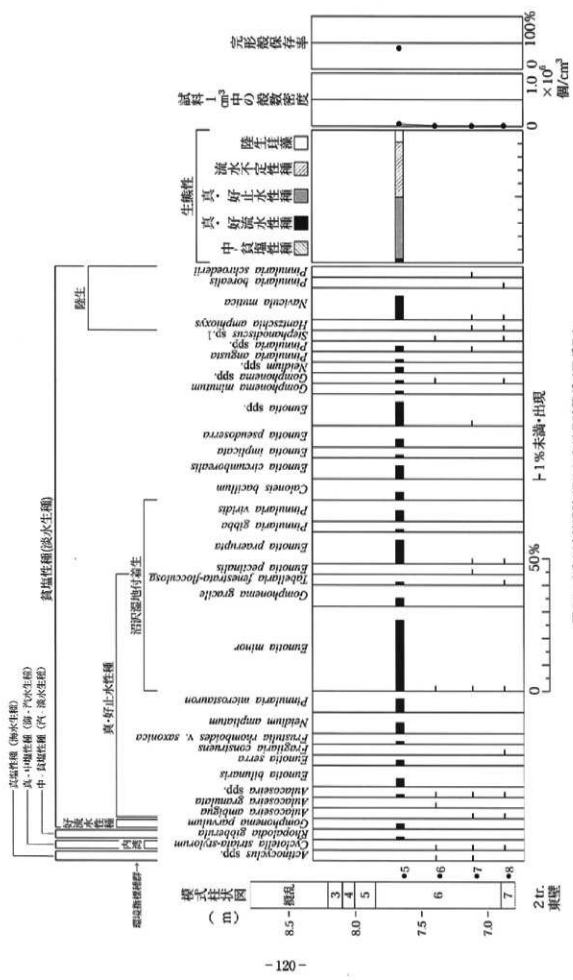


図 51 大和川今池運路 07-1 における硅藻ダイアグラム

第3節 分析結果を受けて

1. 花粉分析の結果

第6層が下部まで黄褐色を呈するほど酸化しており、全体に後発的な乾燥が進行していた状態であったので、花粉数が少ないのは予想されたが、それには有意義な結果が提示されたとと言える。

第2層 樹木花粉の割合が50%と高率で、近辺に落葉広葉樹と照葉樹を主要とする森林が分布していたという環境は、おそらく我孫子台地上やその開析谷斜面などに耕地化されない森林が多く残っていたものと思われる。しかし、その森林もコナラ・クスギ・アラカシなどの二次林であると推定されるという事は、樹種から見ても人の手が入った典型的な里山の森林と言える。

スギ林の存在が指摘される「やや遠方の地域の山地」とは、生駒山脈が考えられるだろう。

イネ属型花粉が検出されなかったのは意外であったが、遺構により水田と判明してもイネ属型の花粉が検出されない例は結構あるようである。それでも水田雑草のオモダカ属が検出され、イネ科の花粉が多い事は水田の存在を間接的に示すと考えても良いだろう。

ただし、「湿潤からやや乾燥した環境」とは、湿潤と乾燥を繰り返す水田の環境に適合するのかわ、乾燥した微高地と埋没しつつあった開析谷の小規模な流路が錯綜していたであろう調査地周辺の地形環境によるものかは簡単には判断できないと思える。

第3層 樹木花粉が第2層より高率であるので、第2層の時点よりは周辺に森林が多かったと思われる。森林の様相は第2層の時点とあまり差がないようだが、ハンノキ属が見られるのは近辺に耕地化されていない湿地が存在する事を示しているようにも思える。

草本花粉は第2層と比較すると、より一層多様であり、イネ科・ヨモギ属は少なく、オモダカ属は見られない。第2層よりは水田の存在する率は低いと言わざるをえない。

推定される環境「やや湿潤からやや乾燥」であるのも第2層より環境の均質性が高いとも言え、人為的な開発の度合いが低いように思える。また、畑作の可能性を示唆する要素もない。

しかし、第4層と比較すればその差は格段であり、やはり水成堆積と考えるには無理が大ききように思われる。

第4層 花粉密度が極めて低いのは典型的な洪水堆積物の特徴と言える。現場での観察を補強する要素と言えよう。ソバ属の検出により、そう遠くない地点で畑作が行われている可能性が高いと言える。

第5層 花粉密度が極めて低いのは意外であったが、「低湿ではない環境下の土壌生成による分解が考えられる」という。その反面オモダカ属とイネ科の草本花粉の検出により「湿地になった時期があったか近隣に湿地の環境が分布していたと推定される。」というのは、第6面で小規模な低湿地が検出され、それが第5層の発達とともに次第に埋没し、乾燥化していったという、現場での調査成果と良く符合する状態と言える。

樹木花粉により、森林の様相は照葉樹林と推定され、そこから、この森林が成立し、その土壌である第5層が形成されるのは縄文時代前期以降と考える事ができるようになった。

第6層 上部・中部の花粉密度が極めて低い原因として、「乾湿を繰り返す堆積環境や堆積時間が速かったことなど」があげられているが、現場での観察で符合する要素は、クラックの発達が顕著で、堆積後の乾湿の変化が激しかったと思われる事である。堆積時間が速かった可能性については、これほどの厚さの層で級化構造も見えない細粒の堆積で考えうるのかという問題がある。

そこにわずかに残る花粉は第6層下部に含まれるものと共通し、第6層下部で検出された花粉の様相が第6層全体の堆積環境を示すと考えて良いだろう。第6層下部の樹木花粉により冷温帯落葉広葉樹林から亜寒帯常緑針葉樹林の様相が復元されたのは大きな成果である。第6層が最終寒冷期に堆積した更新統上部、つまり低位段丘構成層上部である事がほぼ確定となり、調査地点の立地が明らかになったと言える。

第6層下部では第7層と似た様相の中で、草本花粉の割合がやや高く、イネ科花粉の集塊が見られるという事は、第7層を形成した森林の中に、周辺に草地が見られる湿地が拡大し、周囲からの土砂の流入により、その水面下で堆積が進行した事を示唆していると考えられる。

第7層 樹木花粉からハンノキを中心とする湿地林が復元され、少ない草本花粉から「やや湿潤からやや乾燥した環境」が推定されるのは、サンプル採取位置が2トレンチの下層確認トレンチ内で最も第7層が低い位置にあり、暗色を濃く示す場所で、そこから南西に第7層が高くなっていき、暗色が薄くなるのと符合する。ちょうど2トレンチ北東半部分から北東に湿地林が分布し、南西はやや乾燥した環境が隣接していたのではないだろうか。

2. 珪藻分析の結果

珪藻も全体的に密度が低いようである。しかし、破片や移動化石の可能性のあるものは少なく、各々の層で、珪藻の生育しにくい環境や珪藻化石の遺存しにくい状況があったようである。

それでも層の性格や、環境の変化に関する有意義な資料を得られた。

第2層 珪藻密度が低く、乾燥もしくは不安定な環境で、好止水性の珪藻から短期間滞水する時期があったと見られるのは、ある意味水田耕作的な状況とも言える。

花粉分析と共にこれが今回の調査地点での標準的な水田耕土の状況なのであろう。

第3層 第2層と似た状況と言える。流水不定性種が検出されているのが異なるが、量的に少ない中での違いなので積極的に評価できるものではなからう。

第4層との違いの方が大きく、第3層が耕土である可能性の方が強まったと言える。

第4層 珪藻が検出されず、その理由として水流による淘汰が考えられるという事は、調査成果で洪水による水成堆積層と考えられた事と良く符合する。

第5層 花粉分析と良く似た状況と言える。森林土壌の場合は湿潤で還元的气氛の場合も多いはずだが、「やや乾燥した環境」はやはり、低位段丘上の照葉樹林という立地と植生によるものであろう。

第6層 全体に沼沢地のような環境が推定されているが、上部が中部・下部と比較して珪藻の量も種類も多く、湖沼浮遊性環境指標種群がなく、流水不定性種が多いという違いがある。

第6層上部の様相は、クラックの発達などを考慮すると、サンプル採取位置の上が第6面の135低湿地でもあり、第6面の小規模な低湿地の状況を反映している可能性も考えられる。

低湿地が流路状の形態で、第5層の下にラミナのある黒色シルト層が存在した事と、この第6層上部の流水不定性種の存在が符合するものと思われる。

第6層中部・下部で湖沼浮遊性環境指標種群の珪藻が検出された事はその堆積環境が、第6面の低湿地よりは水深のある湖沼での堆積である事を示しているのかもしれない。それでも陸生珪藻も検出され、周囲の土砂が流入する、「沼沢や湿原の縁辺の不安定な環境」であったのであろう。

第7層 珪藻密度が低い事を除けば、花粉分析で推定された湿地林の環境に良く合うと言える。

3. まとめ

今回の花粉・珪藻分析では、現場での調査成果を補強するのみでなく、調査で不明だった点を明らかにする分析結果も得られたと言える。

最大の成果は、第6・7層が低位段丘構成層上部である事が判明し、調査地点の立地が低位段丘平坦面であるのが分かった事である。

大和川今池遺跡は地形的には低位段丘とその開析谷が埋没していった部分、そして氾濫原を中心とした沖積平野が錯綜していると考えられるが、低位段丘崖が沖積層に埋没しているため、その地形分布は必ずしも明確ではない。それが、今回の調査地点では明確になったと言える。

また、多くの既往の調査で「地山」と認識されている層序に当たる第6層が、後期旧石器時代に相当する時期の堆積と判明した意義も大きい。

これらは今後の調査の指標となる結果であろう。

第5層は縄文前期以降の温暖化した後の森林土壌と判明し、無遺物ながらその堆積時期をある程度限定できるようになった。また、第4層は洪水による流水堆積層の様相を良く示し、第5層を形成した森林の廃絶に関わる堆積である可能性が強まった。

第3層に関しては、決定的な結果は得られなかったものの、旧耕土である可能性が強まったとは言えよう。その場合、第2層よりは開発の度合いが低いとも言えるようになった。

周辺に耕作地が存在する環境での、泥土のような混濁状態で堆積した事が確実な水成堆積層における花粉・珪藻の在り方のモデルと比較できれば、より明確な結論を出せる余地はあると考える。

第2層に関しては花粉・珪藻分析から水田耕土と断言できる結果が得られなかったのは意外であったが、これも一つの水田耕土のモデルとして提示できるものかもしれない。埋没して耕作が停止する時期の季節による違いなども関係するのかが興味を引く所ではある。

また、第2層の時点で、周囲に里山のような人の手の入った森林が多く存在していた事が推定されたのは予想外の成果であった。中河内の沖積平野中心部の遺跡より、かなり樹木花粉の割合が高く、台地と沖積平野の縁辺部の特徴を良く表していると言える。生駒山脈より離れた、我孫子台地・上町台地沿いの地域では、燃料・肥料・建築材などの供給源として、台地状の森林がある程度保全されていた状況が推定されるのかもしれない。

第6章 総括

第1節 今回検出の「難波大道」について

1. 造成時期について

難波大道の造成時期に関しては大きくまとめると五つの説がある。一つは日本書紀仁徳14年条「是歳作大道於京中、自南門直指之、至丹比邑」の記述から仁徳朝5世紀前半頃とするもの。

次は日本書紀推古21年「自難波至京置大道」から推古朝7世紀初頭とするもの。その次は日本書紀孝徳白雉4年条「修治処々大道」から前期難波宮、孝徳朝7世紀中葉とするもの。そして、前期難波宮でも「副都の詔」の出された天武朝、7世紀末葉頃とするもの。最後に難波京の京城整備が進んだ後期難波宮、聖武朝8世紀前葉とするものである。

「難波大道」という名称を叙述において使い始めたのは、初めて「難波大道」が発見された1980年度の調査の「大和川・今池遺跡Ⅲ」の報告書においての森村健一氏が初めかと思う。それ以外の名称としては「難波京南大道」とされるものが多い。

今まで大道の存続時期を示すものとして提示されていたのはその調査で大道東側溝から出土した須恵器坏片である。報告書では陶器編年Ⅲ-2段階のものとする記述とⅢ-3段階に類例があるとする記述があり、大道存続時期のものであろうとされる。

破片ではあるが、法量と形態からすると飛鳥Ⅳ期から平城宮Ⅰ期の杯Aと見られる。

森村氏は報告書ではそれを踏まえ、大道の造成時期は「前期難波宮造営期に相前後して建設されたとする説に賛同したい。」としながら推古朝の可能性があるとしている。「難波大道」という名前自体が日本書紀推古21年11月条「自難波至京置大道」から取られているのもそれゆえであろう。隣接する依網池が推古朝に造営記事がある事や、遺跡内の大道隣接地で飛鳥時代前半期の土器が多く出土している事などに関連付けているようである。

1994年度の調査²⁾では大道西側溝から1点、陶器編年Ⅲ-2段階とされた須恵器坏身が出土している。調査担当者の藤田道子氏は、大道側溝が6世紀中葉の遺物包含層の上に堆積した層から掘り込まれ、側溝が機能していた時期は「7世紀から10世紀という大まかな枠しか与える事ができない。」としながら、文献から見れば、「国家体制による官道ならびに駅制整備の方針がかたまっていたと思われるのは7世紀中葉以降であろう。」として、造成時期が7世紀中葉の可能性が高い事に言及している。

今回の調査ではこの点で新しい知見が得られた。

まず、大道側溝は耕地化に際し底浚えをしてから埋められた可能性が高く、埋土から黒色土器碗片も出土し、その埋土内出土遺物からは存続時期の下限しか指摘できないという事が判明した。

既往の調査でも、大道側溝埋土は、ブロック土は確認されているが、水成堆積層は確認できておらず、側溝機能時の堆積が残っているとは考えにくい。

そして、大道側溝が切り込む第3層の包含遺物から大道造成時期の上限が確定できた。第3層包含遺物中、最新のものは、遅っても飛鳥Ⅰ期の後期に限定できるもので、それにより、「難波大道」造成は飛鳥Ⅰ期より確実に後の時期という事ができる。

また出土遺物量が少なく、大道盛土とは直接の層位関係がつかめないくらいはあるが、大道側溝溝間

で盛土直前に掘られ、盛土と共に埋められたと考えられる209土坑出土の遺物が、飛鳥Ⅱ期の組成と見られる事から、大道造成の時期は飛鳥Ⅱ期、7世紀中葉に限定できる可能性が強まった。

残存していた大道盛土の包含遺物も最新の時期の遺物として飛鳥Ⅰ期に限定できる遺物があり、飛鳥Ⅱ期前後と見られるものもあるのでそれを補強する状況である。

それならばまさしく「難波大道」は前期難波宮、孝徳朝の時期の造成と言える。少なくとも推古朝まで遡る可能性は否定できるようになった。また、第3層下面の第4面には6世紀代の溝があり、南北直線道路としての大道は、幅がまったく同じものが同じ位置で他に何の痕跡も残さず第3面の大道側溝に破壊されたのでなければ、仁徳朝に遡るものもこの場所にはないと結論できる。

ただし、209土坑・大道盛土の出土遺物に完形のものはなく、209土坑の残存率60%ほどの土師器坏1個のみが意識的に入れられた可能性のある遺物という程度なので、7世紀末葉説・8世紀前葉説を完全に否定するには根拠が薄弱と言わざるをえない。

だが、今回の調査地より250mほど南で大道の東に隣接する遺構集中域（図52）には奈良時代とされる掘立柱建物の一群があるが、大型の隅丸方形の柱穴の規模から見て、飛鳥時代～奈良時代の公的な建物と考えざるをえない建物が1棟ある他は、奈良時代とする根拠は薄く、周溝を持った屋敷地内の建物群の一部としてかなり時代が下る可能性があると思われる。藤田氏は報告書の中で大和川今池遺跡の遺構の時期では7世紀から8世紀前半にかけて空白期があるとされたが、むしろ大道縁では8世紀後半から9世紀に空白期があると言える。

以上を総合すれば、やはり「難波大道」の造成は7世紀中葉の可能性が高いとは言えるだろう。

2. 大道の規格性について

ここではまず、「難波大道」の規格性云々の前に、既往の調査で報告されている図面等に関して一言述べておかななくてはならない。

今回の調査にあたり、既往の調査の成果を把握するために各調査の平面図を合成しようとした際、大きなズレが生じる事が多々あり、何を基準として良いかわからない場合も多かった。

まず、当センターの報告書「大和川今池遺跡（その1・その2）」³³を始め、既往の調査区を集成した位置図が幾つかの報告書に掲載されているが、これは座標位置の正確さが言いづらく、大まかに各調査区の位置関係を見る事ができるのみである。おそらくは個々の調査報告書の誤りや誤差が累積した上に、それを縮小していく作業の誤差が加わったものと思われる。

他に、トレンチ位置図と平面図のトレンチ形態が合わないもの、調査区の全体形が不明なもの、座標が不明なものなどがあつた。

作業として、平面図を調査区位置図のトレンチ枠に合わせる場合、合わせかたによって数m単位の誤差が出る事が多く、10m近い誤差が出る部分もあつた。

結果として、小縮尺の調査区位置図に平面図をはめ込む作業では各遺構の位置関係を云々できる精度は得られない事が判明し、原因を追跡調査する時間もなかったため、「難波大道」側溝に関して確実に座標値が判明する図のみを集成して図52を作成するのに留まった。

今後も異なる調査区の遺構の位置関係を検討する際には、調査区位置図などは使用せず、正確な座標が入った平面図を座標に合わせて配置していく必要がある事を付記しておく。

(1) 道路幅

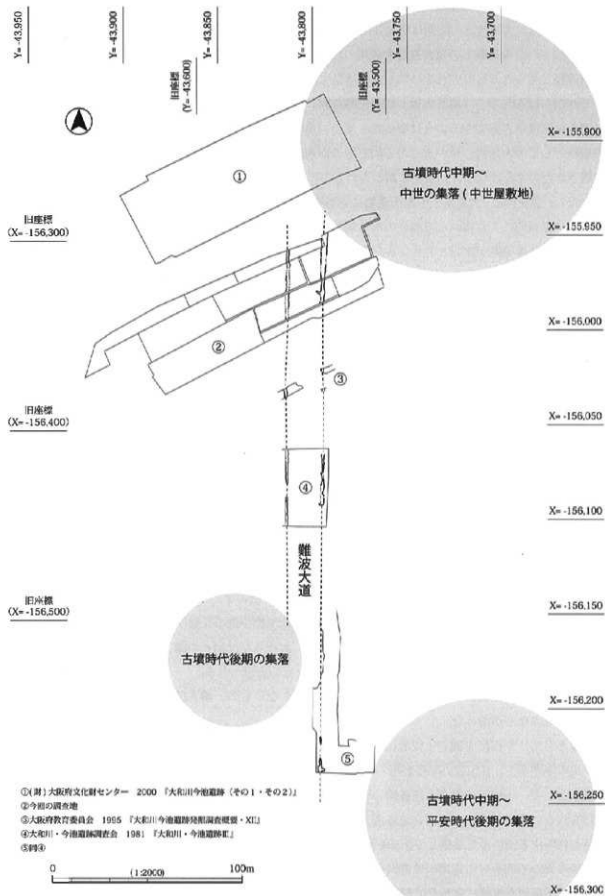


図 52 既往の調査で検出された難波大道

さて、日本の考古学では道路遺構の規模比較には、道路側溝の心々距離を持って比較するのが一般的になっている。道路遺構が道路側溝のみが平行する溝として検出される場合が大部分で、かつ、後世の浸蝕や削平により溝の幅なども変っているものが多い事からすれば、方法的に正しいと言えるが、それが「道路幅」と言えるものではない事は忘れてはならないだろう。

今回の調査で「難波大道」は総延長285mほど確認できたわけだが、その中で調査区により道路幅は微妙に異なる。1980年度の調査では側溝間の距離約18m、心々距離19m前後と報告されている。1994年度の調査では側溝間距離18.5m、心々距離20mと報告されている。そして今回の調査では側溝間距離17.0m、心々距離18.8mである。

いずれの調査でも側溝の肩部の形態は後世の削平もあり、浸蝕や削の崩れなどがあつたようで整った形ではないため、計測の仕方によって若干の差は生じると思われるが、全体的に見れば当初からある程度の幅の差があつたとみられる。

道の路面幅が共通していたとすると、盛土の法面の分だけ側溝間の距離は、路面幅より広がるはずである。そして、路面の高低差をなるべく抑えるように道路を設計するならば、低い地盤の部分では盛土が高くなり、側溝間距離も広がるはずである。

しかし側溝が切り込む面の高さは、図52の④の部分、1980年度の調査地ではT.P.+8.5m、③の部分、1994年度の調査地ではT.P.+8.4m、今回の調査、②の部分ではT.P.+8.2mであり、側溝間距離との相関関係は見られない。

おそらくは側溝間距離は15mほどの誤差は許容される範囲として造成されたのであろう。平均すれば、「難波大道」は側溝間距離18m、側溝心々距離20m程度の道路遺構として良いであろう。

この道幅は飛鳥時代の道路遺構で、発掘調査で確認されたものでは、側溝間距離21mクラスの奈良県の下つ道や、飛鳥寺南辺東西道、石神遺跡で検出された阿部山田道⁴に次ぎ、藤原京朱雀大路とほぼ同規模と言えるであろう。

これらより道幅の大きい道は平城京成立以前では、奈良県横大路の幅28m強程度しかない⁵⁰。

また、これらに次ぐ規模の道としては、静岡県静岡市曲金北遺跡で検出された東海道⁶、埼玉県所沢市東の上遺跡などで検出された東山道⁷、鳥取県大山町名和葛藪谷遺跡検出の山陰道⁸、福岡県上毛町大ノ瀬官街遺跡検出の駅路⁹などが幅12mのものとなる。地方主要官道は奈良時代には大阪府高槻市郡家川西遺跡の山陽道¹⁰、奈良県高取町薩摩遺跡検出の紀路¹¹など幅9mクラスに縮小する傾向があり、平安時代には幅6mのものが多い。また、大ノ瀬官街遺跡や群馬県伊勢崎市大道西遺跡・南久保遺跡¹²など、主要官道と郡街などの官街遺跡をつなぐ道は幅6mのものが多い。

これらから見ると、古代官道には側溝間距離で見れば、幅約21m・18m・12m・9m・6mのクラスがあり。年代が下るにつれ、そのクラスにのって規模を縮小させていくと言える。

また、以上の道路遺構の中でその造成年代が古くなるものは7世紀中葉～後葉に集中する。関東から九州まで、国家規模の官道の整備が7世紀中葉から開始されたと言ってもよからう。

「難波大道」はまさしくその始めの時期に国家中心部でのトップクラスの規模を持った古代官道と位置付ける事ができる。

(2) 側溝規模

側溝の規模は規格があるとは言いがたい状況である。しかし、幅に関しては1.4～1.8mほどの範囲に収まる所が多く、それ以下の部分は削平が激しいために形が崩れたような検出状況である。

今回の調査で大道盛土下面に、本来側溝が切り込んでいた面の高さが残っていた事と、側溝が部分的に深い部分が、埋める直前の粘土探掘の痕の可能性が考えられるようになった事から、以下の事柄が推測される。

1980年度の調査では側溝底部のレベルは顕著な傾斜はないが北が低い傾向にあるとされ、1994年度調査でも北が低いとされるが、1980年度調査の平面図では明らかに側溝底部が数ヶ所で部分的に低くなっているのが分かり、1994年度の調査では短い検出距離の中で、溝底部に北に落ちる段が認められる。どちらの調査でも水成堆積層が認められないとの指摘があり、深くなる部分は今回の調査成果のように本来の形ではないと考えると、両調査でも側溝底部に明確な傾斜はなかった可能性がある。大道側溝は、水路のように水を一定方向に流す傾斜を付けるものではなかったと考えられる。ただ、地形的には今回の調査地点が最も低いので、わずかに北に向かっての傾斜があってもおかしくはない。側溝からの排水に関する資料が不明な現在、排水施設が存在してそこに向かっての傾斜があったか、溜まった水は自然の浸透・乾燥に任せるものであったかは結論できないと言える。

側溝の平均的な深さは、今回の調査での大道盛土下面と側溝の浅い部分の底部高の差、40cmほどが本来の深さであったと考えて良いだろう。

他の古代の道路遺構の側溝規模を見ても、規格性があるとは言いがたいが、「難波大道」のもの比べてかけはなれて大きいものも小さいものもあまりないようである。また、ほとんどのものが素掘りである。維持管理が容易な素掘りの道路側溝に適正な大きさというものが大まかにはあったのであろう。

(3) 方位

側溝が以上のような状況であるので、「難波大道」自体の方位に関しては、難波宮の建物のような厳密な計測は出来ないとと思われる。

1994年度調査の報告書では大道中軸線上の点と前期難波宮朱雀門中心点を結んで、国土座標からのズレを $N-0^{\circ}42'45"-E$ としているが、大道中軸線の設定にやや厳密性を欠く。

またその方位性が、後期難波宮の方位性 ($N-0^{\circ}50'45"-E$) より前期難波宮の方位性 ($N-0^{\circ}40'2"-E$) に近い事は注目できるようにも見える。(難波宮中軸線の方向性に関しては「難波宮址の研究第十三 2005年」¹³⁾ で見直しが行われ上記の方向性とは異なるものも提示されている。)

しかし、今回の調査での大道側溝のラインは、微地形により北側が太くなる事もあるが、明らかに1980年度・1994年度調査の側溝ラインからやや東にふりはじめており、計画の仕方ですれの少ないように測ってもその傾きは1度を越えると思われる。そうなると、1994年度の成果による上述の認識は成り立たないと言える。

ただ、積山洋氏の指摘によると¹⁴⁾、前期難波宮中軸線を大和川今池遺跡まで約10km延長しても、「難波大道」中心線から東に約7.4mずれるが、なお大道の範囲内に取まっている。それこそ積山氏の言うように「驚くべき精度」であり、重要な点であろう。

そこで気づくのは前期難波宮中軸線が、北が東に傾いているのに関わらず、その延長線が大和川今池遺跡における「難波大道」中軸線よりまだ東にずれている事である。

つまり、この付近の難波大道の南北方向を決定する基準点は、前期難波宮中軸線を延伸する測量を繰り返してきたのではなく、新たに別の測量を行い、基準点を設けて南北方向の中軸線を設定しているという事である。今回の調査区の大道の方向性がやや北が東にふるはその誤差をこの付近で解消しているのかもしれない。

(4) 整地土・盛土

1980年度の調査では、「難波大道」に伴う整地層らしきものが見られたと報告されているが、土質の記載が少なく「粘質土層」「シルト層」とあるばかりでブロック土は確認されていないようである。下面の「凹凸の激しい地山」の上で平坦な面を成す事を根拠とし、それらの層を大道側溝が切るため、整地の後、大道側溝を掘削していると見ているようだ。

「地山」はおそらく今回の調査の第6層に相当するものであろうし「凹凸の激しい」「小コブ状隆起」と記載のあるのはコンポリュートラミナの事と思われる。すると土色を見ても整地層とされているものは第3・4層に相当する層が薄く残存していたものではないかと思われる。

上面が比較的平坦なのは、大道側溝切り込み面直上が耕土であり（おそらく第2層相当）、その床面として平坦に削平されているのであろう。

1994年度の調査では今回の調査地点とも近く、第5層相当と思われる黒色層も存在しているので対応が取りやすい。整地層とされる、黒色層の直上の「灰白色微砂～シルト」は明度が高い事を見てもおそらく第4層相当の洪水堆積層であろう。

結論としてどちらも整地層はなかったと見て良いと考える。また、今回の調査でも側溝掘削前の整地層は一切存在していなかった。薄い整地層なら耕地化に伴う削平で消滅した可能性はあるが、南北150mほどの長さで高低差が30cmほどしかないような地形では側溝掘削・道路敷き盛土の準備工としての整地は不要であったのであろう。道路敷き盛土自体が整地的な作業と考えれば納得がいく。

今回の調査で183畦畔基部に残存していた盛土が「難波大道」道路敷き盛土としては初の検出と言える。古代の道路敷きの施工としては、石神遺跡・埼玉県吉見町西吉見遺跡・東京都国分寺市窓ヶ窪低地遺跡などで敷葉（敷草朶）工法が確認されている¹⁵⁾。また、「版築」と報告されているものの中には疑問なものもあるが、大西遺跡・窓ヶ窪遺跡のものは2種の土を平行して何層も交互に叩き締めており、広義の版築と言って良からう。

他に凹凸のある掘り込み地盤をしてから盛土するものや、低湿地では木材や丸太を敷いた上に盛土する例も見られる。

しかし、今回検出された盛土は、かなり念入りに叩き締められ、隣接する微高地の土を掘削して盛土してはいるが、特殊な工法は採用されておらず、その下面も特に加工されていない。

石神遺跡では最大50cmほどの厚さの盛土が残存しており、粘質土の上に木片や土器の混じる砂質土で路床を作っているとの事だが、それでも路面は削平を受け残存していないらしい。ただし、谷の低湿地部分での検出で、分厚い盛土は敷葉工法と共にその環境に対応した形態と考えられる。

今回検出の盛土は残存する厚さわずか10cmほどで、単層であるので、本来の高さは知る由もないが、低位段丘平坦面という立地や、その後の洪水による堆積物の少なさから見れば、必要以上の盛土はしていないと推測できる。

基礎地盤も、後世のコンポリュートラミナの攪乱は、水田開発後に人工的な滞水層が形成された事が影響していると見れば、「難波大道」存続期には軟弱さはなかったと思われる。おそらくは特殊な工法を用いる必要もなかったのであろう。

盛土の法面が45度ほどの傾斜だとして、側溝側面ぎりぎりまで盛土されていたとすれば、盛土が残存の2倍の厚さ、さらにその上に路床層があったと仮定しても、路面幅は16mを下回らないと思える。

3. 北隣調査区での未検出の問題について

大和川今池遺跡の「難波大道」に関して、一つ問題になるのは、今回の調査地点の北側に当たる大和川高水敷における調査で検出されていないという事がある。当センターが調査を行った1996年度の(その1)調査区である¹⁶⁾。

その報告書では「難波大道」が検出されなかった理由を、側溝のない道であったか、削平されたものと考えている。後者では既往の調査で検出された大道の高さがその調査区の第3層の高さにあたり、第3層は中世後半以降に形成された層で、その下面を削平しているからだとしている。

その内容をここで再び検証したい。

まず、古代の第一級クラスの官道と考えられる「難波大道」に側溝がない部分があるとは考えにくい。この部分より高く、水はけが良いであろう1980年度調査地点でも側溝が存在するのに、ここで側溝を設けない理由はないと言えよう。

トレンチ断面図と基本層序の記述がまったく関連付けられず、検出された遺構面が断面図で特定できないが、その調査で第4層とした層が、その層以下で「踏み込み」と認識されているコンボリュートラミナが見られる事と包含遺物が似ている事から、今回の調査の第2層に相当する層と思われる。

その層直下の第5面は、12世紀代の瓦器が出土した土坑、7世紀前半の須恵器環が出土した土坑、布留式期の土器が出土した土坑群などがあるが、今回の調査区の第4面の186・187溝の続きが14・15溝として検出されている。それらの事から、この面が正確に検出されているなら、今回調査の第3面と第4面が取敢した面と考えられる。遺構断面図から面の高さを見るとT.P.+8.2~8.4mほどの高さで、今回調査の第3面とはほぼ同じ高さである。

つまり削平による消滅は、(その1)調査区が、本来は今回の調査区から25m北上する間に40cm以上高い地形を持っていたものが、その調査区の第4層が堆積する前に検出された高さまで削平されたと考えない限りありえない。(その1)調査区でも大道想定ライン付近は下層から継続的に周辺より低い部分で、大規模な削平を行う理由も必要もない部分と言える。したがって、大道側溝が消滅するような削平はなかったと考えられる。

今回の調査での第3・4層に相当する層は、「難波大道」想定ライン付近のトレンチ断面図で見ると「7.5YR4/1褐灰シルト 細砂を含む」となっており、14・15溝がそれを切ることで層序的には今回の調査の第4層の層序になるようだ。この層は今回の調査の第3・4層より暗色で有機分が多いようで、大道側溝の埋土に近いと言える。

大道側溝が浅い部分の深さ20~30cmの形でこの層の中に取まり、かつコンボリュートラミナの乱れがあった場合、検出できない場合もあるのではないだろうか。

また、調査区その部分は写真で見ても明らかに北に向かって面の土質が変化していき、北東側の遺構集中域の微高地へ層が取敢していく部分のように思える。粘土取り穴とされる土坑群や攪乱もある。14溝や布留式期の土坑群など「難波大道」より古い遺構が見られるという事は、それらの遺構検出に引きずられ、精査時に大道側溝を削平してしまった可能性はないだろうか。

調査時点での現場を実際に見ているわけでもなく、以上の事は憶測にすぎないが、隣接すると言ってよい今回の調査区まで検出されている「難波大道」が、この調査区に残存していない理由がまったく不明な状態では、検出に失敗した可能性も考慮せざるをえないだろう。

4. 大道廃絶時期とその様相

1994年の調査の報告書でも「難波大道」直上の包含層から、その存続時期をおおまかに7世紀から10世紀頃と捉えられるとしている。

今回の調査でも「難波大道」を壊して成立した耕地の耕土である第2層の包含遺物からその耕地開発が10世紀中葉頃に行われたと考えられる。第2層の包含遺物の内、5世紀初頭から7世紀前葉のものが近辺の遺構集中域の土を掘削して運び込んだ大道盛土由来のもの、7世紀中葉から8世紀前葉のものが大道存続時期のもの、10世紀中葉から14世紀のものが第2層耕土時点のものと考えられる。

ただ、包含遺物の8世紀後半頃から9世紀の空白期と、大道が徐々に浸蝕された痕跡と思われる202落込の存在が確認された事から、大道が耕地開発で破壊される以前から、管理されず放置され、浸蝕を受けていく期間が存在した事が新たに分かった。

難波京城では、聖武朝の天平6年(734年)に宅地班給がなされているが、それから間もない8世紀中葉、平城宮Ⅲ期頃に方格地割りに乗る遺構の多くが廃絶しているとの積山氏の指摘がある¹⁷⁾。それが今回の調査の第2層包含遺物の空白期の始まりと整合性がある事が注目できる。

しかし、その原因や実態が不明で、難波京の衰退を意味するかも分からない現在では、性急にその現象と結びつけるのは避けたい、長岡京遷都(784年)に伴い、それに転用するため難波宮の解体も進んだと思われるが、副都としての難波京の最後は延暦12年(793年)の難波大宮廃止とすべきだろう。

難波宮あつての「難波大道」は難波宮廃止と共に管理を放棄された可能性もあると思われる。

しかし、8世紀末葉に管理が放棄されたとしても、それから10世紀中頃の耕地開発までおよそ150年間の間、浸蝕するにまかせて放置されていたと考えるのは無理があるように思われる。

また、そこで国家の方針として「難波大道」の廃絶が決定していたなら、公的な事業として大道を破壊し、その土地利用が図られたはずである。

難波宮廃止後も、しばらくは道として利用されていたが、律令国家の行政能力が低下するに伴い、上町台地の東斜面で間折谷を幾つも渡るといふ無理な立地の「難波大道」は災害などで寸断された部分を修復される事もなくなり、段階的に廃絶していったのではないかと推測する事ができる。

そして、大和川今池遺跡内の大道は、おそらく耕地とするには給水体系がないような状態で放置されていたのが、荘園制の下での再開発により耕地化する際に、ようやく組織的に破壊されたと言ったところではないだろうか。

10世紀中頃に初めて条里制地割りによって耕地開発される今回の調査区部分の地割りが、それでも「難波大道」をその地割りの基準としている事は、その時点で大道の一部でも地割り基準の目印として使用できるほどの形を留めていたという事を暗示していると考えられる。

5. 大道と条里制地割り

1994年度調査の報告書には「大和川今池調査会の発掘調査では難波大道東側溝の上に条里制遺構の大畦畔が検出されており」との記述があるが、1980年度調査の報告書には明確な記述はない。

しかし、現存坪境畦畔の位置が最下層の坪境と一致するとの記述があり、断面図で大道東側溝の上に段差をなすような層序や、大型の畦畔盛土らしき層が重なるのが見られるので、これを指すのであろう。

また、「整地層」とされた大道側溝が切り込む層には畦畔の痕跡らしきものはないので、この地点でも条里制地割りは大道廃絶後のものだけが確認されていると見られる。

今回の調査では、南北方向坪境は大道中軸線から東に0.9m寄ったラインに作られており、それが現代にまで踏襲されている事を明確にできた。

浄水場が建設される以前の地割りは昭和36年測量3000分の1地形図で見ると、堺市と松原市の市境を成す坪境は坪毎にズレがあり、1980年度調査の地点の坪境は今回の調査地点の坪境より8mほど東にある。確かに「難波大道」東側溝に近い位置と言える。

それと調査成果を合わせると、坪境のずれは「難波大道」を破壊した耕地開発当初からあり、大道の道幅の東西隣接坪への取り込み方は南北の坪毎に異なっていた事が分かる。

ちなみに浄水場建設以降、その場内から大和川堤防までの市境は直線的に整理され、今回の調査地点でも現市境は浄水場建設以前のものよりやや西に通る。

大和川今池遺跡周辺で現代まで遺存した地割りは条里制地割りと自然地形に基づいた不整形な地割りが混在したような状況だが、「難波大道」ライン上の坪境とはほぼ平行する東西隣の坪境は比較的良く残っていた。それらは大道ライン上坪境から115m以上あり、一般的な条里制地割り坪1辺109mに「余剰帯」を加えた幅を示し、大道道幅を取り込んだ事を示している¹⁰⁾。

そこで注目できるのは、大体が大道ラインの西側の坪が120m近い東西幅を持つのに対し、東側の坪は115mをぎりぎり越える程度の幅のものが多い事である。

これは今回の調査での183畦畔が調査で確認された大道ライン上坪境のうち最も西にあるものであっても、わずかながら大道中軸線より東に寄っている事実と符合する。

南北坪毎に異なりながらも、摂津国住吉郡側の坪の方が河内国丹比郡側の坪より、より多く大道の道幅を取り込む事は共通していたと言える。

また、今のところ大道存続期にそれと併行する耕作地の存在は確認できておらず、遺跡内では大道を破壊して耕地開発が為されていると見られるが、今回の調査区の南西にかかった坪の南北方向長地型地割りは大道西側溝を基準としている可能性が高い事が判明した。北西側の坪も東西方向長地型地割りの中に、南西側坪の地割りと合わせた南北方向の畦畔が存在しているので、これも大道西側溝を基準としていると見て良いであろう。

これを矛盾なく説明するには、郡単位の条里制地割りの設計は「難波大道」存続時期にされていたが、調査された部分では水利などの関係で10世紀まで耕地化がなされなかったと考える他ない。

今回の調査地点を含め大和川今池遺跡の北西側は大体低位段丘平坦面とそれを浸蝕した開析谷から成ると考えられる。調査地点のすぐ西側の依網池が開析谷を利用した溜池だとすると、その開析谷により我孫子台地本体とも切り離され、遺跡南側でも現在埋没している開析谷による低地があり、依網池につながる水路では給水する事が困難な孤立した地勢であった可能性が高い。

遺跡北西側は、開析谷の埋没が進行し、より細やかな灌溉水路体系を伴う開発が為される10世紀代に到るまで、荒廃した「難波大道」の遺構を留めた非耕地であったと思われる。

6. まとめ

今回の調査において、いままでもあやふやな点があった「難波大道」の存続時期をかなり明確にできた。また、その廃絶・消滅の状況を解明する事ができたのも大きな成果と言えよう。

大和川今池遺跡に残っていた「難波大道」は推古朝やそれ以前のものではない、という結論を出せた事も大きな意義を持つ。また、天武朝説や聖武朝説を完全に否定するには根拠となる遺物が少ないが、

調査者としてはこの「難波大道」は7世紀中葉、孝徳朝に造成されたものと考えたい。

もちろんそれは孝徳朝以前に上町台地を南北に貫く道があり、「大道」と呼ばれる事があったかもしれない事を否定するものではない。しかし、このラインに南北正方位で通る直線道路は前期難波宮以前にはありえないと考える。

いわゆる「大化の改新」が後世の造作が多いものである事を明らかにしたのは戦後歴史学の大きな成果の一つであるが、その時期の難波遷都は画期的な出来事であり、それが中国的な宮都を指向するものであった事は前期難波宮の調査から明らかである。また、東山道などいくつかの主要官道がその時期の造成に遡る可能性が出てきた今、孝徳朝の改革を過小評価する事はできないであろう。

まさにその時期の国家のメインストリートとして、前期難波宮の中軸線を延長し南下する直線道路である「難波大道」が作られたわけである。前期難波宮に京城があるとすればその「朱雀大路」となるものであり、その在り方自体が京城の中軸となる要素を内包していると言える。

しかし、そのために、開析谷の発達した上町台地東斜面という、造成・維持の困難なラインを通る事となったのが、後の大道消滅に大きく関係してくる。

古代の大津道・丹比道などの官道が、現代まで長尾街道・竹内街道に踏襲されているのに対し、「難波大道」は耕地の中に飲み込まれるように消滅し、わずかな「大道」地名を残す程度で人々の記憶からも消え去っていった。

それはやはり、難波宮があってこそその「難波大道」であり、南北方向の直線道路という形で「秩序ある国家」を体現する政治的象徴性の強い道路であった事に起因するのであろう。難波宮が消滅し、律令制が弛緩していくにつれ、おそらくは開析谷を渡る部分での補修維持が困難になり、いたるところで寸断され、道としての機能を失っていったものと思われる。

第2節 耕地区画の変遷

1. 「難波大道」以前の耕作地存在の可能性

遺跡内で正方位を指向しない水路と思われる溝は、古墳時代後期のものが多いようである。ただし、現代の地割りにも自然地形を反映し、正方位でない区画が多いので、正方位を指向しない遺構が全て古いものとは言えない。事実遺跡北東部では奈良時代末葉以降の不整形な耕地区画が確認されている¹⁹⁾。

古墳時代後期の溝は微高地上で掘立柱建物や井戸と併存するものがあり、集落内部の区画溝の性格が強いものと理解できるものが多い。図52の大道西側の古墳時代後期の集落はその典型である。

しかし、今回の調査で第4面に、周辺に建物も井戸もなく、地形的に低い部分を通る溝が検出された事と合わせて見ると、それらの溝が耕地への給排水を行う水路であった可能性も否定しきれない。

加えて今回の調査で、結論は出せない状況ではあるが、第3層が耕土である可能性が指摘でき、それに伴う畦畔の可能性のある207畦畔が第3面大道盛土下面で検出された事は耕作地の存在の可能性を高めたと言える。

もし「難波大道」以前の耕作地があるとすれば、自然地形に合わせた小区画水田や、畦畔などを伴わない畑作地などが想定できるであろう。

ただし、「難波大道」以降の耕地の状況を見ても、今回の調査地点を含めた遺跡北西部は給水に困難を伴う部分であったようなので、古墳時代後期時点でどれほどの給水可能面積があったか疑問な点もある。

この問題に関しては、遺跡内の立地環境による条件の違いも把握しながらの、今後の調査に期待するしかないと言える。

2. 条里制施行当初の状況

今回の調査では条里制地割りの施行は、第1節で上述のとおり第3面において、10世紀中葉頃に「難波大道」を破壊して行われた事が判明した。調査区には大道ラインを通る南北方向坪境と、それに直交する東西方向坪境が確認でき、東側・北西側・南西側と三つの坪がかかっている事が判明した。東側坪と北西側坪が東西に隣接する関係にある。

坪の規模は、現代にまで残存していた坪境で確認できるのは南西側坪の南北幅が109mである事だけである。ただし、その南隣の坪の東西幅は約117mで、通常の坪の一辺109mに、大道西側溝東岸から南北方向坪境183畦畔中軸までの距離、9.4mを加えた長さに近似する。

東側坪・南西側坪内の地割りは南北方向長地型地割り、北西側坪内は東西方向長地型地割りが基本で、長地型の幅は部分的には異なりながらも、109mを基本としている事も判明した。

また、南西側坪の長地型地割りの東端で確認された251畦畔が、「難波大道」西側溝東部のラインからちょうど10.9mの2倍の21.8mを測り、大道西側溝が坪割りの基準線になっている事が判明したのは貴重な成果である。これにより、大道を破壊して行われた10世紀代の耕地開発が、それでも大道を基準としており、その当時でも大道がランドマークとして認識できる状態であった事が判明した。

北西側坪では東西長地型地割りが東端まで貫徹せず、東側坪境沿いに、取り込んだ大道幅9.4mの3倍以上、30.3mの幅を南北方向の畦畔で区切って、変則的な耕地区画を設けている事も分かった。

東側坪は実態が不明だが、109mを単位とする耕地区画が調査区範囲内で確認できない事から見ると、やはり元大道付近に変則的な地割りが存在した可能性が高い。

これらの事と、第1節で上述した、国境でもある南北方向坪境が坪毎にずれる事を考え合わせると、「難波大道」を破壊しての耕地開発が、少なくとも南北300m近い範囲で行われているのにも関わらず、整然としない形態であるのが特徴と言える。

取り込んだ大道の幅に倍以上の幅を加え、変則的で不均等地割りを作っている事からすると、坪単位より細かい、長地型地割り一枚単位での土地の権利関係の調整がなされた結果のように思われる。

国単位で計画・施行される整然とした条里制地割りとは異なり、実際に耕地開発に労働力を提供し、また開発後の耕作を担う農民層の権利関係までが個々に反映された耕地開発であったのだろうか。それは荘園制が発展する10世紀代の時代的特色が反映されているのかもしれない。

また、今回の調査の「難波大道」中軸線より東へ0.9mを西限とし、1980年度調査の大道東側溝上を東限として、大道幅の取り込みがどの坪でも摂津国住吉郡個が、河内国丹比郡より多くなっている事が判明したが、その理由は良く分からない。

この、10世紀段階に開発された耕地区画の一つの特徴として、水路と思われる溝がないという事があげられる。大道側溝も水路に転用される事なく埋められる。坪境畦畔に溝は付随しないようである。

遺跡全体で見ても、層位的に把握できている遺構が少なく、時期の認定に不安はあるが、奈良時代～平安時代の溝は南東部に多く、北西部にはほとんど確認されていない。溝が増え、水路網が存在すると思われる状況になるのは早くとも13世紀頃の間である。

今回の調査地点を含め遺跡北西部に給水するには、地勢的に依納池に給水する水路から分水するしか

ないと思われる。そして今回の調査で、南西と北東に高い部分があるのを確認しているので、遺跡北西部に給水するには依網池東辺付近を北上する水路と調査区より東側で尾根状の微高地を北上する水路が必要であろう。

昭和36年測量の地図を見ると、今池の北西角から直線的に北上する水路と、遺跡南東に隣接していた角ノ池という溜池から北西に伸びる水路が見られる。これが遺跡北西部耕地開発時まで遡る古い水路であった可能性がある。各坪へはその水路から順次畦畔越しに給水していたのであろう。

耕地区画に関しては細かい単位で不均等な差が見られるのに対し、その単位に個々に給水できる水路体系はなく、数個の坪単位で畦畔越しの給水を行わなければならないような状況であったと考えられる。

3. 条里制地割りの変遷

第2面、14世紀頃以降、調査区内の南北方向坪境に水路が付随するようになった可能性がある。それ以外の坪内の耕地区画にも溝の付属するものがあり、常設の水路かどうかは別にしても、個々の区画に給水できるようなきめ細かい水路網が発達してきたと言える。

さらにこの段階では、北西側坪で畦畔が若干移動し、大道跡地の突的的地割りが解消される。しかし、10.9m単位の長地型地割りは認識しにくくなり、正方位を向かない区画や蛇行する区画が増加する。同じ坪内で耕作方向が異なる区画も顕著になる。

検出できなかった区画もあるので確実な事は言えないが、坪内の区画が長地型地割りのような統一性のある状態から、やや不整形で、あまり長くない長方形の区画などがランダムに組み合わさるような傾向が強まっているように見える。

一つ々の耕地区画を経営単位と見れば、不統一性が増し、個々の単位は水利の点でより独立性を高めながら、面積的にはより零細化していると言える。

零細な自営農民層の姿が見えてきているのであろうか。

近世の大和川付け替え以前の段階、耕土系第1-1層耕土時点になると、調査区内の南北・東西方向両坪境に確実に水路が作られている。東西坪境ではむしろ水路が中心でその両側に畦畔が作られるような形態である。幹線的な水路なのであろう。

遺跡全体で見ると、近世の井戸が多く検出されている。古墳時代から中世の集落に伴う井戸とは異なり、そのほとんどは耕作地の中に掘られているようである。掘削時期を限定するのは難しいが、大和川付け替え以前に遡るものもあるとみて良いであろう。水路と比べより個別的な灌漑施設と捉える事もできる。近世における井戸の増加は水利に関して、大和川付け替え以外になんらかの画期があった事を示唆しているように思われる。

4. 大和川付け替え

今回の調査では宝永元年（1704年）の大和川付け替えに関する成果も得られた。

10-12トレンチは大和川現堤防の南東側斜面に位置している。そこで、江戸時代の大和川堤防に関する成果も得られた。江戸時代堤防盛土の全容は把握できなかったが、その南西側裾が現堤防裾とほぼ一致し、かつ堤防幅はトレンチ幅より大きい事は判明した。意外にも特に基礎地業は行わず、当時の耕土の上に直接盛土されている事も判明した。

また、現今井戸川肩部で、大和川付け替えに伴い、その堤防南側の滞水を抜くために設けられた人工

河川である落堀川の形態も調査できた。

その肩部は二段落ちの形状になり、その途中の段にも耕作地が設けられた事、国境を兼ねた南北方向坪境を延長する大畦畔がその段にも作られ、それが度々洪水で破壊されていた事などが判明した。

また落堀川と大和川堤防の間の耕地は、一旦耕土を取り去ってから整地され、また耕土を戻して作り直されている事、また、既存の水利体系から断絶されてしまうためか、大和川付け替え当初から井戸や水溜が計画的に作られている事も分かった。

落堀川の二段落ちの段差が、一旦階段状に削り出してからそこに盛土するなど、その造成当初の形態が判明したのは初の成果ではないだろうか。

また、大和川付け替えという大事業にも関わらず、落堀川との間に取り残される耕地に関しても細かい配慮がなされている事が分かったのも貴重な成果と言える。

近世は文学史料が膨大な量である時代だが、それでも考古学的な発掘調査でないと判明しない事もあるという好例であろう。

5. まとめ

今回の調査地点で、確実な耕地開発は「難波大道」廃絶後、10世紀代にまでしか遡れない結果になったのは意外であった。

しかし、その耕地開発も大道を地割りの基本線として使用し、大道ライン両側に、東西幅に余剰帯を含む坪が並ぶ現状は、条里制地割りの設計自体は「難波大道」存続期間になされている事を示す。おそらくは住吉郡・丹比郡北部など郡単位の条里制地割りの割付が、大道存続期にそれを基本ラインとして成されているのであろう。

だが、坪一辺の長さの基本は109mであり、それが飛鳥時代に遡る可能性は低いようである。おそらくは奈良時代の事であろうが、その時期の特定も今後の課題として残る。

耕地化の遅い原因は、今回の調査で低位段丘平坦面である事が判明した大和川今池遺跡北西部の立地的な問題であろう。最大の理由は給水のしにくさと思われる。

また、その耕地開発が、坪境ラインのずれや、変則的な地割りを当初から含む、整然としたとは言えない形で行われた事は興味深い問題を含むと思われる。

それは統一的な計画性や技術の欠如ではなく、耕地開発に関わる人々の権利関係が反映された時代的な特色が現れていると見る事ができるからである。

その後の耕地の変遷も、細かな水利網の発達から個々の耕地区画の独立性の高まりを見る事ができる。それらの事象が、耕作主体である農民層の経営形態とどのように関わっているかを考えるのは今後の課題であろう。

加えて大和川付け替えに関する調査が行えたのは貴重な例となった。文献では確認できないその実態の一端を明らかにできたと言えるであろう。

耕作地関連として残る最大の課題は「難波大道」以前の耕作の実態である。

筆者は以前、大和川今池遺跡・堀遺跡・南新町遺跡・三宅遺跡に囲まれた範囲を「依網屯倉」と推定し、その成立は6世紀中葉以降ではないかと考えた事があった。西除川旧流路が開析谷から沖積平野に氾濫原を広げる部分に当たる。また、河内台地の台地上に耕地開発が進行するのは狭山池築造以降7世紀からであるとした²⁰。その考えに今も基本的に変りはなく、依網池も狭山池と同じく推古朝に作られ

た可能性が高いと考える。

「依網屯倉」の耕作地は大和川今池遺跡で言えば、北東部の旧西除川氾濫原部分に当たる。その部分では今のところ奈良時代の耕作地の痕跡が上限であり、氾濫原の性格上、古い遺構が残りにくい点はあるが、今後の調査に期待したい。遺跡北西部の低位段丘上は河内台地と同じく、古墳時代まで遡る耕作地の確認は難しいかもしれない。ただし、沖積平野縁辺であるので、開折谷内の小規模な谷底平野などに古い耕作地が存在する可能性はあると考える。

第3節 その他の成果

1. コンポリュートラミナ

今回の調査では、既往の調査で「細かな凹凸」「小コブ状隆起」「踏み込み」などと呼ばれていたものがコンポリュートラミナであり、第2層から第6層上部に見られる事を明らかにでき、それが、14世紀頃の地震痕跡の可能性が高い事を指摘する事ができた。

これはたまたま調査者が経験と知識を持っていただけの事であるが、この認識があるのとないのとでは、調査内容に差が出てくるおそれがある。

まず、これを「踏み込み」と捉えると、第6層などは非常に軟弱な層であり、第6面は全面湿地状態であるのに無数の踏み込みがある、すなわち全面湿田が展開していたような事になってしまう。

堆積後の変形であるので、凹凸で乱れてはいても場合によっては細かな段差なども遺存している事がある。また、コンポリュートラミナの激しさの差によってどうしても面の検出にも凹凸が出るが、それを割り引いて本来の地形を推測する必要がある。

上層の沈下はその中の包含遺物の重量により引き起こされているらしく、ピット状の沈下部分に遺物が含まれる事が多いので、例えば第3面の遺構を検出した後、その面を掘削して沈下した部分の遺物を第2層のものとして取り上げる必要などが実際にあった。

加えて、遺構埋土内のコンポリュートラミナを水成堆積のラミナと混同したり、下層が巻き上がって上層内にちぎれたものを人為的埋土のブロックと誤認する恐れもある。

今後の調査では以上の事を認識し、対処していく必要がある事を指摘しておく。

2. 下層確認による立地の確認

今回の調査地点が、近隣の大阪市山之内遺跡の調査や、2トレンチの下層確認、花粉・珪藻分析などにより低位段丘上である事が判明したのは極めて重要である。

大和川今池遺跡内は段丘面とそれを浸蝕した開折谷、そして氾濫原を主体とした沖積平野の部分があるのは分かっているが、低位段丘崖と認識できる段差がなく、その細かな実態はほとんど不明と言える。実際、現存の地形分類図では、今回の調査区は氾濫原の中になる。

今回、調査区より東に埋没段丘崖が存在する可能性が高くなり、調査区周辺の遺跡北西部は低位段丘平坦面に立地している事が分かった。

調査区より南で今池の北東角をかすめ北西から南東に伸びる砂層が確認されており、流路と考えられているが、それも低位段丘を最終氷期に浸蝕した開折谷が埋没したものか、それよりはるかに古い堆積か、沖積平野内の旧流路かも判然としない。

遺跡の東側の沖積平野に当たるはずの部分でも「地山」とされる黄褐色粘質土層がしばしば見られる

ようだが、大阪市長原遺跡の例を見ると沖積平野内にも縄文時代頃の分厚い黄褐色粘質土層があるようで、下層確認をしない限り、埋没した低位段丘構成層と判別のつかないおそれがある。

そもそも「地山」という概念は考古学的に何の意味もない。既往の調査でも「地山」であろうからと、その上面で調査を終了しているために、遺跡内の地形の認識が進んでいないと言える。

また、上部包含層で土蘇や国府型ナイフ形石器が確認されているのに、遺跡内で弥生時代中期以前の遺構・遺物が極めて希薄なのは、調査深度が足りていないのではないかと懸念もある。

今回確認した第6・7層は低位段丘構成層最上部であり、当然後期旧石器時代の遺物を包含する可能性がある。今回の限られた範囲では無遺物であったし、全面その深度まで調査するのは困難であるかとも思われるが、部分的にせよ下層確認とその堆積時期の解明は必要であると提起しておきたい。

3. まとめ

以上の事も含め、今回の調査で経験した事と既往の調査を比較し、今後の大和川今池遺跡の調査で留意すべき点をあげておきたい。

既往の調査では遺構検出を一つの面で行っていないものが多いが、その調査区断面図を見ると、検出面の上に数層の耕土らしき層が重なっている図もある。また、そういった所で、平安時代以降の溝などがかなり削平されて浅い状態で検出されたりもしている。中世頃の耕土や面が残っている部分が多いのではないだろうか。

擾乱が少ない限りは、基本的に現代耕土の床面から段階的に平面的調査をするのが良いと思われる。また、そうでないと耕地区画の変遷も追えないであろう。坪境も古代から現代まで同位置にあるものが多いといっても、今回の調査のように途中から水路が付随してくるなどの変化も把握する必要がある。

既往の調査を見ると、意外と平安時代から中世にかけての溝や土塁に囲まれた屋敷地が見落とされているような気もする。掘立柱建物群のまわりに、浅い溝のようなものが切れ切れにあったり、道ではないかとされる盛土が巡っていたりするものがある。大道が検出される面よりも1層ほど上の面で検出すると明らかになるのではないだろうか。

また、コンポリュートラミナの及んでいる範囲を早めに見極め、それによる面の変形や、包含遺物の錯綜に留意しながら調査を進める必要がある。遺構の切り込み面や、土土の観察もそれを踏まえて行う必要がある。

そして、調査地点の立地を確認する事も重要である。「地山」という概念は捨てて下層確認をする事が、この遺跡では特に必要である。弥生時代中期以前の遺構・遺物の追求のためにも、耕作適地の変遷を考える上でも、遺跡内の地質図を作成する資料となる調査が必要である。

砂層なども上面で確認しただけで流路と決め付けず、必ず断ち割りを入れてみる必要がある。

下層確認において、今回の調査で花粉・珪藻分析はかなり有効であった。また、火山灰の有無などにも注意を払う必要がある。

立地が確認できれば、開析谷内や沖積平野では特に、耕地がどの時期まで遡るかに留意しながら調査を進める必要がある。

大和川今池遺跡は、我孫子台地と河内平野の接点にまたがる遺跡として、その地形・立地に複雑さを秘めている。加えて河内を東西に横断するルートと上町台地から南下するルートの接点、天然の良港であった住之江の後背地としても複雑な歴史を持ち、依網屯倉や「難波大道」に関わる遺跡である。

また、狭山池を頂点として古代から発達してきた灌漑体系の中で重要な位置を占める依網池と隣接し、かつ、付け替えられた大和川が遺跡内を横断するなど、水利関係の歴史にも関わりが深い。

このような複雑な遺跡を理解するためには、蓄積された成果も絶えず間直し、新しい成果と照合していく必要がある事を強く感じる調査であった。

註・参考文献

- 1) 「大和川・今池遺跡Ⅲ」 1981年 大和川・今池遺跡調査会
- 2) 「大和川今池遺跡発掘調査概要・XⅡ」 1995年 大阪府教育委員会
- 3) 「大和川今池遺跡(その1・その2)」 2000年 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 4) 「石神遺跡第19次調査現地説明会資料」 2007年 (独)奈良文化財研究所
- 5) 岩木次郎「古道 飛鳥から難波へ」『季刊 飛鳥風 第9号』 1983年 (財)飛鳥保存財団
- 6) 「曲金北遺跡(遺物・考察編)」 1997年 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 7) 「東の上遺跡」 1976年 所沢市教育委員会
- 8) 「毎日新聞」2009年3月28日
- 9) 木本雅康「古代道路に規制されて斜めの方位をとる建物について」『考古学ジャーナルNo.566』2007年 ニューサイエンス社
- 10) 木下良「古代日本の計画道路－世界の古代道路とも比較して」『地学雑誌110(1)』 2001年 東京地学協会
- 11) 「奈良新聞」2009年2月19日
- 12) 「大道西遺跡 現地説明会資料」 2009年 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 13) 「難波宮址の研究 第十三 -前期・後期朝堂院の調査-」 2005年 (財)大阪市文化財協会
- 14) 横山洋「難波京の方格地割りをさぐる」『郵政考古紀要 XⅣ』 1997年 大阪・郵政考古学会
- 15) 上村昌男「東京都国分寺市恋ヶ窪谷低地の道路遺構」『古代交通史研究9』 1999年 古代交通研究会
- 16) 3) に同じ
- 17) 14) に同じ
- 18) 道路幅を取り込んで幅が広がった分を「余剰帯」として、条里制地割り坪の分析により、「難波大道」や大津道・丹比道のラインを析出したものとして下記の論文がある。
金田章裕「長尾街道・竹内街道の測設と条里プラン」『長尾街道・竹内街道 歴史の遺調査報告書第3集』 1988年 大阪府教育委員会
- 19) 「大和川今池遺跡(その5・その6・その7)」 2003年 (財)大阪府文化財センター
- 20) 「郡戸遺跡」 2003年 (財)大阪府文化財センター